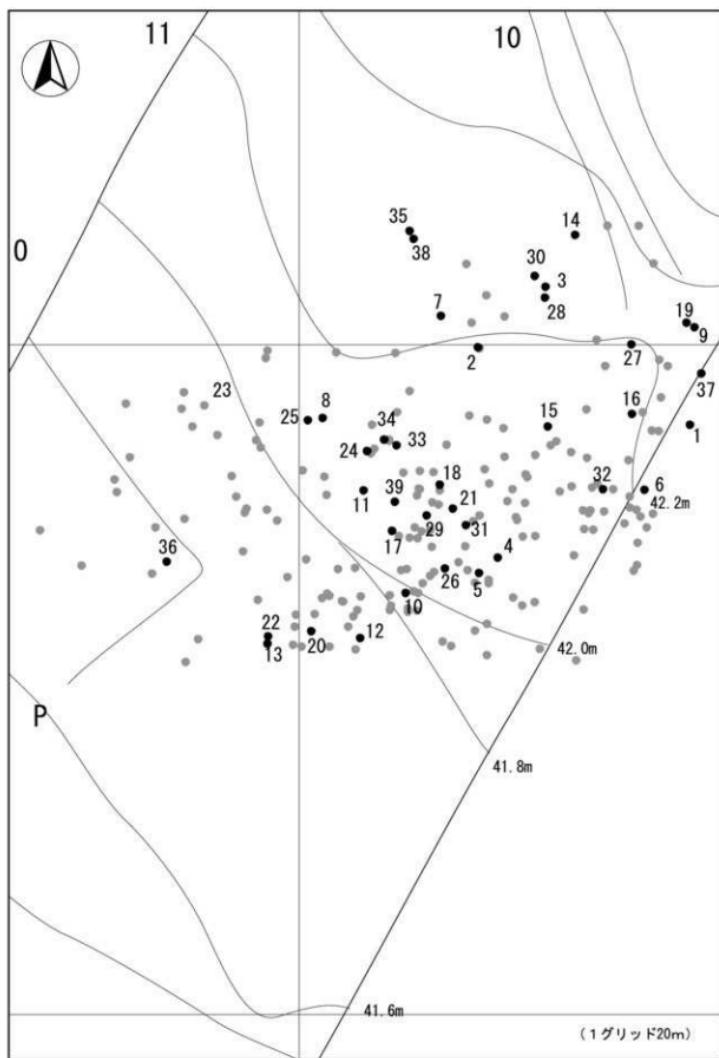
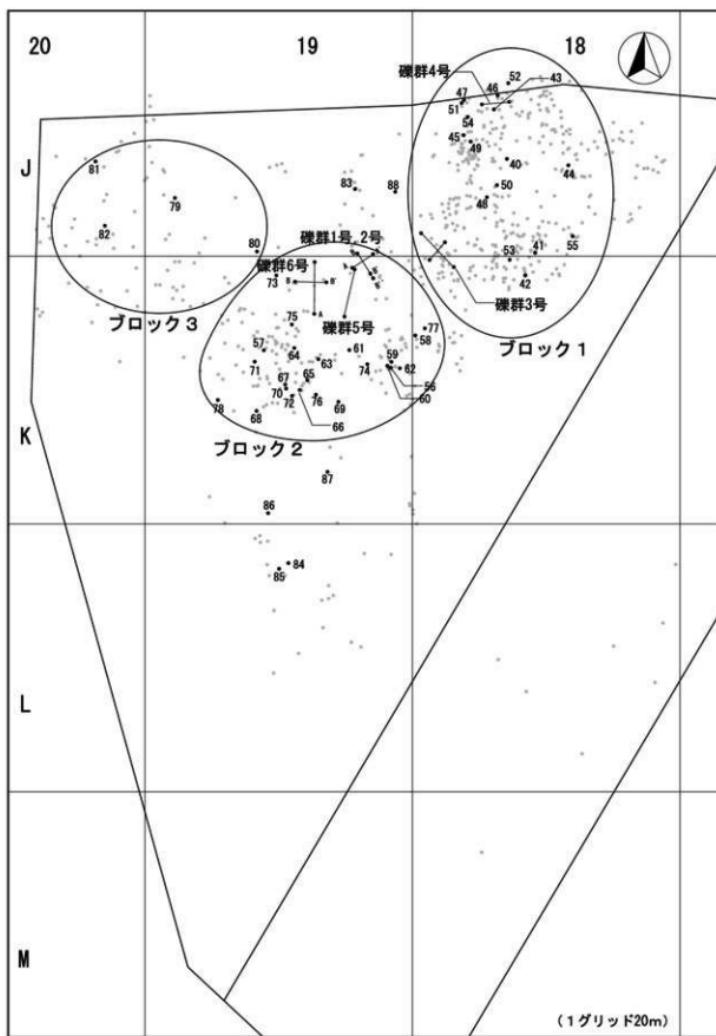


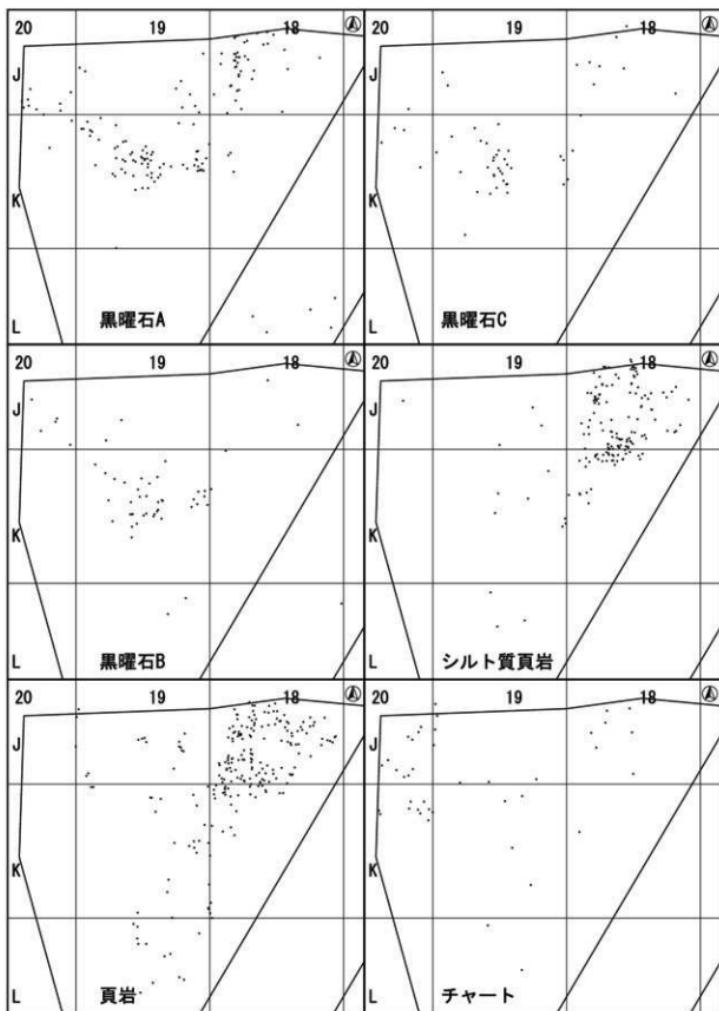
第3図 土層断面



第4図 東側調査区（0-10区～P-11区）遺物出土状況図



第5図 旧石器時代遺物出土状況図・遺構配置図



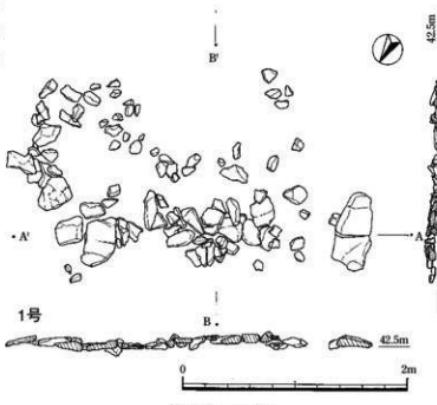
(1グリッド20m)

第6図 石材毎の分布図

## 第2節 遺跡の層序

宗円堀遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群の基本的な層序と同一である。主な時代と包含層、遺構・遺物は以下の通りである。

- ・ 平安時代～中世（Ⅱ層）  
　　溝
- ・ 繩文時代晚期（Ⅲ～Ⅳ層）  
　　柱列・土坑  
　　土器・石器・装飾品
- ・ 繩文時代中期～後期（Ⅳ層）  
　　土器
- ・ 繩文時代早期（Ⅳ層）  
　　集石  
　　土器・石器
- ・ 旧石器（Ⅴ層）  
　　砾群  
　　石器・剥片



第7図 砂群1

## 第3節 発掘調査の方法及び概要

宗円堀遺跡は平成12年度に調査を行った幹線道路部分と、平成14年度に調査を行った園花半畠西側の尾根状の台地部分（西側調査区）と東側調査区の3つに分けられる。西側調査区は旧道路により南東側が一部カットされている。幹線道路部分東側調査区の北東側が譲訪臨遺跡と隣接する。

本調査前の状況は、西側調査区が南東方向に傾斜して荒れ地で、東側調査区は用地買収後に荒れ地化したほぼ平坦な旧畠地であった。調査のためのグリッドは20m×20mで設定し、遺跡地内の東側から1, 2, 3…とし、北側からA, B, C…とした。

調査面積の調査はI層を重機により除去し、II～X層上面までを人力で行った。II層からは平安時代～中世の溝が検出されたが、遺物は出土しなかった。III～IV層からは、縄文時代晚期の土坑や柱列が検出された。西側調査区で検出された土坑内からは、上加世田式土器に比定される土器が大量に出土したほか、管玉も2個出土している。柱列は東側調査区に集中している。V層からは、西側調査区で縄文時代中期～後期の土器（市来式他）が出土している。

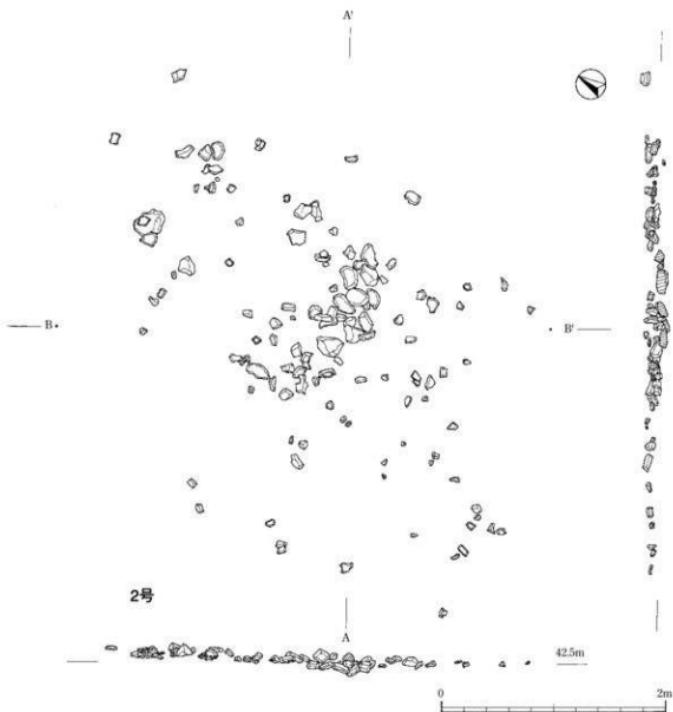
また、縄文時代早期の土器（吉田式・石坂式）や石器類も大量に出土している。その他縄文早期のものと思われる集石も3基検出されている。V層からは、幹線道路部分で旧石器時代（ナイフ形石器文化期）の石器類が出土した。ブロックは確認されなかった。また、西側調査区からは旧石器時代の包含層が2枚（細石器文化期・ナイフ形石器文化期）が確認され、特に細石器文化期の石器類がまとまった形で出土している。

## 第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代は、西側調査区で遺構・遺物が、東側調査区で遺物が出土した。西側調査区では、細石器文化期に相当するとと思われる砾群6基が検出された。細石刃や細石刃核等の遺物も集中して出土しており、ブロックも3か所確認された。その他、ナイフ形石器も3点出土している。

### （1）遺構

西側調査区V層上面で砾群を6基検出した。4号砾群はJ-18区とやや離れるが、他の5基はJ-19区とK-19区のグリッド境に集中して検出された。



第8図 碓群2

#### 1号碓群（第7図）

K-19区Ⅱ層中位で検出されたもので、長径180cm、短径70cmを測る。15cm×35cm大の大型の礫をはじめ、拳大よりやや大きめの礫が十数個と、10cm×10cm以下の小型の礫が混在して構成される。礫は平面的に検出されており、埋り込みは確認されなかつた。

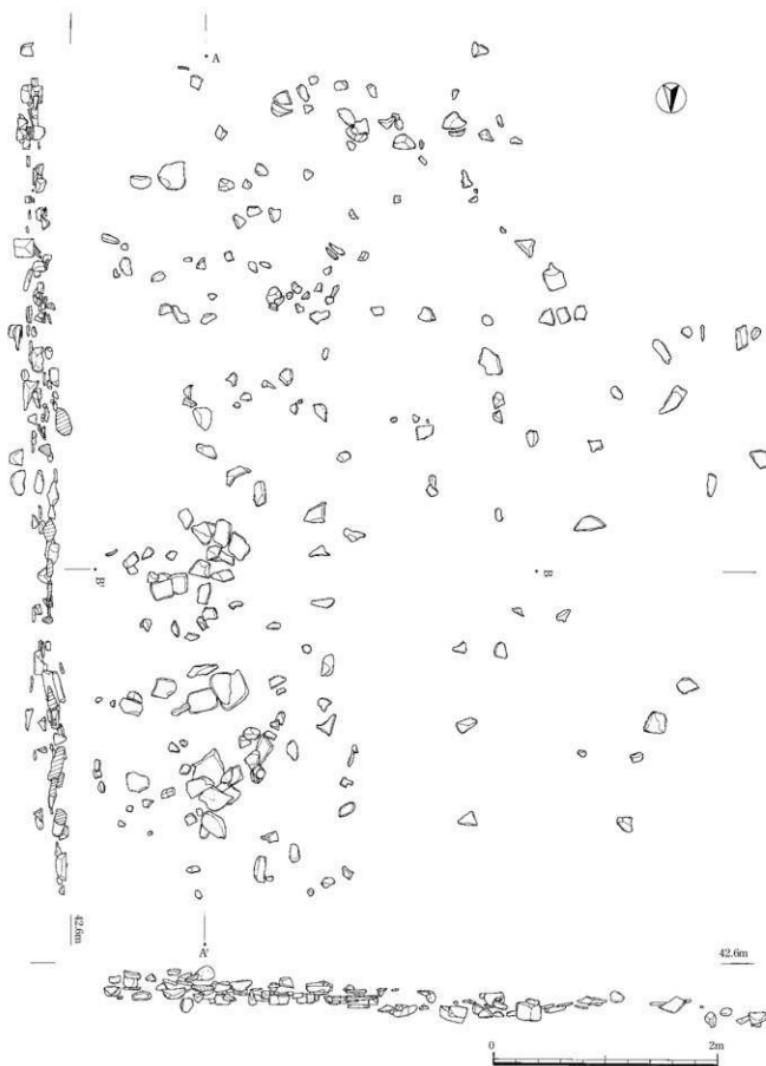
#### 2号碓群（第8図）

K-19区Ⅱ層中位で、1号碓群と一部重なる状況で検出されたが、礫の集中域が1号と重ならず2つ

に分けられたため、別々の碓群として取り扱った。礫の集中域には拳大程度の角礫が数個重なっているが、他は10cm未満の角礫が平面的に散在する。集中域は長径90cm×短径50cmを測る。埋り込みは確認されなかった。

#### 3号碓群（第9図）

J-18区とK-19区のグリッド境Ⅱ層中位で検出された。20cm×15cm大の大型の角礫数個の他、拳大程度の角礫が平面的に散在するもので、埋り込みは見られなかった。



第9図 石群3

#### 4号礫群（第10図）

西側調査区の北側、K-18区礁層中位で検出された。拳大程度の角礫が十数個集中している箇所も見られるが、それ以下の小礫は数が多く、平面的に広く散在している。礫の集中域は150cm×80cmを測る。掘り込みは確認されなかった。

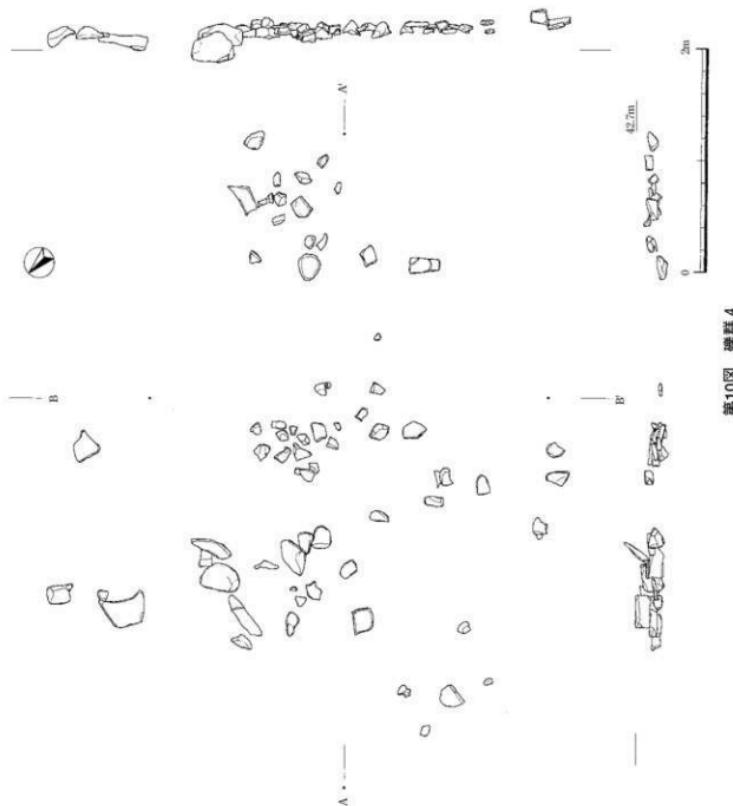
#### 5号礫群（第11図）

K-19区礁層上面で、拳大程度の角礫が平面的に

密集して検出された。長径150cm×短径100cmの梢円形プランを呈する。掘り込みは見られなかった。

#### 6号礫群（第12図）

K-18区礁層中位で検出された。礫群として取り上げたが、基盤の熔結凝灰岩の上で火を焚いた痕跡が残るものである。火を受けた部分は赤く変色しており、炭化物も見られた。



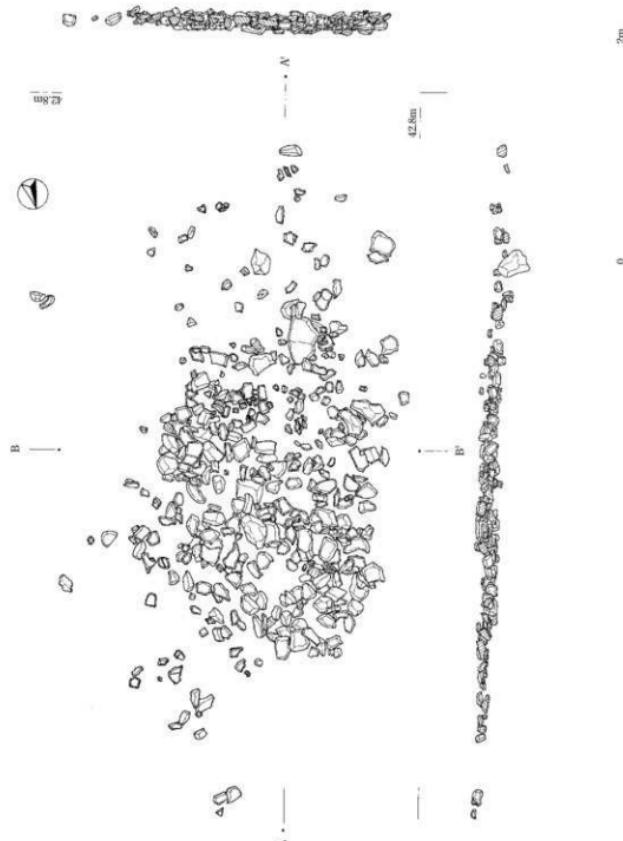
第10図 細粒4

## (2) 遺物

宗円堀遺跡の旧石器時代の遺物は、遺跡の東側の範囲と西側の範囲で出土している。東側は、調査範囲全面に遺物が散在しており、明確なブロックは確認できなかった。西側では、石材分類を行ない、それぞれの集中区を検出したところ、3つのブロックを確認できた。

なお、黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに、下記のように分類を行なった。

黒曜石A・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。樋脇町上牛鼻産に類似する。  
黒曜石B・・・黒色、アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。



第11図 縦断5

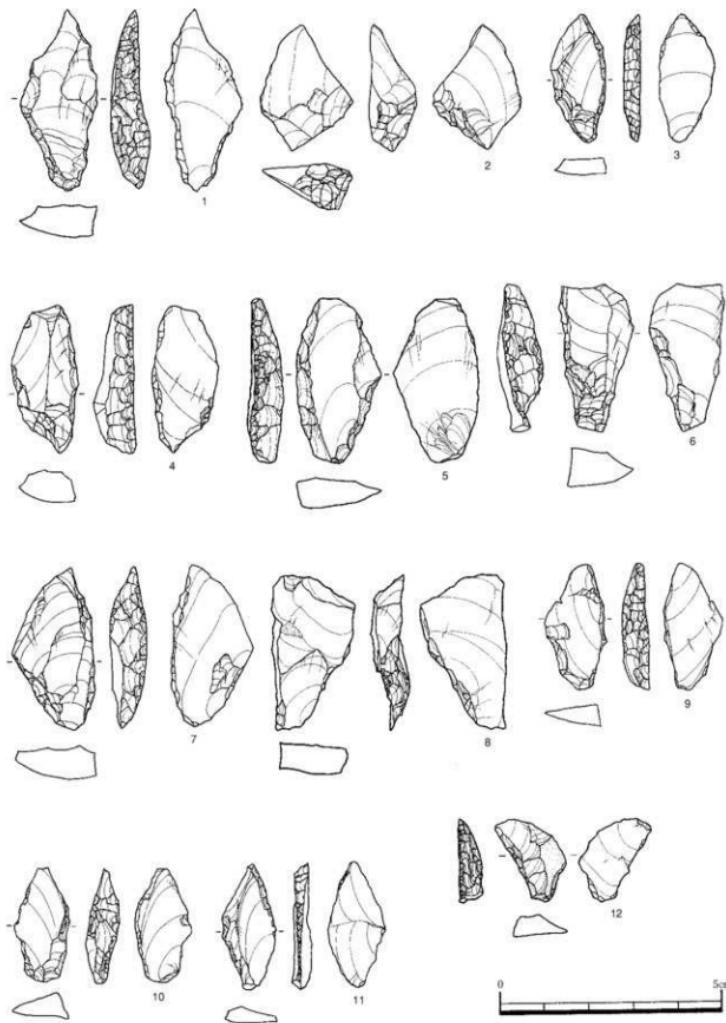


第12図 磕群6

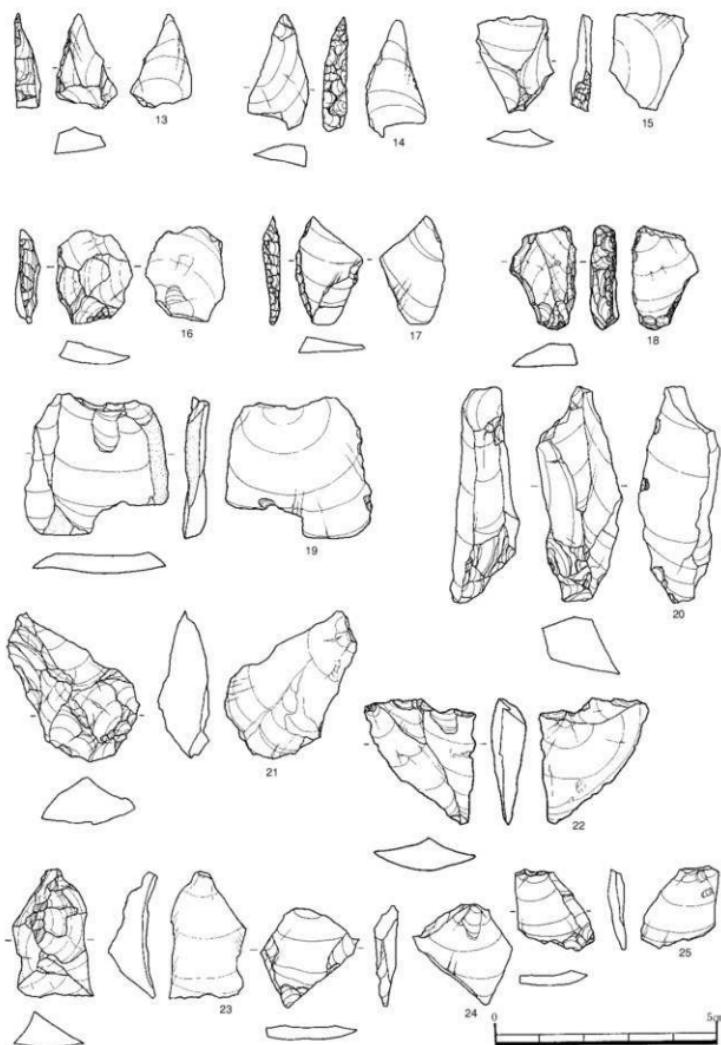
- 黒曜石C・・・黒色、ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。
- 黒曜石D・・・全体的に灰色で黒色の筋が入る。光沢がある。
- 黒曜石E・・・半透明のガラス質で、不純物が少ない。桑ノ木津留産に類似する。
- 黒曜石F・・・黒色で縞状の筋が透けて見える。不純物はほとんどない。
- 黒曜石G・・・灰色かったガラス質で、縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が、わずかに含まれる。
- 黒曜石H・・・光沢のある黒色で、極小の黄色い粒が筋状に入る。

#### 東側調査区（第13～17図1～39）

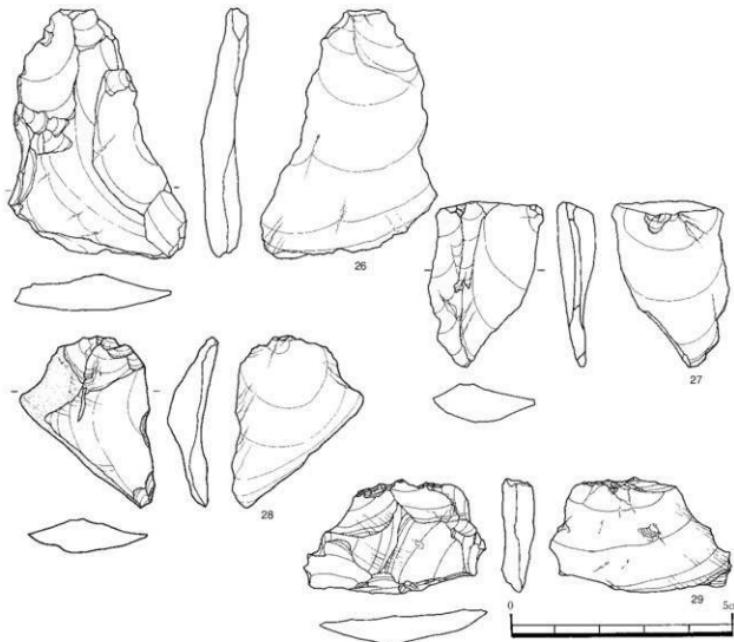
1～18はナイフ形石器である。石材の選択は、玉髓製のものが多く見られる。1は玉髓の縦長剥片を利用し、基部を細かな剥離で形成している。右側面にブランディングを施す。2は下部が膨らむ横長剥片を素材としている。右側縁下部に裏面からの加工を施す。3は黒曜石製。右側縁に細かな剥離を施している。先端部に使用痕を観察できる。4は玉髓製。先端部を打点として剥ぎ取ったやや厚みのある剥片を素材としている。5はシルト質頁岩の縦長剥片を素材とし、右側面に細かな調整を施す。6は基部に細かい加工を施し、左側縁にブランディングを施す。7は横長の剥片を素材とし、左側面に正面から細かな剥離を形成している。8は縦長剥片の打点を基部



第13図 旧石器 1



第14図 旧石器 2

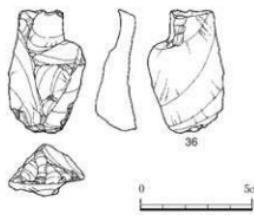
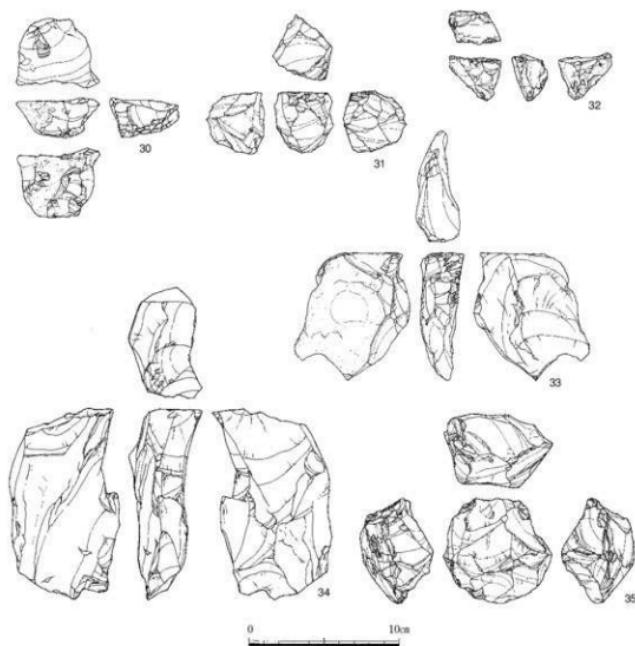


第15図 旧石器 3

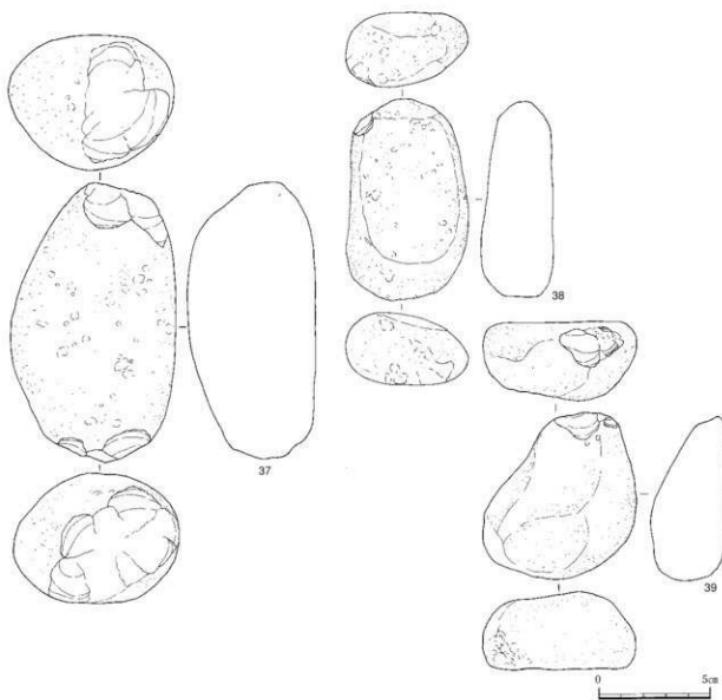
として加工している。先端部には使用痕が観察される。9は玉髓製。右側縁部全体にプランディングが施される。左側縁部下部にも細かな調整を施し、基部を形成している。10は鉄石英製。右側面に細かな剥離が観察される。左側面上部には、使用痕が観察できる。11は左側面下部に細かな剥離を施し、基部を加工している。12は左側縁にプランディングを施す。13は縦長剥片を素材とし、基部が平坦である。左側縁部に正面から加工を施す。14は右側縁部に正面と裏面より細かな加工を施す。15は薄い剥片を素材として、下部に基部調整を施す。上部・両側縁部

は薄く、細かな調整は見られない。17は薄い縦長剥片を素材とし、左側縁に裏面より細かな加工を施している。18は黒曜石製。縦長剥片を素材とし、左側縁上部には使用痕が観察できる。

19~29は剥片である。19・26~29はシルト質頁岩製、それ以外は玉髓製である。19は薄い縦長の剥片で、左側縁部に細かな使用痕が確認できる。20・21は下部に細かな剥離を施しており、ナイフ形石器の製作途中の可能性が考えられる。22・23はいずれも上部より打撃を加えて剥片を取り出し、その後細かな剥離を施している。24・25は薄い剥片である。下



第16図 旧石器 4



第17図 旧石器 5

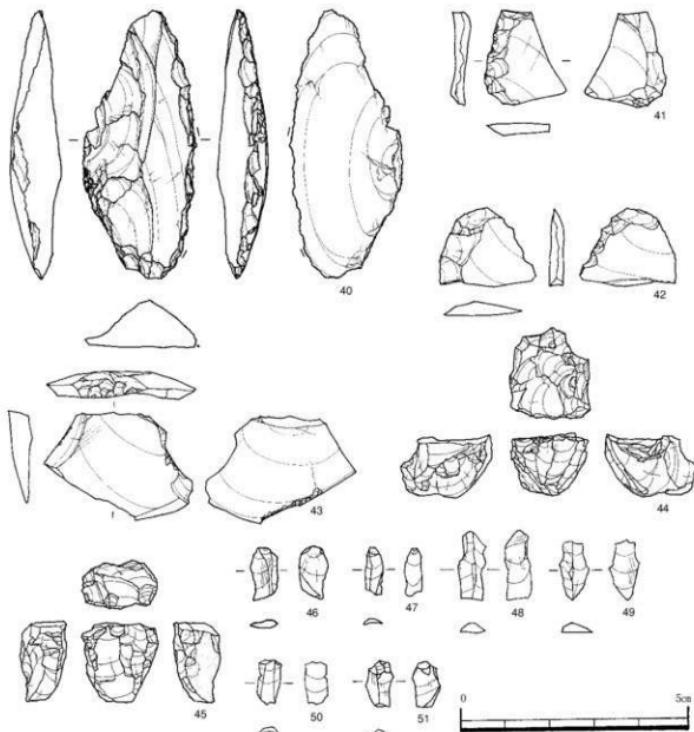
部に細かな剥離を観察できる。26は継長の剥片を素材とし、左側面に正面からの加工を施す。27・28は継長の剥片で、使用痕は確認できない。29は横長の剥片で、上部に細かな剥離が観察できる。

30~35は石核。30~32は玉鮎製、33~35はシルト質頁岩製である。30は自然面を残すもので、正面の下方向より剥片を剥ぎ取っている。31は打面を転移させながら剥片を剥いでいるものである。32は上部の平坦面を打点として剥片を剥いでいるものである。33は下部からの打撃で母岩より取り出したものであ

る。上部を平坦に加工し、継方向に剥片を剥ぎ出している。34は継長のもので、上面・下面・右側面から剥片を取り出している。35は拳大のもので、主として正面から剥ぎ取っている。

36は玉鮎製のスクレイパーである。継長の剥片の下部を正面から加工し、刃部を形成している。

37~39は敲石である。37・38は安山岩製。39は砂岩製。37は継長の円錐で、長軸の両端広範囲に敲打痕が認められる。38は長軸両端に細かな敲打痕が認められる。39は上部に大きめの敲打痕、左側縁下部



第18図 旧石器 6

に細かな敲打痕が認められる。

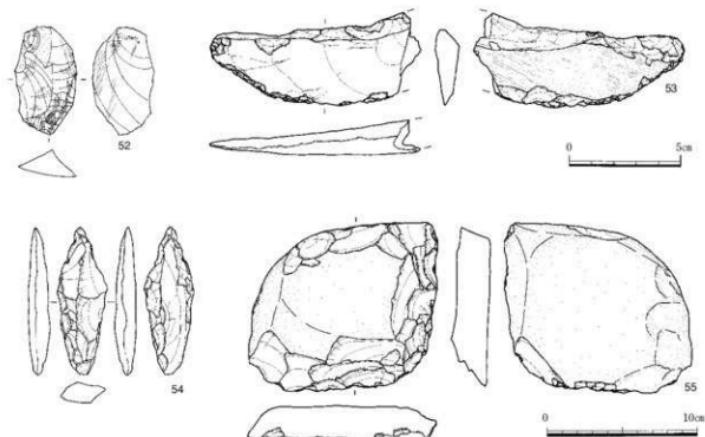
西侧調査区（第18～24図40～88）

ブロック1（第18～19図40～55）

J・K-18区にまたがる約16m×18mの範囲で、シルト質頁岩・頁岩が多く出土している。

40は頁岩製のナイフ形石器。横長剥片を素材とし、右側縁部に基部から先端部に向かって細かな加工を施す。41～43は使用痕剥片。41は左側縁部に、42は

両側縁部に使用痕が観察できる。43は横長の薄い剥片を素材としている。下面に使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。44・45は細石刃核。44は上面を右方向から打面調整を行なっている。45は上面が平坦な打面で、正面の作業面とほぼ垂直に交わる。右側面に自然面を残す。46～51は細石刃。47は使用痕が確認できる。49は鉄石英製。52は黒曜石であるが、産地の特定が困難なため、石材の参考資料とし



第19図 旧石器 7

て掲載した。灰色がかったガラス質で、縞状の筋が入る。極小の黄色い粒が、わずかに含まれる。53はシルト質頁岩製のスクレイパー。横長剥片を真中で切断または欠損し、弧を描く正面の下部に剥離を施している。剥離は先端部に行くほど細かなものになる。54は表面が風化している頁岩製の尖頭器である。両側縁部は裏面からの二次加工。および先端部と基部は稜上加工により整形される。55は頁岩製の礫器である。平坦な円錐の自然面をほぼ残し、右側縁部と下面に比較的粗い二次加工で刃部を形成している。

#### ブロック2 (第20~22図56~78)

K・18・19区にまたがる約16m×22mの範囲で、三船塚類似・日東塚類似の黒曜石が多く出土している。

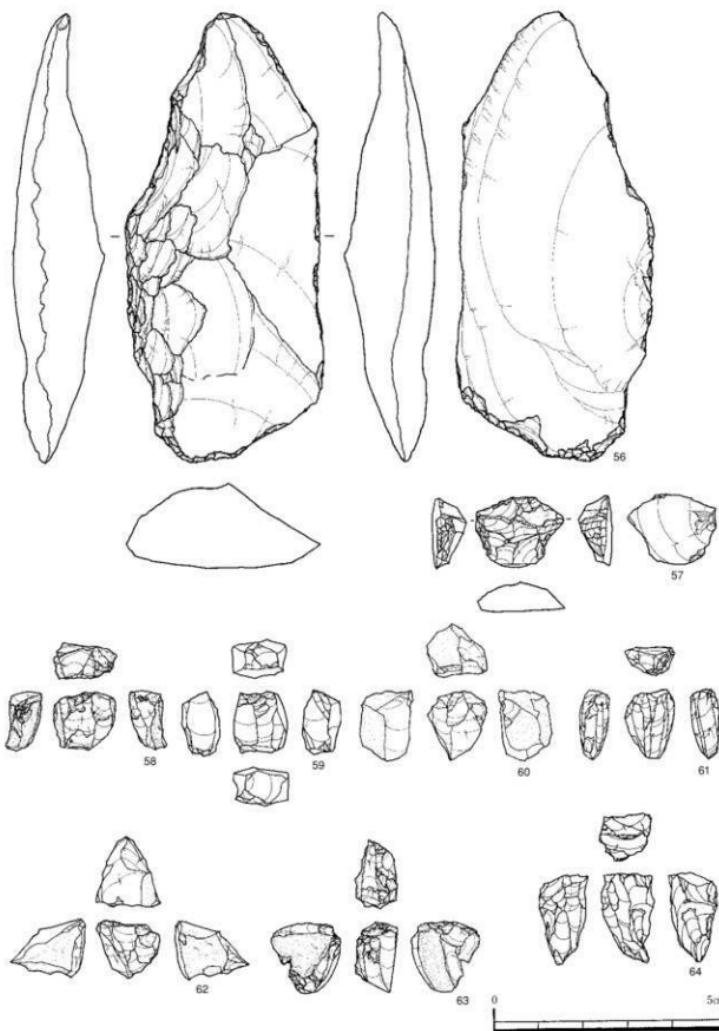
56は大型のナイフ形石器である。頁岩製の横長剥片を素材としている。表面は風化している。左側縁部及び基部に細かな二次加工を施している。右側縁部から先端部にかけて使用痕が観察できる。57は台形石器。両側縁部及び上面に正面からプランディングを施す。58~72は細石刃核。作業面が1cm程度の小さなものが多い。58は作業面に対して打面が狭い。59は主作業面は正面であるが、裏面および右側面に

剥離痕がある。60は正面以外の面に自然面を残すものである。61は主作業面は正面であるが、両側面にも剥離痕があり、作業面と平行な裏面を有する。62は打面が後方に傾斜している。63は作業面が狭い。64は継長の石核を素材としたもので、作業面と平行な裏面を有する。65は上面に打面調整によるものと思われる細かな剥離を観察できる。66は打面がV状に凹んでいる。67は継長の作業面を有するもので、下部に行くに従って窄まる。68は左側面に自然面を残すものである。69は上面・正面・下面に作業面が残るものである。70は残存作業面が1.2cmと小型のものである。下部に行くに従って窄まる。71・72も小型のもの。71は打面が後方に傾斜し、作業面が菱形に残る。72は左側面・裏面に自然面が残るものである。73~77は細石刃。74・75は使用痕と思われる微細な剥離が観察できる。78は継長剥片を素材とするスクレイパーである。右側面に細かな剥離を施し、横断面が三角形を呈す。

#### ブロック3 (第23図79~82)

J・K-19・20区にまたがる約20m×10mの範囲で、チャートの出土が目立つ。

79は細石刃核。作業面は正面であるが、打面は作



第20図 旧石器 8



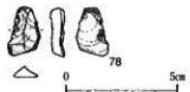
第21図 旧石器 9

業面に対して左側面及び後方に傾斜している。80～82はチャート製の細石刃である。使用痕は肉眼では観察できない。

その他（第23～24図83～88）

83は上牛鼻類似黒曜石の細石刃核。上面に平坦な打面を有し、作業面とほぼ垂直に交わる。84は三棱尖頭器である。裏面は剥離面をほぼ残し、先端部は正面からの二次加工と稜上加工によって整形される。85は大型の台形石器である。横長で、下部に厚みのある剥片を素材としている。両側縁下部に正面

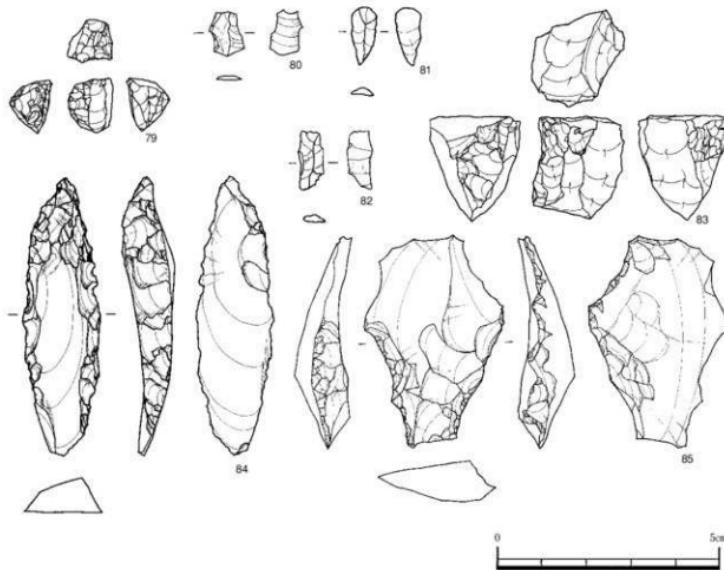
からの、右側面全体に裏面からの細かな加工が観察される。86・87はスクレイパーである。86は自然面を残す縁を、ほぼ加工せずに使用している。87も自然面を残すもので、右側面・上面に加工を加えて整形している。下部となる刃部には、使用痕と思われる細かな剥離が観察できる。88は裏面に平坦な自然面を残す頁岩製の鏝器である。正面は大きな剥離で整形した後、細かな剥離で刃部を形成している。



第22図 旧石器10

旧石器時代石器観察表

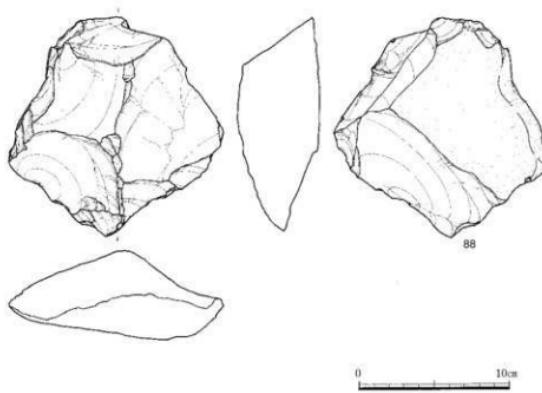
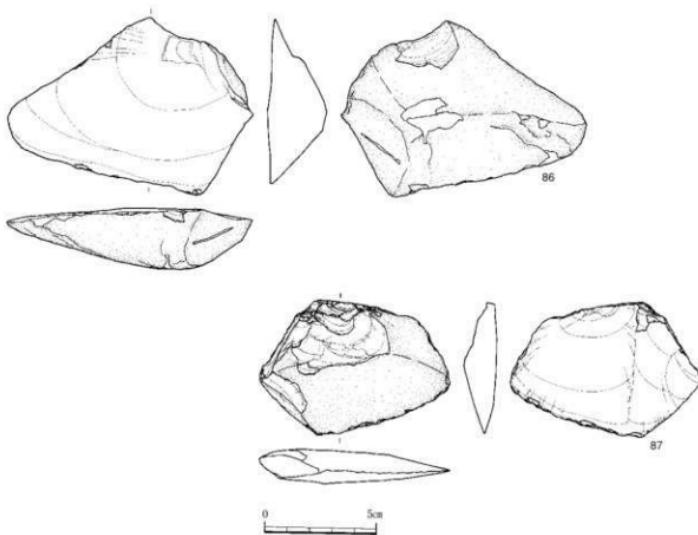
探査番号	報告番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第13回	1	P-9	Ⅴ	ナイフ形	玉髓	4.05	1.7	0.8	4.5	
	2	O-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.85	2.05	1	3.6	
	3	O-10	Ⅵ	ナイフ形	黒曜石D	2.9	1.25	0.35	1.3	
	4	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	3.3	1.5	0.95	4	
	5	P-10	Ⅵ	ナイフ形	シルト質頁岩	3.7	1.9	0.8	4.7	
	6	P-9	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	3.3	1.7	1	4.2	
	7	O-10	Ⅵ	ナイフ形	チャート	3.65	1.85	0.8	4.4	
	8	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	3.45	1.9	0.6	4.9	
	9	O-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.8	1.4	0.6	1.7	
	10	P-10	Ⅵ	ナイフ形	鈍石英	2.55	1.25	0.7	1.6	
	11	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.8	1.2	0.4	1.1	
	12	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	1.85	1.6	0.4	1.2	
	13	P-11	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.1	1.4	0.55	1.4	
第14回	14	O-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.6	1.4	0.5	1.1	
	15	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.15	1.75	0.5	1.2	
	16	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.1	1.7	0.6	1.6	
	17	P-10	Ⅵ	ナイフ形	玉髓	2.45	1.6	0.4	1	
	18	P-10	Ⅵ	ナイフ形	黒曜石E	2.3	1.5	0.7	2	
	19	O-10	Ⅵ	加工底剥片	シルト質頁岩	3.15	3.25	0.5	4.3	
	20	P-10	Ⅵ	加工使用底剥片	シート	4.8	1.9	1.45	9.5	
	21	P-10	Ⅵ	剥片	玉髓	3.3	2.9	1.15	6.1	
	22	P-11	Ⅵ	剥片	玉髓	2.8	2.45	0.8	3.2	
	23	P-11	Ⅵ	剥片	玉髓	2.9	1.8	1.05	3.2	
第15回	24	P-10	Ⅵ	剥片	玉髓	2.25	2.25	0.6	1.6	
	25	P-10	Ⅵ	剥片	玉髓	1.85	1.8	0.4	0.8	
	26	P-10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	5.65	4	1.05	15.3	
	27	O-10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	3.7	2.6	0.85	6.3	
	28	P-10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	3.8	3	0.8	5.3	
第16回	29	P-10	Ⅵ	剥片	シルト質頁岩	2.6	4.2	0.7	23.5	
	30	O-10	Ⅵ	石核	玉髓	4.6	5.65	2.5	58.6	
	31	P-10	Ⅵ	石核	玉髓	4.6	4	4.4	55.2	
	32	P-10	Ⅵ	石核	玉髓	3.1	3.5	2.4	15	
	33	P-10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	8.6	2.9	7.8	145.8	
	34	P-10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	12.9	5	8.2	342.1	
	35	O-10	Ⅵ	石核	シルト質頁岩	7.1	7.3	4.9	217.4	
	36	P-11	Ⅵ	スクリーパー	玉髓	5.5	3.4	2.3	26.4	
第17回	37	P-9	Ⅵ	ハンマー	安山岩	12.6	7.4	5.9	699.9	
	38	O-10	Ⅵ	ハンマー	安山岩	9.1	5.5	3.2	226.4	
	39	P-10	Ⅵ	ハンマー	砂岩	7.5	6.9	3.5	217.4	
	40	J-18	Ⅵ	ナイフ形石器	安山岩	6.04	2.58	1.16	13.5	
第18回	41	J-18	Ⅵ	使用底剥片	シルト質頁岩	2.15	1.75	0.3	1.33	
	42	K-18	Ⅵ	使用底剥片	シルト質頁岩	1.8	2.1	0.35	1.26	
	43	J-18	Ⅵ	使用底剥片	黒曜石F	2.4	3	0.5	3.46	
	44	J-18	Ⅵ	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.7	1.9	4.7	
	45	J-18	Ⅵ	細石刃核	黒曜石A	1.8	1.7	1	3.55	
	46	J-18	Ⅵ	細石刃	黒曜石G	1.2	0.8	0.15	0.12	
	47	J-18	Ⅵ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.4	0.1	0.06	
	48	J-18	Ⅵ	細石刃	鈍石英	1.35	0.6	0.25	0.12	
	49	J-18	Ⅵ	細石刃	黒曜石A	1.6	0.7	0.3	0.18	
	50	J-18	Ⅵ	細石刃	黒曜石A	1	0.5	0.1	0.07	
第19回	51	J-18	Ⅵ	細石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.3	0.14	
	52	J-18	Ⅵ	使用底剥片	黒曜石G	4.9	2.75	1.15	15.6	
	53	J-18	Ⅵ	スクリーパー	頁岩	4.2	9.45	1.6	40.6	
	54	J-18	Ⅵ	尖頭器	頁岩	10	3.5	0.9	37.3	
第20回	55	J-18	Ⅵ	ナイフ形石器	頁岩	11.35	12.65	2.6	590	
	56	K-19	Ⅶ	ナイフ形石器	月岩	10.1	4.45	2.05	88	
	57	K-19	Ⅶ	合板石器	黒曜石A	1.6	2	0.75	1.92	
	58	K-18	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	1.3	1.4	0.7	1.49	
	59	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石E	1.4	1.2	0.8	2.1	
	60	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	1.5	1.4	1.1	2.65	
	61	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石E	1.5	1.1	0.6	1.06	
	62	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.2	1.4	1.6	2.23	
	63	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石B	1.6	0.8	1.5	1.98	
	64	K-19	Ⅶ	細石刃核	黒曜石A	1.9	1.2	1	2.42	



第23図 旧石器11

旧石器時代石器観察表

探査 番号	報告 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 21 回	65	K-19	N'	細石刃核	黒曜石B	1.9	1.9	1.6	5.35	
	66	K-19	N'	細石刃核	黒曜石B	1.8	1	1.2	2.04	
	67	K-19	遺	細石刃核	黒曜石B	2.4	1.2	0.9	2.82	
	68	K-19	N'	細石刃核	黒曜石B	1.5	0.8	1.5	1.51	
	69	K-19	N'	細石刃核	黒曜石A	1.4	1.2	1.4	2.19	
	70	K-19	V落ち込み	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.7	0.95	
	71	K-19	N'	細石刃核	黒曜石C	1.6	1.4	1	1.18	
	72	K-19	N'	細石刃核	黒曜石C	1.3	0.9	0.6	0.72	
	73	K-19	N'	細石刃	黒曜石C	1.4	0.5	0.15	0.11	
	74	K-19	V落ち込み	細石刃	黒曜石A	1.55	0.4	0.1	0.07	
第22回	75	K-19	遺	細石刃	黒曜石B	1.4	0.5	0.1	0.16	
	76	K-19	N'	細石刃	黒曜石B	1.1	0.55	0.15	0.1	
	77	K-18	N'	細石刃	黒曜石C	1.35	0.6	0.2	0.13	
	78	K-19	遺	スレーパー	黒曜石B	2.1	0.6	1.3	1.31	
	79	J-19	N'	細石刃核	黒曜石C	1.2	1	0.9	0.97	
	80	J-19	遺	細石刃	チャート	1.05	0.7	0.1	0.09	
	81	J-20	N'	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.09	
第 23 回	82	J-20	遺	細石刃	チャート	1.35	0.6	0.2	0.11	
	83	J-19	N'	細石刃核	黒曜石A	2.3	1.9	2	8.38	
	84	L-19	遺	三種尖頭器	ホルンブッシュ	6.25	1.75	1.2	10.1	
	85	L-19	遺	台形石器	黒曜石H	4.8	3.1	1.15	12.38	
	86	K-19	遺	スレーパー	頁岩	7.93	11.05	2.75	184.6	
第 24 回	87	K-19	遺	スレーパー	頁岩	6.09	8.51	1.6	79.7	
	88	J-19	遺	器	安山岩	14.7	14.4	6	1016	



第24図 旧石器12

## 第5節 縄文時代の調査

縄文時代は、早期、晩期の遺構・遺物と中期～後期の土器が出土した。

### 1 縄文時代早期

縄文時代早期は、西側調査区において遺構・遺物が検出された。

遺構は、J-19区に集石遺構が3基、近接する状態で検出された。遺物は、IV層柱から土器・石器が出土した。土器は、早期前半のI類土器から早期終末のX類土器までが出土したが、その大半はIV類土器が占める。石器は、石鎌・打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石・石皿が出土した。

#### (1) 遺構

##### ① 1号集石（第25図）

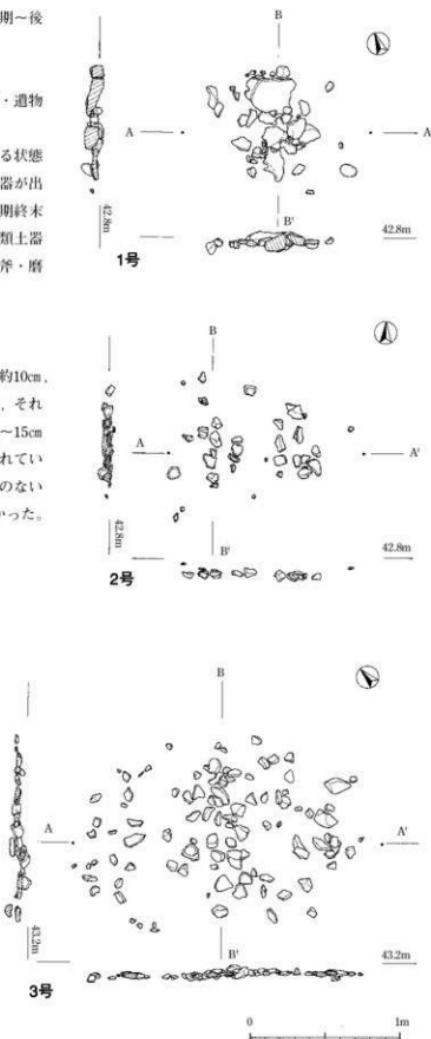
J-19区IV層から検出されたもので、厚さ約10cm、縦横の幅がどちらも約30cmの大型の石1個と、それよりやや小型の厚さ約10cm、縦横の幅が約10～15cmの大の石が5個、他は拳大以下の小石で構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差のない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。

##### ② 2号集石（第25図）

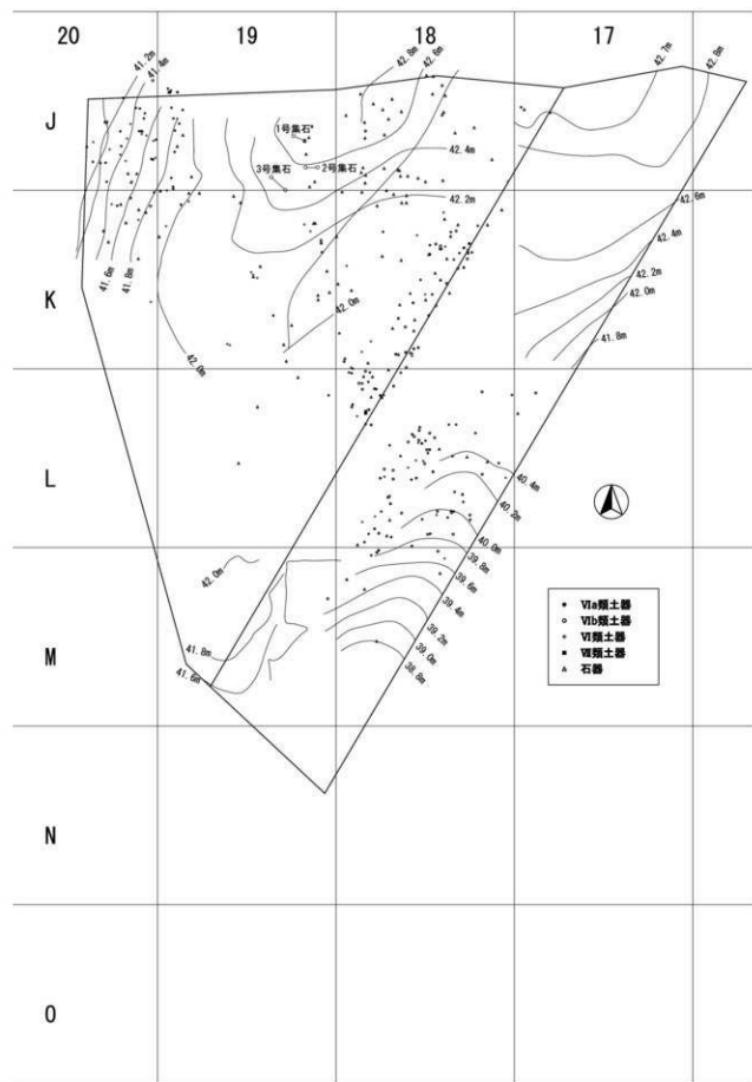
J-19区IV層から検出されたもので、礫に大小の差はほとんどみられず、拳大の角礫が30個ほどで構成されている。礫の密集度合いは低い。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。

##### ③ 3号集石（第25図）

J-19区IV層から検出されたもので、3基のうち礫の散乱範囲が一番広く、2m×1.5m四方の範囲で散乱している。礫は角礫で、拳大よりやや大きめのものが8個と、拳大またはそれ以下の大きさのものが数十個で構成されている。礫の密集度合いは非常に低く、散乱している。礫はほぼ高低差がない状態で広がっており、掘り込みも確認されなかった。



第25図 縄文時代早期集石遺構



第26図 縄文時代早期遺物出土状況図・遺構配置図

## (2) 遺物

遺物は西側調査区において集中して出土したほかは、ほとんど見られなかった。

### ①土器

I類土器からV類までの12種に分類できる。

#### I類土器 (第27図 89)

I類土器は1点である。89は口唇部内側に段を有し、外側にはヘラによる刻目を施すものである。口

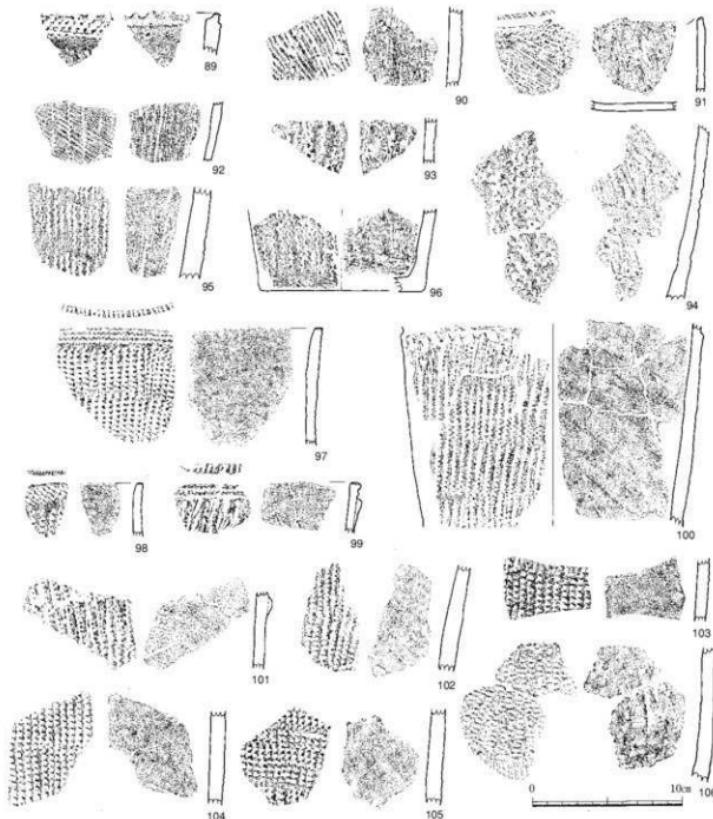
縁部外面には斜位に貝殻刺突文を施し、その下に横位の貝殻刺突文を施す。

#### II類土器 (第27図 90)

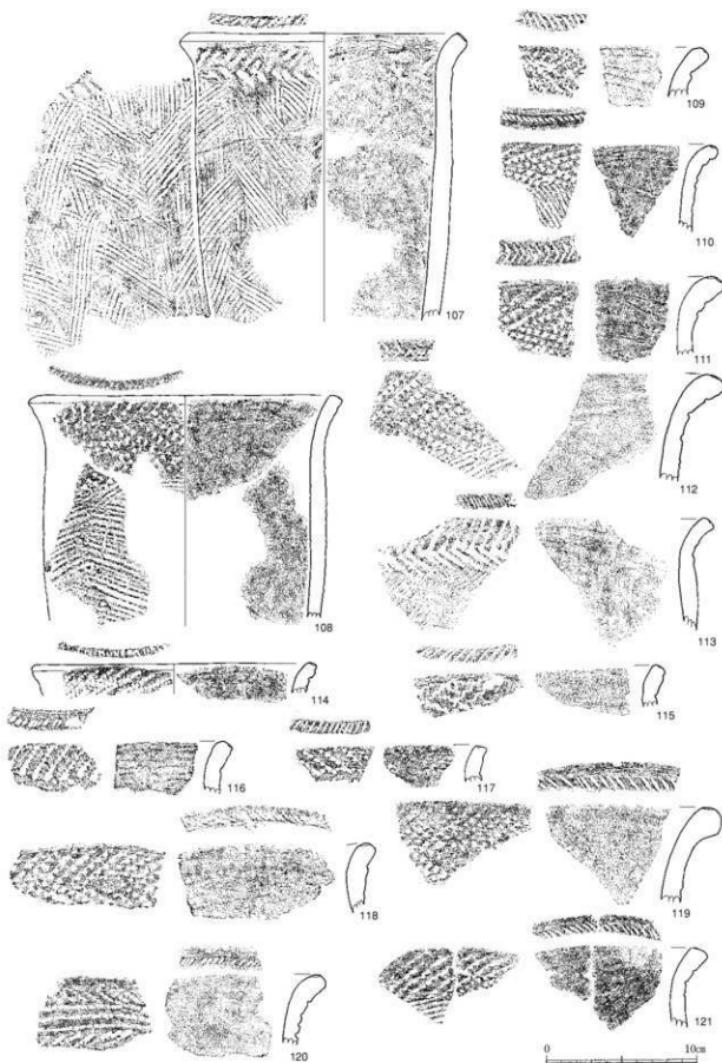
II類土器も1点である。90は円筒の胴部で、斜位の貝殻条痕文の上に、2条の貝殻刺突文を施す。

#### III類土器 (第27図 91・92)

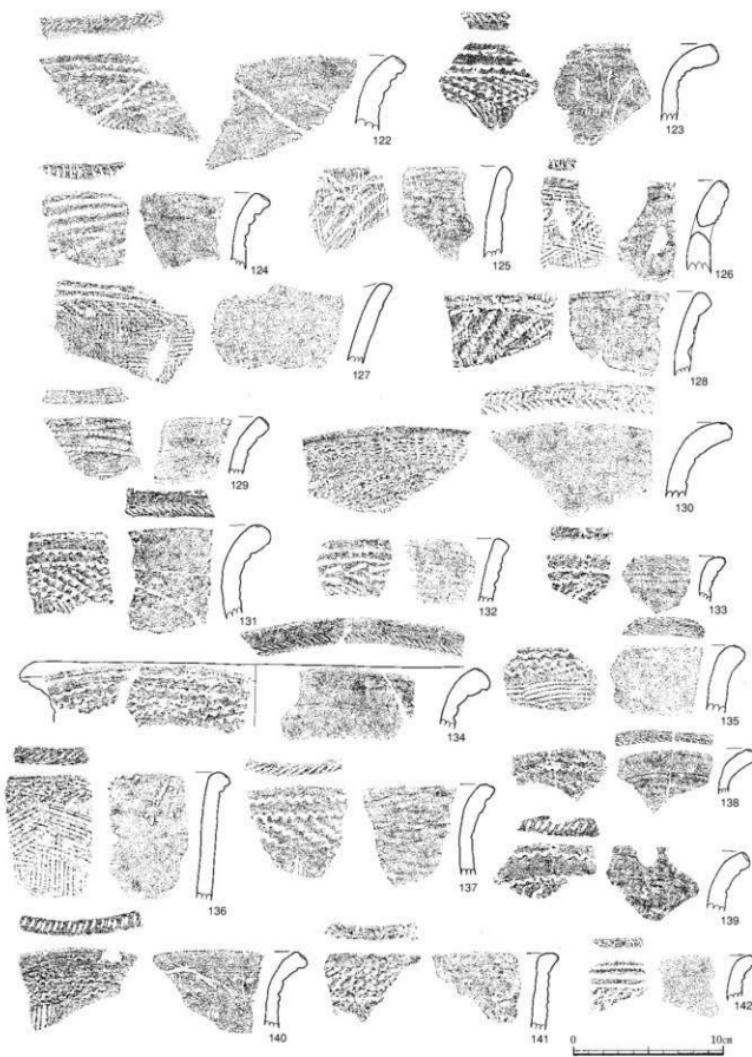
III類土器は2点である。胴部外面は押引状の条痕文を施し、その上に貝殻刺突線文を縦位又は斜位に



第27図 I～V類土器



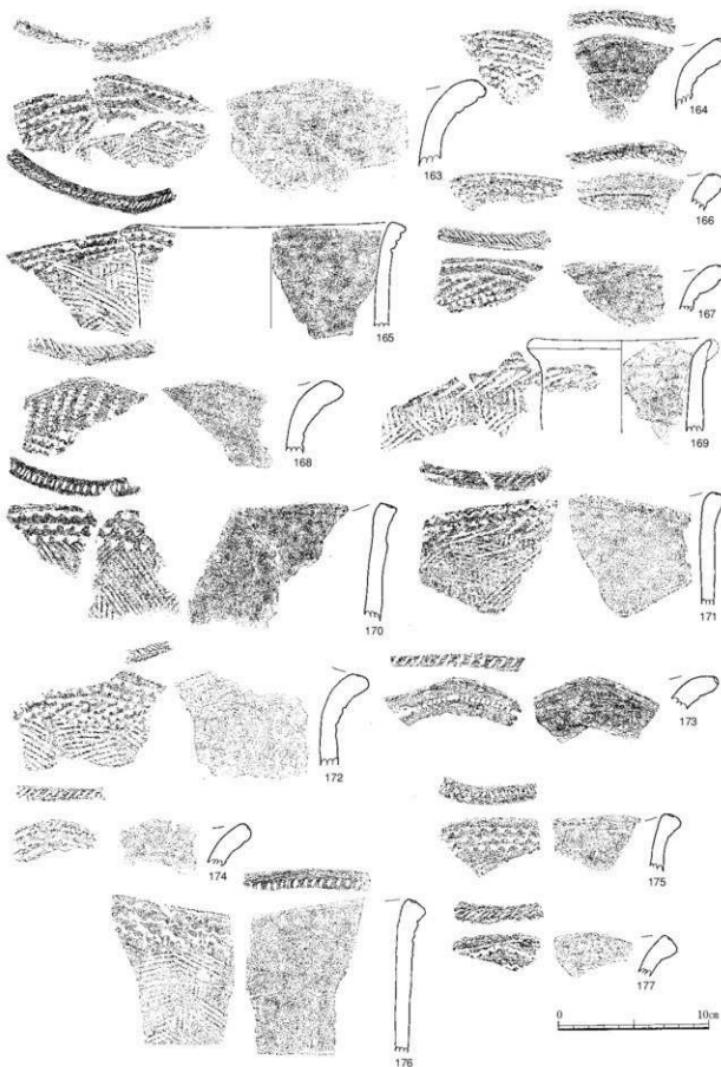
第28図 Vla類土器 1



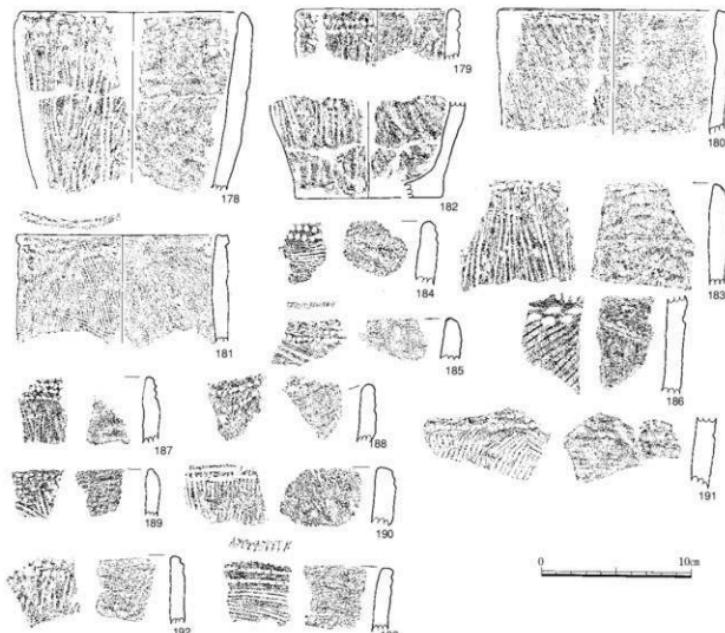
第29図 Via類土器 2



第30図 Vla類土器 3



第31図 Via類土器 4



第32図 Vb類土器 1

施す二重施文である。91・92は角筒で、91は波状口縁を呈し、口唇部にはヘラで刻目を施す。口縁部外面には横位の貝殻刺突文を施す。

#### IV類土器（第27図 93～96）

IV類土器は、口縁部外面に横位の貝殻刺突文が施され、胴部に継位又は斜位の貝殻刺突線文が施されるものである。内面はヘラケズリが施される。

#### V類土器（第27図 97～106）

V類土器は、口縁部が外反し、外面には横位又は斜位の貝殻刺突文が施されるもので、楔形突起を有するものもある。口唇部に貝殻筋による横圧やヘラによる刻目が施され、胴部は貝殻筋の押引きによる横方向の施文、胴部下位には継位の沈線が施される。97・98は楔形突起がないタイプのものである。口縁

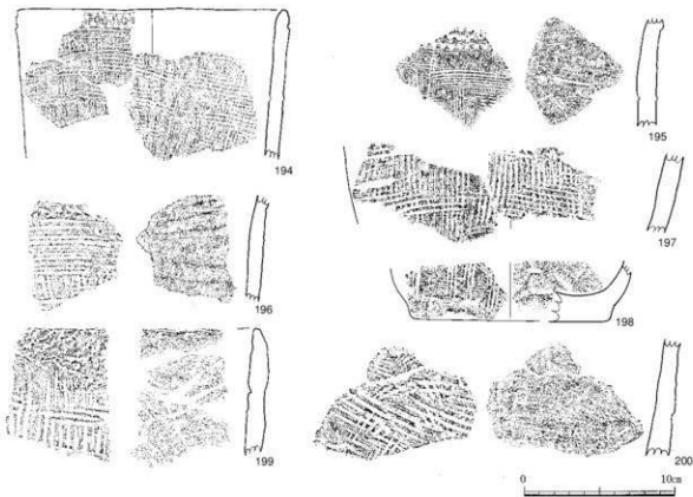
部はわずかに外反する。99～101は楔形突起を有するものである。楔は雑な作りで間隔も狭く貼り付けられる。99・100は楔と楔の間に、101は楔の両脇に貝殻刺突文を施す。102～106は貝殻による横方向の押引きが施された胴部である。

#### VI類土器（第28図～第38図 107～271）

VI類土器は、縄文時代早期の中心を占める円筒土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものをa、直行もしくはやや内湾するものをbとした。

#### VIa類（第28図～第31図 107～177）

107～177は口縁部が外反もしくはやや外反するものである。口唇部はヘラによる刻目が施されるものが多い。口縁部は貝殻腹縁による刺突文が、斜位・横位・継位・羽状に施される。胴部には貝殻腹縁に



第33図 VIb類土器 2

より条痕文が斜位もしくは綾糸文状に施される。底部には浅い刻目が観察されるものが多い。VI類土器の中でも中心を占める土器である。

107は復元口径19.0cmを測る。108は復元口径20cmを測る。111・112は口唇部の刻目が羽状に刻まれる。114は復元口径18cmを測る。118~121は口縁部の外反の度合いが強く、口唇部の刻目が内面寄りに刻まれる。125・127・128は口縁部の貝殻刺突文の下にも条痕文を施す。126は補修孔が看取られる。127には未貫通の補修孔と思われる凹みが見られる。130・131・134・135は口唇部の刻目が内側寄りに施される。134は復元口径31.4cmを測る大型のものである。145・149・151・153・160は横位に施された貝殻刺突文の下にヘラ状工具による連続刺突文が横位もしくは斜位に施される。143は口唇部の刻目が内側寄りに施され、口縁部の外反の度合いも強い。146は復元口径14.2cmを測る。

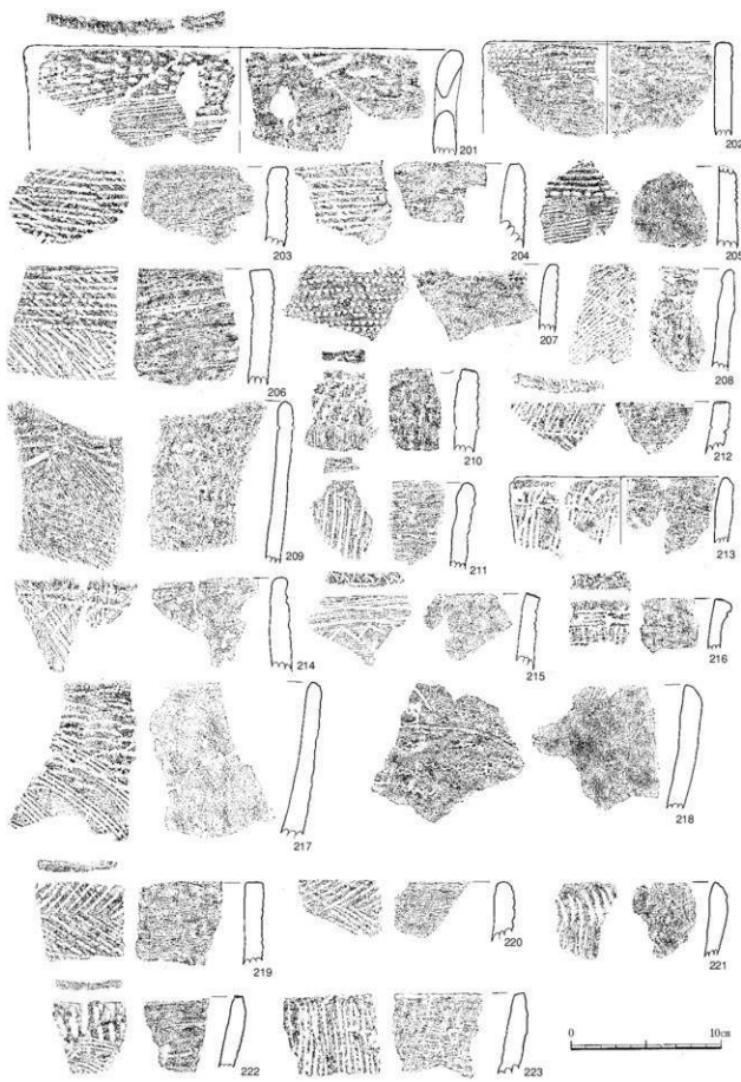
163~177は口縁部が外反し、さらに波状口縁を呈するものである。口縁部には横位、斜位、羽状、横

位の下に斜位に貝殻刺突文が施される。164・166・176は口唇部の刻目が内面寄りに施される。165・169の復元口径はそれぞれ19cm、12.8cmを測る。

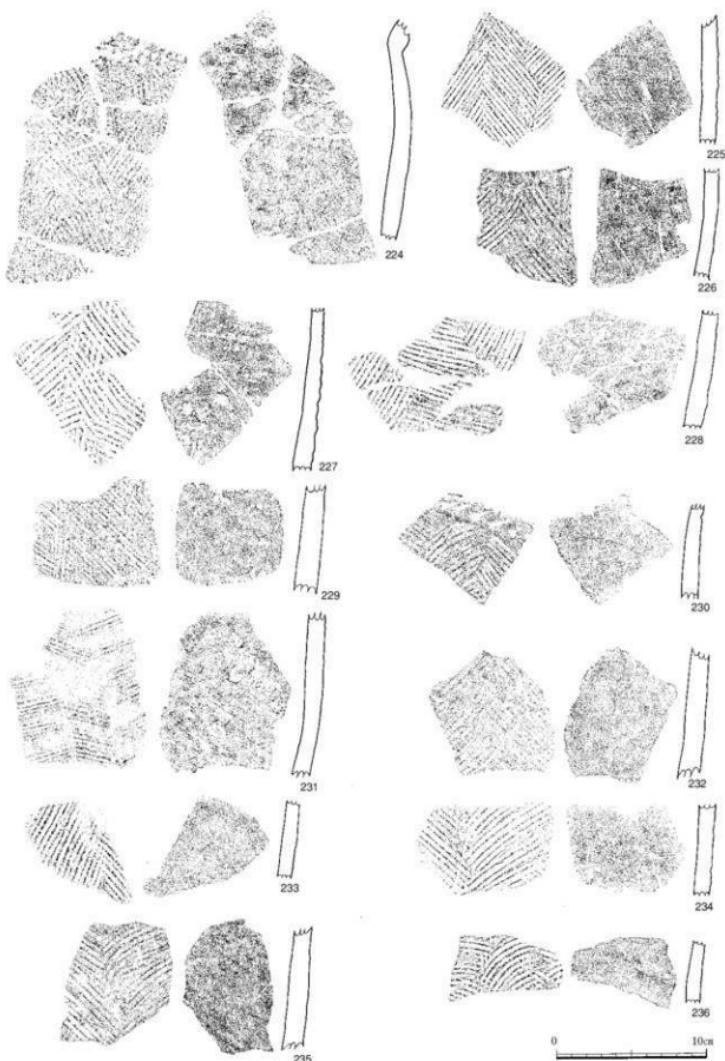
#### VIb類土器 (第32図~第34図 178~223)

178~223は口縁部が直行もしくはやや内湾するものである。口唇部は丸くつくられるものとほぼ平坦につくられるものがあり、ヘラによる刻目が施されるものもある。口縁部は棒状の工具による連点文や貝殻による刺突文が、斜位・横位・縦位・羽状、またはそれらを組み合わせて施される。胴部にはヘラや貝殻による条痕文が縦位・横位・斜位もしくは格子状に施される。

178~189は口縁部に棒状の工具で連点文を施すものである。178~183は、ヘラケズリ調整を面取り状に行った上から縦位の条痕文を雜に施す。178~180・183の復元口径は、順に14.8cm、11.0cm、15.2cm、14.0cmを測る。182は底部で、復元底径9.8cmを測る。178~180・183のいずれかと同一個体であると思われる。188は波状口縁を呈する。



第34図 Vib類土器 3



第35図 VI類土器 1

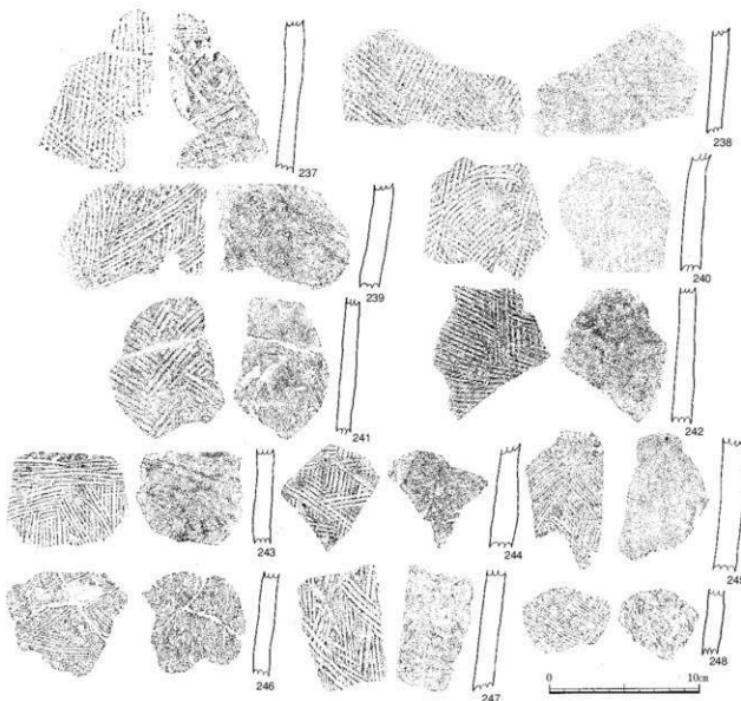
190~193は胴部に貝殻条痕文、その上から口縁部に貝殻刺突文を施す。190は貝殻で刺突後そのまま条痕を引いたものと思われる。

194~200は胴部に格子目状の条痕文が施されるものである。194は口縁部に棒状の工具による連点文が廻る。復元口径17.4cmを測る。195は口縁部に貝殻刺突文を横位に施す。198は底部である。199・200は条痕文を格子状に深く施すもので、199の口縁部には貝殻刺突文を斜位に施す。

201は口縁部に大型の貝殻を使用して縦位の貝殻刺突文を押引き状に施し、下には条痕文も施される。復元口径14.7cmを測り、補修孔が見られる。

202~208は口縁部に横位の貝殻刺突文を数条施す。202は復元口径16.4cmを測る。209は波状口縁を呈する。212は口縁部にヘラ状工具による斜位の沈線と、それに接して横位の沈線が施される。213は復元口径14.0cmを測る。218は内面にミガキ調整が施される。219・220は羽状の貝殻刺突文が施されるもので、223は刺突文の下にも強い縦位の貝殻条痕文が施される。

224~258はVI類土器の胴部である。貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文を綾糸状、斜位、縦位、横位に施す。



第36図 VI類土器 2

259～271はVI類土器の底部である。胸部には貝殻もしくはヘラ状工具による条痕文が施される。259～265の底部下面には刻目が見られる。264の底面はミガキを施したように滑らかである。

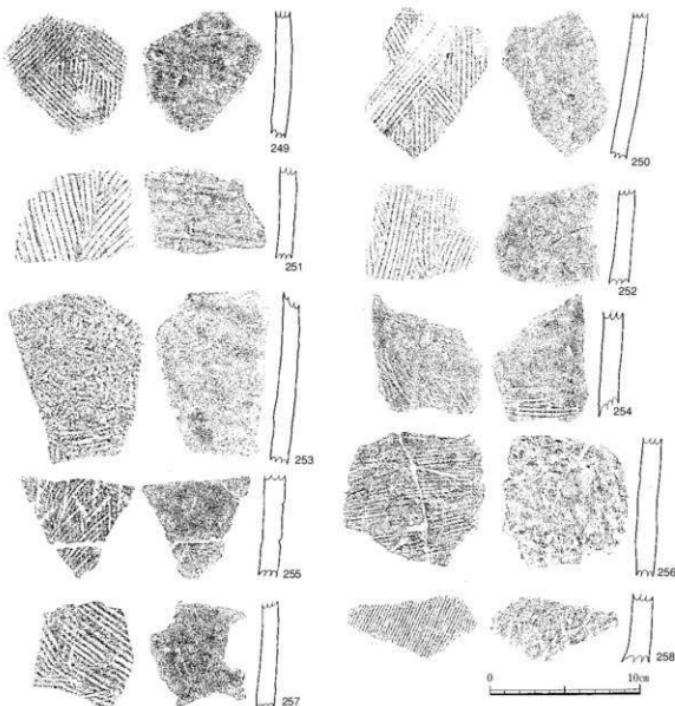
#### VII類土器 (第39図～第41図 272～303)

VII類土器は、胸部に貝殻腹縁による刺突文が羽状に施されるものである。口縁部は直行またはやや内湾し、瘤を有するものも見られる。272は、横方向に羽状の貝殻刺突文を施すものである。胸部中位から上と下では刺突文が変化しており、施工具の貝殻を途中で変えたものと思われる。273～278は羽状の貝殻刺突文を縱方向に施したものである。273は波

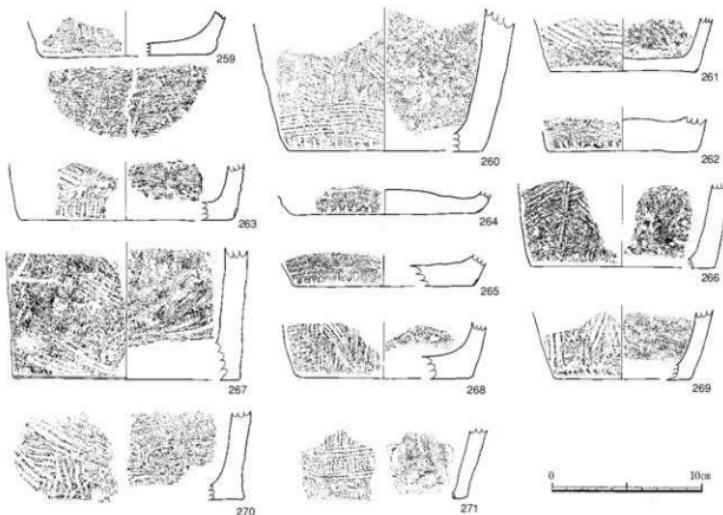
状口縁を呈し、口縁部直下に棒状の工具による連点文を1条施したあと、貝殻刺突文を羽状に施す。

279～282は斜位の貝殻刺突文を組み合わせた上から、横位の刺突文を施す。283～286は小型の貝殻を使用して刺突文を施すものである。287はヘラ状工具により綾杉状に文様を施したものである。290～298は羽状の貝殻刺突文を横方向に施したものである。290は復元口径18.6cmを測る。298は底部である。299はヘラ状工具により綾杉状の文様が施されるもので、VI類の範疇に入る可能性もある。

300～302は口縁部に瘤を有するものである。300は口縁部と瘤上に横位の貝殻刺突文を施し、胸部に



第37図 VI類土器 3



第38図 VI類土器 4

羽状の貝殻刺突文を縦方向位に施す。瘤は横形のもので、4か所もしくは5か所付くものと思われる。301・302は縦形の瘤を有し、301の瘤には縦位の貝殻刺突文が施されるが、302の瘤は無文である。303は貝殻を押引き状に刺突して羽状の文様を施したもので、波状口縁を呈する。

#### VII類土器（第42図 304）

Ⅶ類土器は1点であった。304は小型の鉢形土器で、ほぼ完形に復元できた。器壁は小型のわりに厚く、口唇部は平坦につくられる。外面には丁寧なナデ調整の上から斜位の短沈線が施される。

#### Ⅷ類土器（第42図 305～311）

円筒形条痕文土器と呼ばれるものである。305～311はわずかに外反する口縁部で、端部は丸くつくられる。外面には横位の条痕文が施される。305・306の復元口径は、それぞれ28.6cm, 20.8cmを測る。310は胴部である。口縁部に近い部位には、波状の条痕文が施される。311は310と同一個体と思われる

底部である。

#### X類土器（第42図 312）

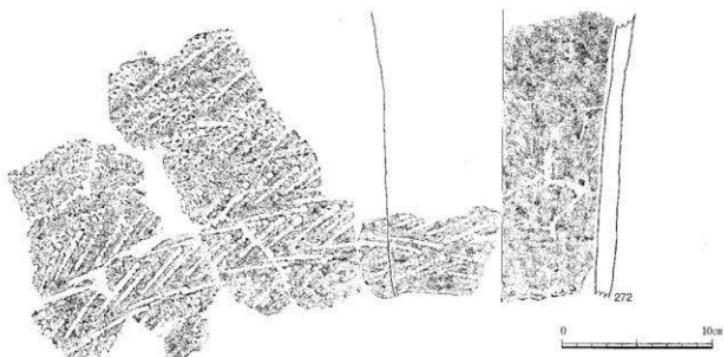
Ⅹ類土器は1点で、底部は欠損しているものの口縁部から胴部まで図上復元することができた。312は口縁部が外反し、胴部は中位でやや膨らむ器形を呈するもので、胴部には梢円押型文が施される。復元口径25.4cmを測る。

#### XI類土器（第42図 313・314）

Ⅺ類土器は2点掲載した。313は「ハ」の字状に開く口縁部である。外面には2条の貝殻刺突文で縦位の刺突文を施し、口唇部にも同じ工具を使い、刺突文を斜位に施す。314は頭部から胴部である。頭部の縫合部には刺突文が、胴部には条痕文が施される。

#### XII類土器（第42図 315）

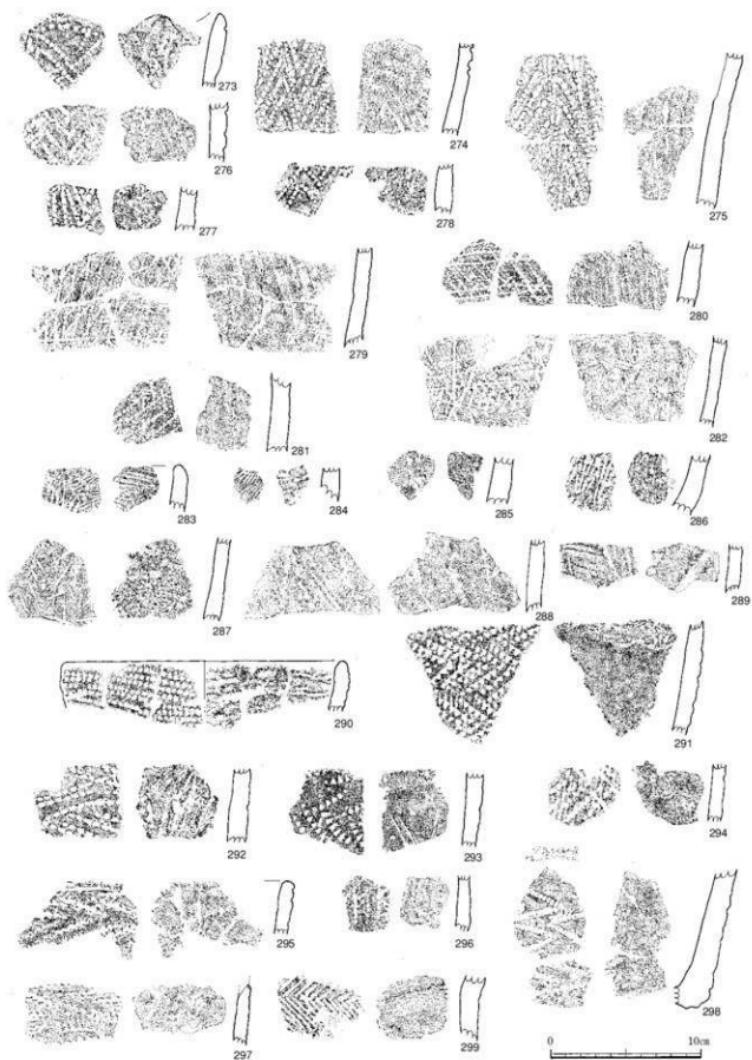
Ⅻ類土器は1点である。315は口縁部はわずかに開き、口唇部は平坦につくられる。外面には貝殻条痕文が横位又は斜位に施される。



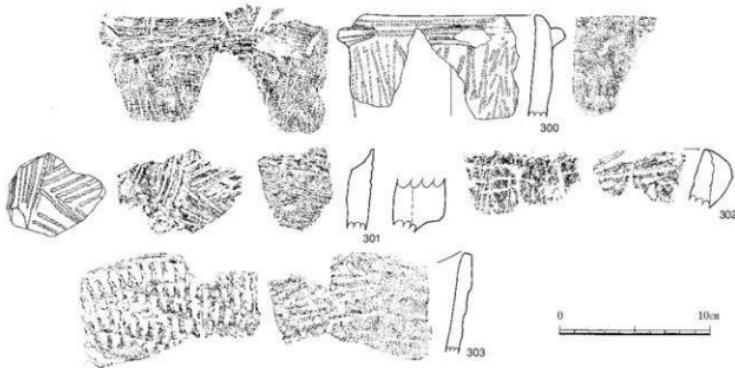
第39図 VII類土器 1

早期土器観察表 1

器種	番号	出土区	層位	部位	色調		地土			構成	外面	内面	備考
					内	外	石英	長石	鉄鉱物				
新	89	L-18	M'	口縁部	明褐色	灰黃褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	90	K-19	M'	腹部	褐	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	91	K-20	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ
	92	K-19	M'	腹部	赤	赤	○			良	良	良	ヘラケズリ
	93	-	M'	腹部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○			良	良	良	ヘラケズリ
	94	L-18,K-19	M'	腹部	灰褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	95	J-18	M'	腹部	褐	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	96	K-20	M'	腹部	明褐色	黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	97	K-20	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	98	K-19	M'	口縁部	明褐色	明褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
新	99	M-18	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	100	L-M-18,J-19	M'	腹部	褐	明褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	101	L-19	M'	腹部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	102	K-19	M'	腹部	暗灰褐色	灰褐色	○			良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	103	K-19	V	腹部	明褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	104	K-19	M'	腹部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	105	K-19	M'	腹部	褐	明褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ
	106	K-19	M'	腹部	にい・黄褐色	明褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	107	J-19,20	M'	口縁部	褐	にい・褐	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	108	J-19,L-18	M'	口縁部	にい・褐	にい・褐	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
新	109	L-19	M'	口縁部	にい・黄褐色	褐	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	110	L-18	M'	口縁部	褐	灰褐色	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	111	L-18	M'	口縁部	にい・褐	褐	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	112	K-18	M'	口縁部	オリーブ	にい・褐	○			良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	113	J-19	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	114	J-20	M'	口縁部	にい・黄褐色	褐	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	115	K-19	M'	口縁部	明褐色	明褐色	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	116	K-20	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・褐	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	117	L-18	M'	口縁部	にい・黄	にい・黄褐色	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	118	L-18	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○	○	良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
新	119	J-20	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
	120	L-18	M'	口縁部	にい・黄褐色	にい・黄褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ
新	121	J-20	M'	口縁部	にい・褐	明褐色	○	○		良	良	良	ヘラケズリ後ナデ



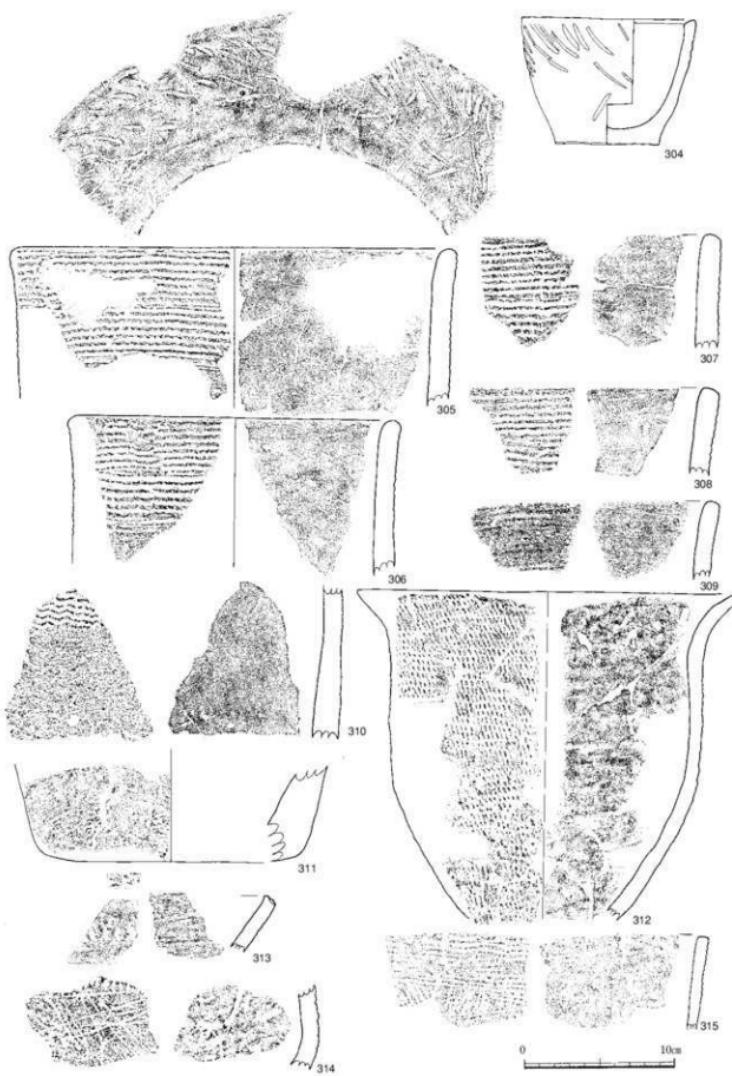
第40図 VII類土器 2



第41図 VII類土器器3

早期土器観察表2

種別 番号	出土地区	層位	部位	色調		胎土	構成	外面	内面	備考
				内	外					
新 石 器 器				石英	高石	胎土の他				
122.	L-18	M'	口縁部	黒	○ ○	良	良	良	良	良
123.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	ヘラケズリ模様
124.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	ヘラケズリ模様
125.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	ヘラケズリ模様
126.	J-20	M'	口縁部	灰青	○ ○	良	良	良	良	良
127.	K-20	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	良
128.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	良
129.	K-18	M'	底	灰青	○ ○	良	良	良	良	良
130.	J-19	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	良
131.	J-19	M'	口縁部	明赤褐	○ ○	良	良	良	良	ヘラケズリ模様
132.	J-17	M'	口縁部	明赤褐	○ ○	良	良	良	良	良
133.	K-18	M'	口縁部	に少'黄	灰斑	○ ○	良	良	良	良
134.	J-20	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	良
135.	K-18	M'	底	赤	○ ○	良	良	良	良	良
136.	J-20	M'	口縁部	に少'黄	○ ○	良	良	良	良	良
137.	L-18	M'	底	赤	○ ○	良	良	良	良	良
138.	L-18	M'	口縁部	明赤	○ ○	良	良	良	良	良
139.	K-18	M'	口縁部	赤	○ ○	良	良	良	良	良
140.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	明赤褐	○ ○	良	良	良	良
141.	J-19	M'	口縁部	に少'黄	明赤褐	○ ○	良	良	良	スヌ
142.	L-18	M'	底	赤	○ ○	良	良	良	良	良
新 石 器 器				明赤	○ ○	良	良	良	良	良
143.	J-20	M'	口縁部	明赤褐	○ ○	良	良	良	良	良
144.	J-20	M'	口縁部	明赤	○ ○	良	良	良	良	良
145.	L-18	M'	口縁部	明赤	○ ○	良	良	良	良	良
146.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	明黄	○ ○	良	良	良	良
147.	L-18	M'	口縁部	赤	明黄	○ ○	良	良	良	ヘラケズリ模様
148.	K-18	M'	口縁部	明赤	明赤褐	○ ○	良	良	良	ヘラケズリ模様
149.	K-18	M'	口縁部	黑	黑	○ ○	良	良	良	良
150.	J-20	M'	口縁部	赤	反	○ ○	良	良	良	良
151.	K-18	M'	口縁部	に少'黄	明赤	○ ○	良	良	良	良
152.	-	M'	口縁部	に少'黄	赤	○ ○	良	良	良	良
153.	L-18	M'	口縁部	赤	赤	○ ○	良	良	良	良
154.	K-18	M'	口縁部	明赤	明赤	○ ○	良	良	良	良
155.	J-19	M'	口縁部	赤	赤	○ ○	良	良	良	良
156.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	明赤	○ ○	良	良	良	ヘラケズリ模様
157.	L-18	M'	口縁部	に少'黄	に少'黄	○ ○	良	良	良	良
158.	K-18	M'	口縁部	に少'黄	明赤	○ ○	良	良	良	良
159.	J-20	M'	口縁部	に少'黄	明赤	○ ○	良	良	良	良
160.	L-18	M'	口縁部	灰青	堆灰	○ ○	良	良	良	良
161.	L-18	M'	口縁部	赤	堆灰	○ ○	良	良	良	良
162.	M-18	M'	口縁部	に少'黄	黄褐	○ ○ ○	良	良	良	ヘラケズリ模様



第42図 VII・IX・X・XI・XII 類土器





### (3) 遺物(石器)

縄文時代早期の石器は、石鎌、石槍、石斧、礫器、磨石、石皿等が出土した。

#### 石鎌(第43図・44図)

石鎌は、遺跡の西側調査区のJ-18~20区から16点、K-18~20区から13点、L-18区から2点、M-18区から3点その他1点の合計35点が出土している。

素材は黒曜石、安山岩、頁岩、チャート等である。その内、黒曜石は肉眼観察によると三船産に類似するものが3点、上牛鼻産に類似するものが2点、合計5点が出土している。

分類は、本報告書P21の農業開発総合センター遺跡群内の石鎌分類図によって分類した。Aab 7点、Abb 8点、Abc 3点、Aca 2点、Acb 4点、Acc 1点、Baa 1点、Caa 1点、Cba 1点、Ccb 1点、不明なものが4点である。石鎌は打製でほとんどが入念な交互剥離により調整されている。35点中22点が破損しており、先端部が破損しているものは5点、先端部と基端の両方破損しているのは7点、基端が破損しているのは10点で片方のみ欠損が5点、両方とも欠損しているのが5点である。

その内、珪質岩製の349は大久保型石鎌と考えられ、近隣の諫訪脇遺跡でも出土している。

#### 石槍(第44図)

351はホルンフェルスを素材とする。縦長剥片を素材にし、丁寧な両面剥離加工が施される。下部は欠損している。

#### スクレイバー・剥片(第45図)

352~355はスクレイバーである。352の石材は頁岩で、両面に剥離を施される。353は横長剥片を使用し、下部に刃部を施している。354は自然面を多く残した横長剥片の下部を刃部としている。355は上部、下部、側縁に刃部を有している。356・357は剥片である。357は自然面を多く残した剥片で使用痕は認められない。石斧の一部である可能性もある。

#### 磨製石斧(第45図)

358~360は磨製石斧である。358は縦長剥片を利用したもので、刃部は丁寧に研磨している。359は、二次加工を施したものである。360は自然面を利用

し、刃部を丁寧に研磨加工している。

#### 打製石斧(第46図)

361~363は打製石斧である。361は敲打による整形痕が明瞭に観察され、刃部は剥離による上位の両側縁に抉りが見られる。362・363は有肩打製石斧で362は基部、363は刃部が欠損している。

#### 礫器(第46図)

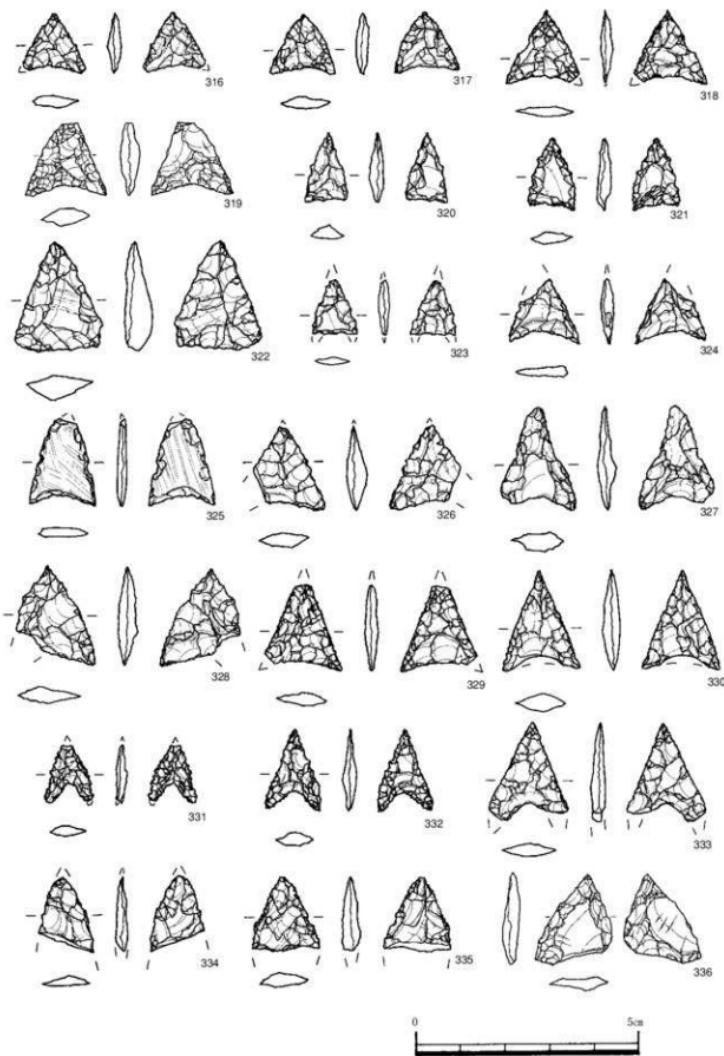
364~367は礫器である。364は自然面を多く残し、全体に剥離痕がある。365~367は自然面を多く残し、下部に刃部形成を行っている。

#### 磨石・敲石・凹石(第47図~55図)

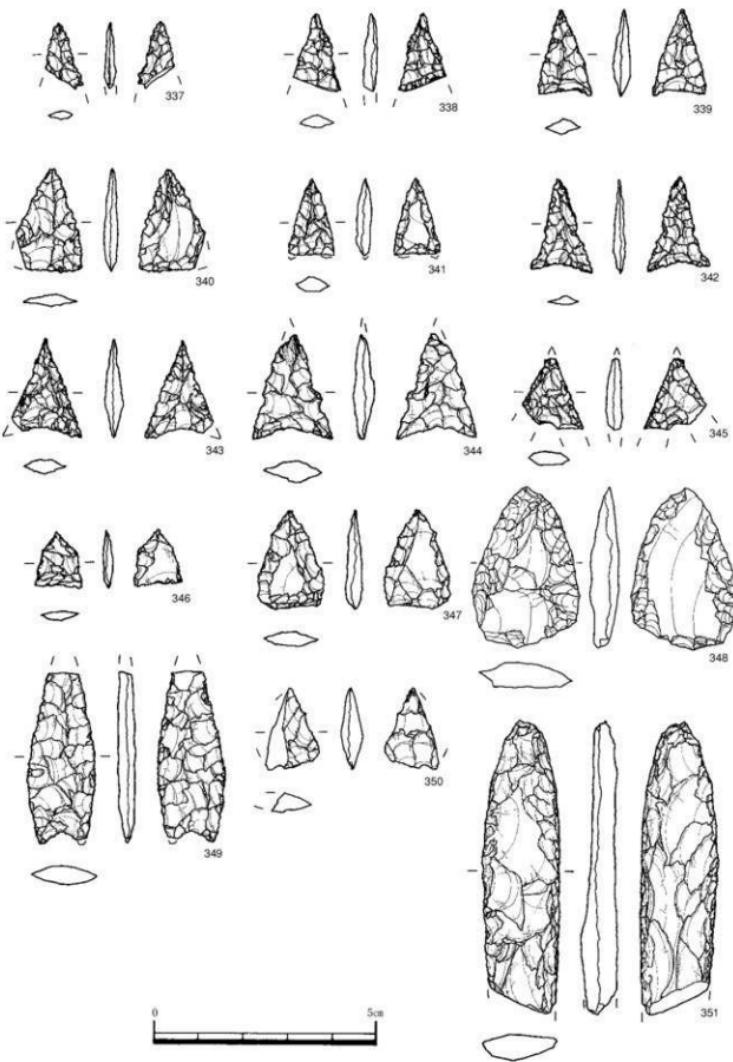
円錐を用いた磨石が多く、石材は砂岩が多い。368~371は片面のみに磨石の機能のあるもの。372~394は両面に磨石の機能のあるもの。395~398は両面と側縁部に磨石の機能のあるものである。399~422は磨石と敲石の機能を持つものである。399は片面に磨石と敲石の機能を持つもの。400~404は両面に磨石の機能を持ち、片面に敲石の機能を持つもの。405~422は両面と側面に磨石の機能を持ち、敲石の機能も持ったもの。423~434は磨石、敲石と凹石の機能を持つものである。

#### 石皿(第56図)

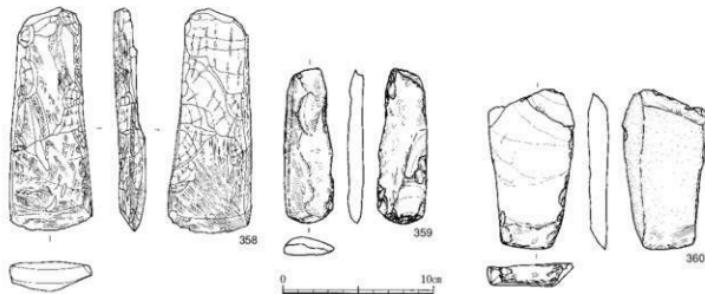
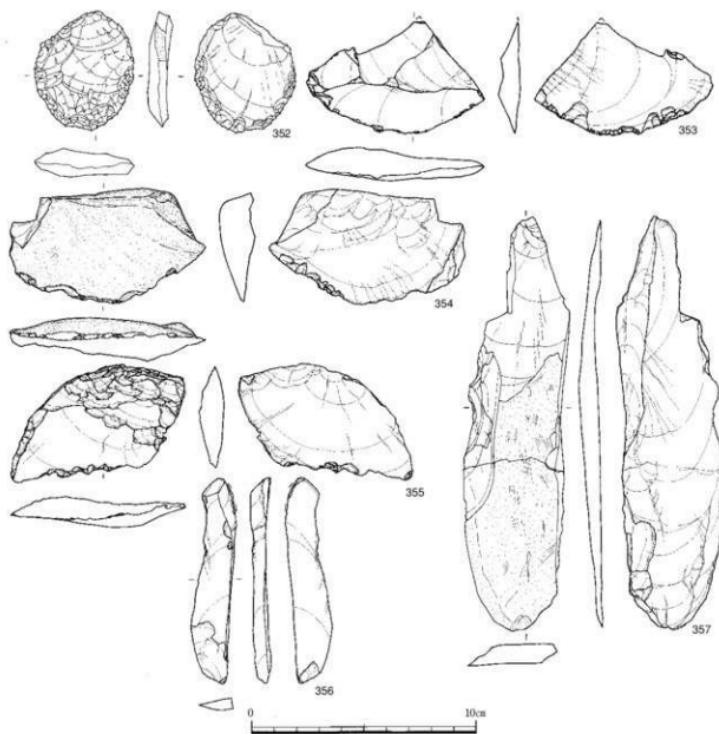
5点を図化した。石材は砂岩のものが多い。435・437は両面とも作業面があるものである。436・438・439は片面のみの作業面である。5点とも敲打痕などは見られなかった。



第43図 繩文時代早期石器 1



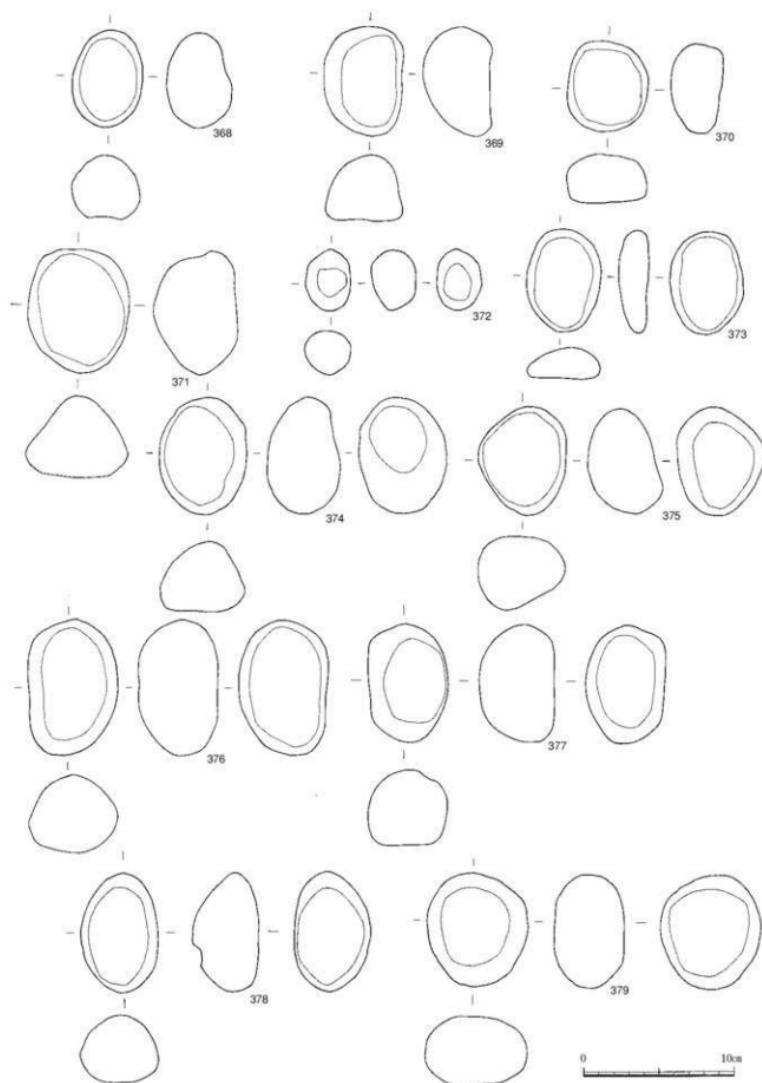
第44図 繩文時代早期石器 2



第45図 繩文時代早期石器 3



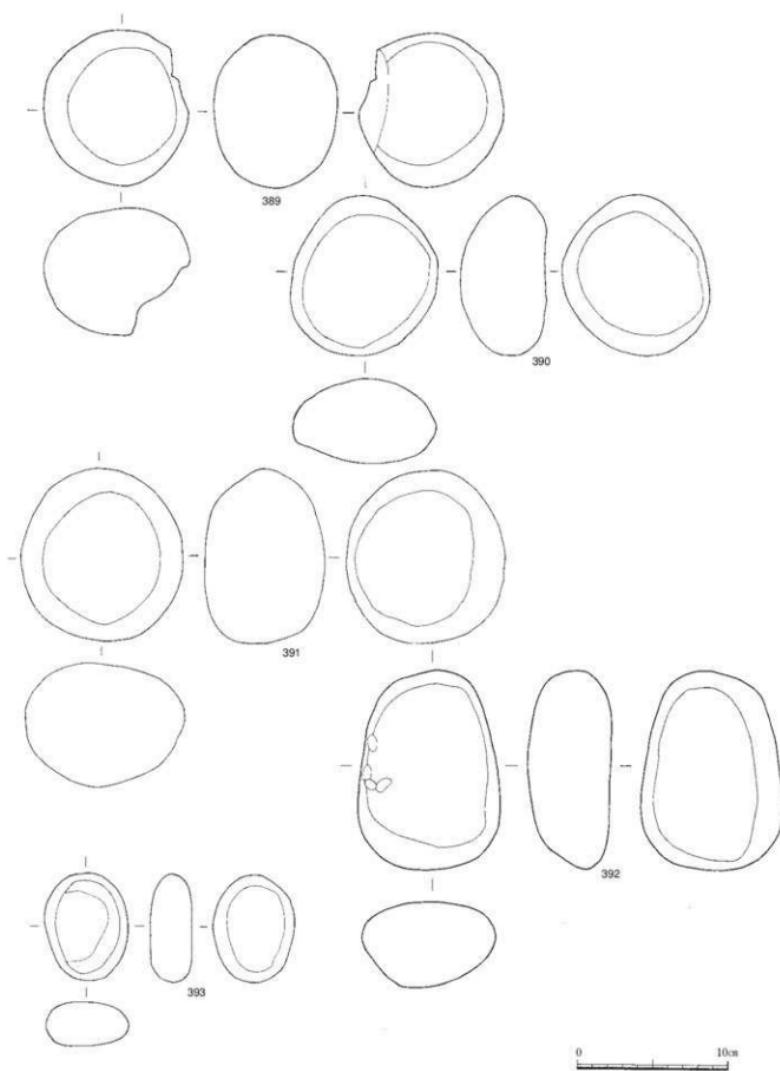
第46図 縄文時代早期石器 4



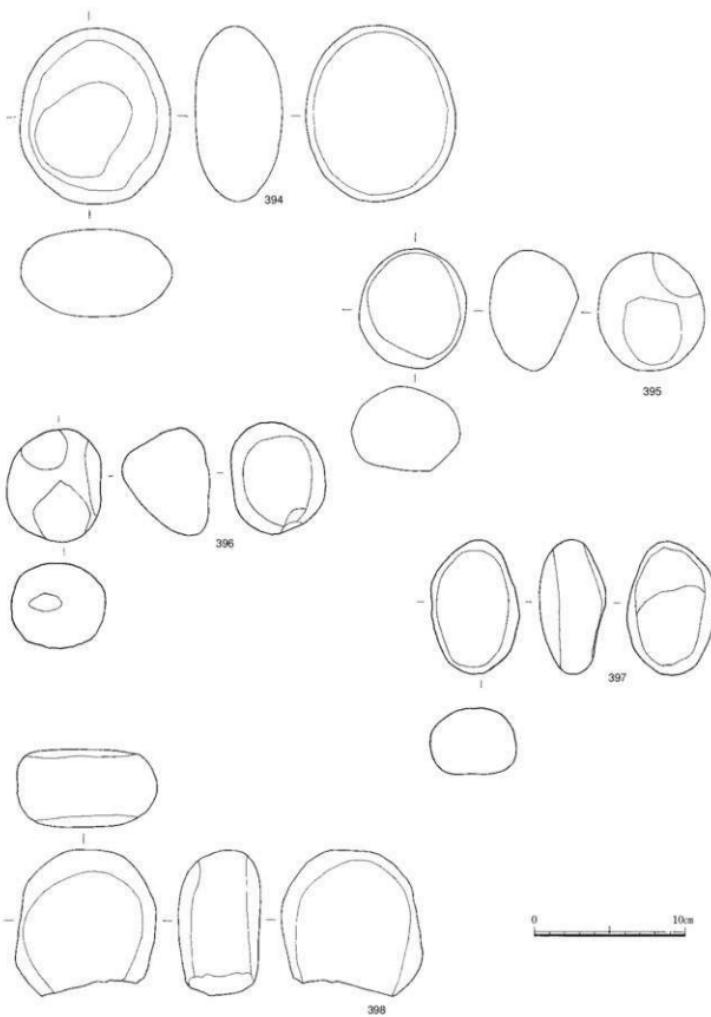
第47図 繩文時代早期石器 5



第48図 縄文時代早期石器 6



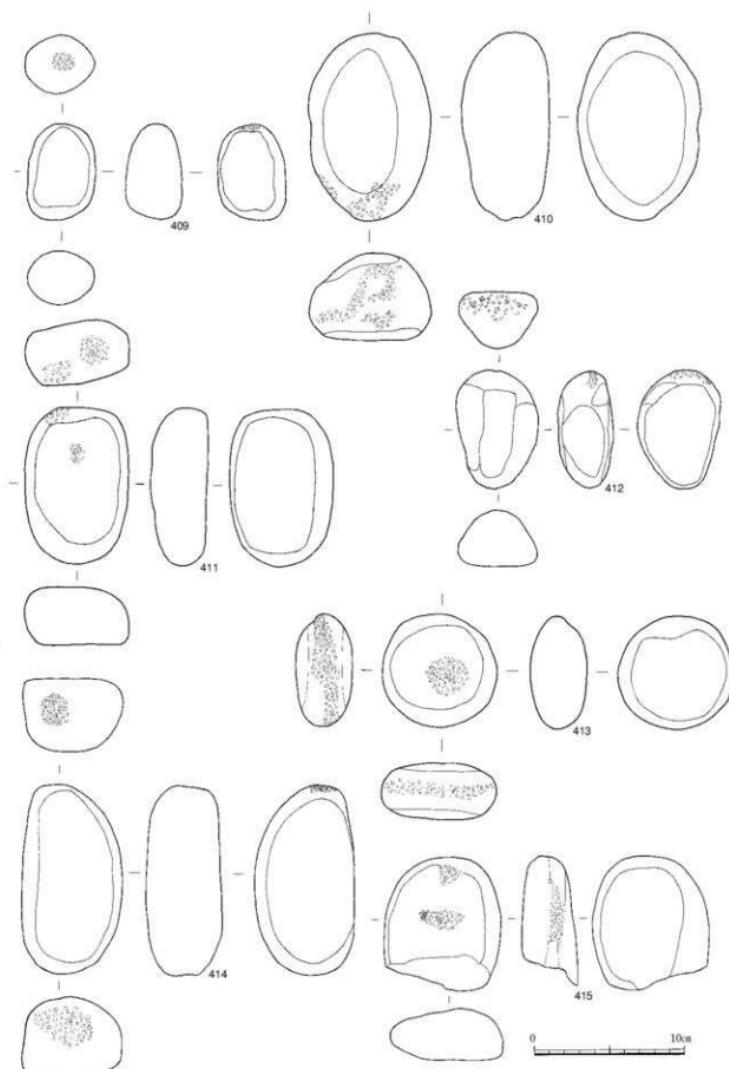
第49図 縄文時代早期石器 7



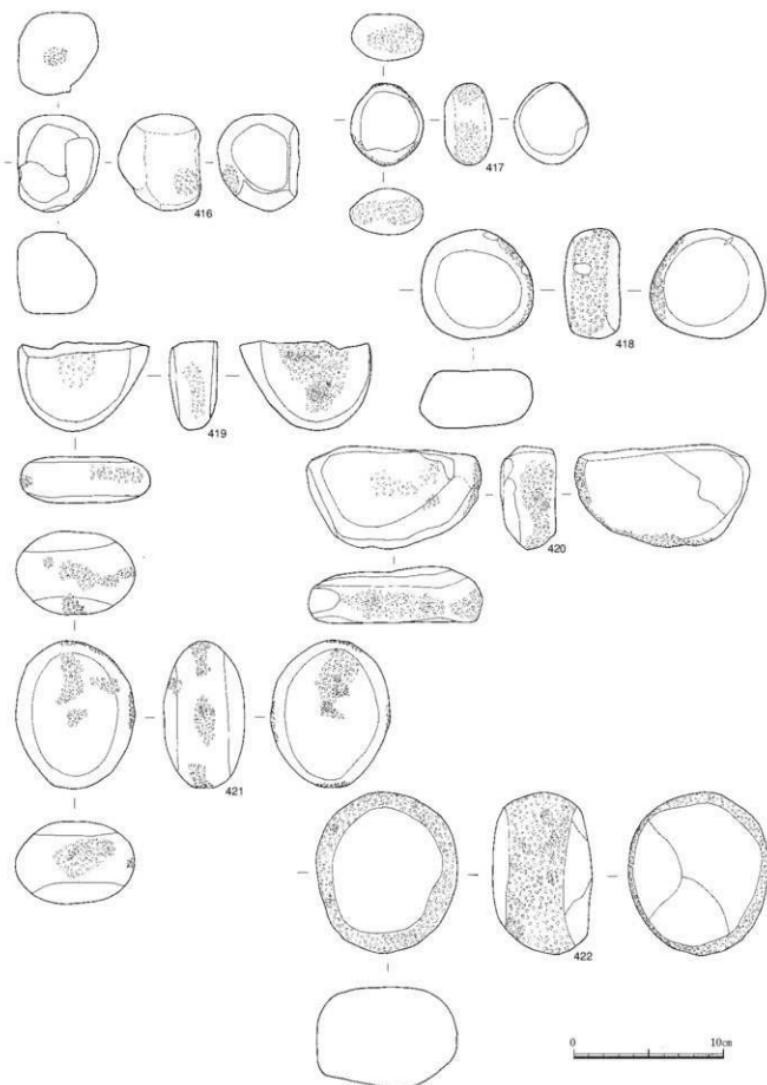
第50図 繩文時代早期石器 8



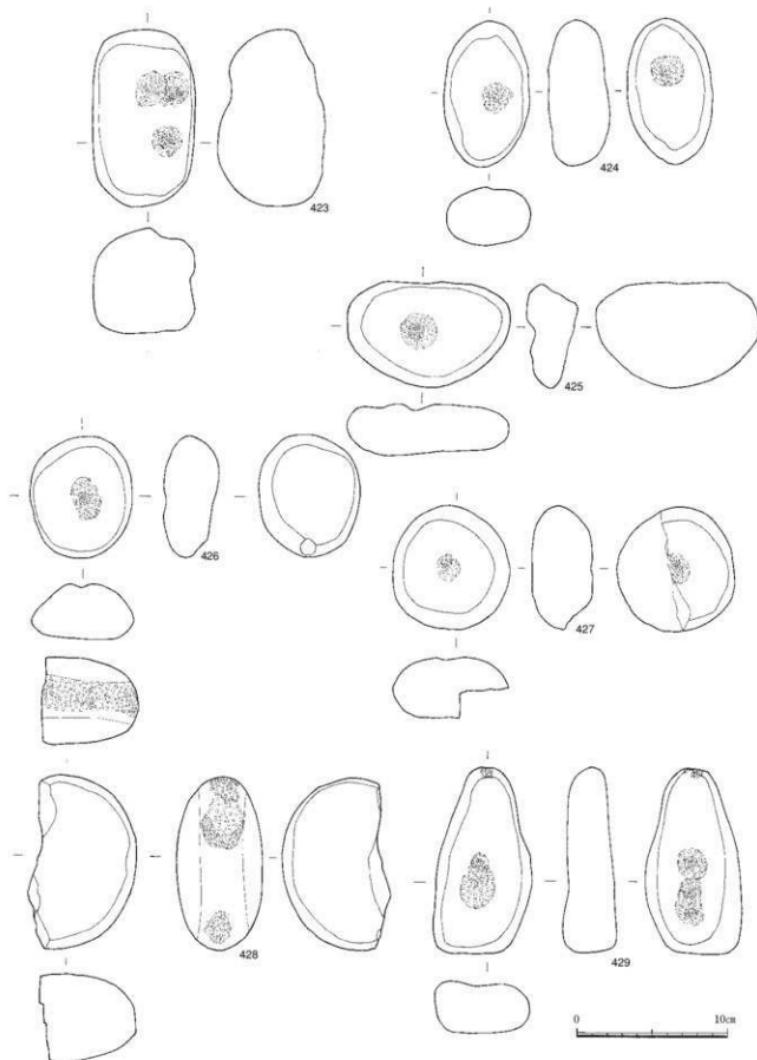
第51図 繩文時代早期石器 9



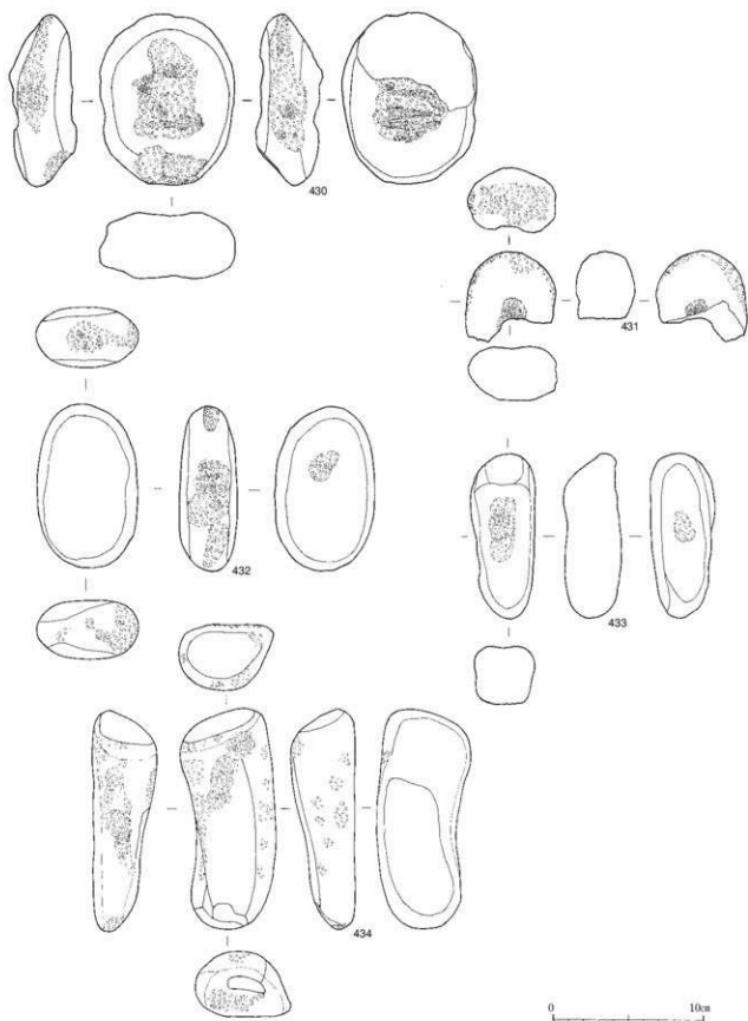
第52図 繩文時代早期石器10



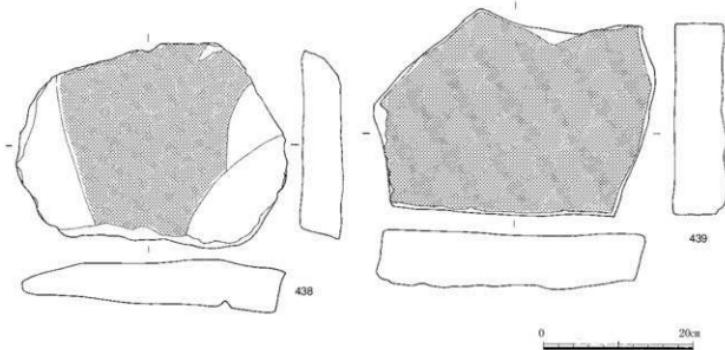
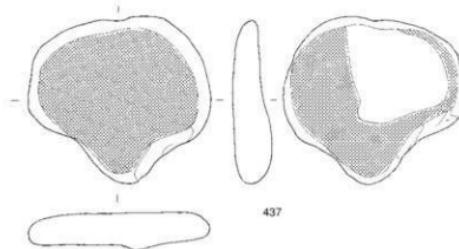
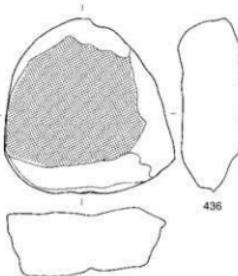
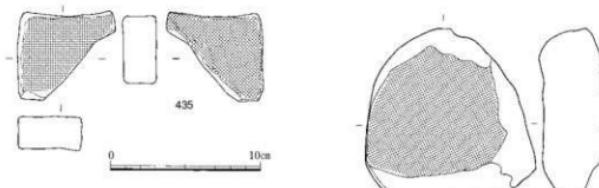
第53図 縄文時代早期石器11



第54図 繩文時代早期石器12



第55図 縄文時代早期石器13



第56図 繩文時代早期石器14

縄文時代早期石器観察表

持因番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第43回	316	石核	J-18	Ⅳ	黑色安山岩	1.3	1.4	0.4	0.4	A-a-b
	317	石核	K-18	Ⅴ	チャート	1.4	1.5	0.3	0.4	A-a-b
	318	石核	J-18	Ⅴ	頁岩	1.7	1.7	0.3	0.5	A-a-b
	319	石核	J-18	Ⅴ	頁岩	1.5	1.8	0.4	0.73	A-a-b
	320	石核	K-19	Ⅳ	頁岩	1.6	1	0.3	0.4	A-a-b
	321	石核	K-18	Ⅳ	頁岩	1.6	1.1	0.3	0.6	A-a-b
	322	石核	J-18	Ⅳ	シリト質頁岩	2.4	2	0.6	2.3	A-a-b
	323	石核	K-18	Ⅳ	黑色安山岩	(1.2)	1	0.3	0.3	A-b-b
	324	石核	J-18	Ⅲ	ホルンフェルス	(1.6)	1.3	0.3	0.5	A-b-b
	325	石核	K-20	Ⅲ	安山岩	(2)	1.5	0.2	0.7	A-b-b
	326	石核	J-18	Ⅲ	黑色安山岩	(1.9)	1.6	0.5	1	A-b-b
	327	石核	J-18	Ⅲ	安山岩	2.3	1.7	0.4	1	A-b-b
	328	石核	J-18	Ⅲ	安山岩	2.2	1.8	0.5	1.2	A-b-b
	329	石核	J-18	Ⅲ	シリト質頁岩	(1.9)	1.7	0.3	0.7	A-b-b
	330	石核	K-18	Ⅲ	シリト質頁岩	2.2	1.8	0.4	1	A-b-b
	331	石核	L-18	Ⅲ	黒曜石(三船)	(1.3)	1.1	0.3	0.2	A-b-c
	332	石核	M-18	Ⅲ	黒曜石(上牛鼻)	1.8	1.3	0.3	0.4	A-b-c
	333	石核	K-18	Ⅲ	チャート	(2.2)	1.8	0.4	0.9	A-b-c
	334	石核	J-20	Ⅲ	チャート	(1.7)	1.2	0.3	0.5	A-b-c
	335	石核	K-19	Ⅲ	チャート	(1.7)	1.5	0.4	0.8	A-b-c
	336	石核	J-18	Ⅲ	頁岩	2.1	1.2	0.2	0.75	A-b-c
第44回	337	石核	L-18	Ⅲ	頁岩	(1.6)	0.8	0.3	0.2	A-b-c
	338	石核	K-18	Ⅲ	チャート	(1.7)	1.1	0.3	0.5	A-b-c
	339	石核	K-19	Ⅲ	黑色安山岩	1.9	1.2	0.4	0.6	A-c-a
	340	石核	J-18	Ⅲ	シリト質頁岩	2.3	1.5	0.3	1	A-c-a
	341	石核	K-19	Ⅲ	頁岩	(1.7)	1	0.4	0.6	A-c-b
	342	石核	K-20	Ⅲ	黒曜石(三船)	2.1	1.4	0.3	0.6	A-c-b
	343	石核	J-18	Ⅲ	シリト質頁岩	2.2	1.6	0.4	0.8	A-c-b
	344	石核	—	Ⅲ	安山岩	(2.4)	1.8	0.5	1.4	A-c-b
	345	石核	M-18	Ⅲ	黒曜石(三船)	(1.6)	1.4	0.4	0.7	A-c-c
	346	石核	K-19	Ⅲ	黒曜石(上牛鼻)	1.3	1.1	0.2	0.3	B-a-a
	347	石核	J-18	Ⅲ	安山岩	2.2	1.5	0.4	1.4	C-a-a
	348	石核	J-18	Ⅲ	シリト質頁岩	3.6	2.4	0.6	5.31	C-b-a
	349	石核	M-18	Ⅲ	珪質頁岩	(3.8)	1.5	0.4	2.8	C-c-b
	350	石核	J-18	Ⅲ	頁岩	1.9	(1.2)	0.5	0.7	?
	351	石核	L-18	Ⅲ	ホルンフェルス	6.6	1.8	0.85	10.3	
第45回	352	スクレイパー	K-19	Ⅲ	頁岩	5.3	4.4	1.3	29.02	
	353	スクレイバー	K-18	Ⅲ	ホルンフェルス	5.1	8	1.5	39.5	
	354	スクレイバー	K-18	Ⅲ	ホルンフェルス	5.2	8.75	1.95	77.5	
	355	スクレイバー	K-18	Ⅲ	ホルンフェルス	5.25	7.85	1.4	40.8	
	356	剥片	K-19	Ⅲ	頁岩	9.2	2.1	0.95	12.9	
	357	剥片	J-18	Ⅲ	頁岩	16.55	4.8	1.1	88.3	
	358	磨製石斧	J-19	Ⅲ	頁岩	17.2	9.9	3.4	188.52	
	359	磨製石斧	K-18	Ⅲ	ホルンフェルス	10.46	3.35	1.25	58.9	
	360	磨製石斧	K-20	Ⅲ	安山岩	10.8	5.8	1.55	139.5	
第46回	361	打製石斧	K-18	Ⅲ	安山岩	15.2	5.15	2.75	343	
	362	打製石斧	J-19	Ⅲ	ホルンフェルス	8.2	4.45	2	71.9	
	363	打製石斧	L-19	Ⅲ	頁岩	10.85	3.8	1.85	107.91	
	364	砾器	K-18	Ⅲ	頁岩	7.9	9.05	2.95	245	
	365	砾器	J-19	Ⅲ	ホルンフェルス	14.5	10.05	4.15	650	
	366	砾器	K-18	Ⅲ	頁岩	11.15	13.3	2.55	465	
	367	砾器	K-18	Ⅲ	ホルンフェルス	8.85	13	3.95	490	
第47回	368	磨石	J-18	Ⅲ	砂岩	6.4	4.7	4.3	160.2	
	369	磨石	K-19	Ⅲ	砂岩	7.2	5.2	4.4	250.39	
	370	磨石	K-18	Ⅲ	砂岩	5.9	5.3	3.3	165	
	371	磨石	J-18	Ⅲ	砂岩	8.3	6.7	5.5	412	
	372	磨石	K-19	Ⅲ	砂岩	4.1	3.1	2.9	54.5	
	373	磨石	J-20	Ⅲ	砂岩	6.9	4.9	2	85.71	
	374	磨石	J-19	Ⅲ	砂岩	7.7	5.7	4.7	263.46	
	375	磨石	J-19	Ⅲ	砂岩	7.2	5.7	5	253	
	376	磨石	J-18	Ⅲ	砂岩	8.9	5.8	5.2	400	
	377	磨石	L-18	Ⅲ	砂岩	7.9	5	5.3	269.26	
	378	磨石	J-18	Ⅲ	砂岩	8	5.1	4.4	199.63	
	379	磨石	K-18	Ⅲ	安山岩	7.6	6.8	4.7	316.04	

縄文時代早期石器観察表

擇因番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
						cm	cm	cm	g	分類
第48回	380	磨石	K-19	Ⅲ'	砂岩	8.6	6.2	4.3	319.54	
	381	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	7.2	6.5	4.7	282.37	
	382	磨石	K-18	Ⅲ'	砂岩	6.1	6.1	3.7	190	
	383	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	10	6.6	4.3	395	
	384	磨石	L-18	Ⅲ'	砂岩	8.1	9.1	3.1	355	
	385	磨石	L-18	Ⅲ'	砂岩	11.3	5	4	320	
	386	磨石	—	Ⅲ'	砂岩	10.6	5.1	3.2	278.49	
	387	磨石	L-18	Ⅲ'	砂岩	9.3	2.9	2	75	
第49回	388	磨石	J-17	Ⅲ'	安山岩	12.8	10	5	1070	
	389	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	10.2	9.6	8.3	1160	
	390	磨石	L-18	Ⅲ'	安山岩	10.7	9.7	5.6	760	
	391	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	11.4	10.7	8.1	1300	
第50回	392	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	13.2	9.5	5.7	1070	
	393	磨石	L-18	Ⅲ'	砂岩	7.3	5.5	2.9	171.97	
	394	磨石	K-18	Ⅲ'	安山岩	11.6	10	5.7	990	
	395	磨石	K-18	Ⅲ'	砂岩	8	7.1	5.3	369	
第51回	396	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	7.5	6.2	5.6	317.47	
	397	磨石	J-18	Ⅲ'	砂岩	9	5.7	4.4	276.31	
	398	磨石	K-18	Ⅲ'	砂岩	(9.8)	9	5.2	665	
	399	磨石・鉗石	J-18	Ⅲ'	砂岩	(8.9)	6.9	5	390	
第52回	400	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	砂岩	7.3	5.3	3.8	197.38	
	401	磨石・鉗石	J-18	Ⅲ'	砂岩	5	4.6	3.6	130	
	402	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	砂岩	6.6	5.9	3.9	160	
	403	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	頁岩	13.1	4.7	3.1	302.64	
第53回	404	磨石・鉗石	J-19	Ⅲ'	砂岩	6.4	7	4.6	322.03	
	405	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	砂岩	10.8	8.3	4.7	590	
	406	磨石・鉗石	K-19	Ⅲ'	安山岩	12.9	8.7	7.2	1130	
	407	磨石・鉗石	J-18	Ⅲ'	砂岩	6.7	4.5	2.8	112.57	
第54回	408	磨石・鉗石	L-16	Ⅲ'	砂岩	10	9.1	4	490	
	409	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	砂岩	6.5	4.4	3.9	143.46	
	410	磨石・鉗石	L-18	Ⅲ'	砂岩	12.6	8.2	5.9	650	
	411	磨石・鉗石	—	Ⅲ'	砂岩	10.4	7	3.8	460	
第55回	412	磨石・鉗石	J-19	Ⅲ'	砂岩	7.9	5.5	3.7	190.7	
	413	磨石・鉗石	K-18	Ⅲ'	砂岩	7.5	7.7	3.8	192.84	
	414	磨石・鉗石	J-18	Ⅲ'	砂岩	12.6	6.7	5	620	
	415	磨石・鉗石	K-20	Ⅲ'	砂岩	(8.9)	7.7	3.7	355	
第56回	416	磨石・鉗石	K-19	Ⅲ'	砂岩	6.4	(5.4)	5.4	256.81	
	417	磨石・鉗石	K-19	Ⅲ'	砂岩	5.4	4.8	3.1	110	
	418	磨石・鉗石	J-20	Ⅲ'	砂岩	7.3	7.5	3.6	316.37	
	419	磨石・鉗石	J-20	Ⅲ'	砂岩	(5.9)	8.7	3.1	205	
第57回	420	磨石・鉗石	J-19	Ⅲ'	砂岩	6.7	11.6	3.7	420	
	421	磨石・鉗石	J-18	Ⅲ'	砂岩	9.7	8	5.3	550	
	422	磨石・鉗石	J-19	Ⅲ'	砂岩	10.7	9.2	6.6	990	
	423	磨石・鉗石・凹石	K-19	Ⅲ'	砂岩	11.7	6.6	7	890	
第58回	424	磨石・鉗石・凹石	K-19	Ⅲ'	砂岩	9.7	5.7	3.9	292.27	
	425	磨石・鉗石・凹石	L-19	Ⅲ'	砂岩	6.9	10.7	2.9	330	
	426	磨石・鉗石・凹石	K-18	Ⅲ'	砂岩	8.1	6.6	3.7	277.78	
	427	磨石・鉗石・凹石	K-18	Ⅲ'	砂岩	8.1	7.7	4	313.58	
第59回	428	磨石・鉗石・凹石	K-20	Ⅲ'	安山岩	11.7	(6.9)	5.8	700	
	429	磨石・鉗石・凹石	K-18	Ⅲ'	砂岩	12.3	6.4	3.5	420	
	430	磨石・鉗石・凹石	L-19	Ⅲ'	砂岩	11.3	8.8	4.2	615	
	431	磨石・鉗石・凹石	K-18	Ⅲ'	砂岩	(6.0)	5.9	3.8	155	
第60回	432	磨石・鉗石・凹石	K-19	Ⅲ'	砂岩	10.9	6.6	3.9	430	
	433	磨石・鉗石・凹石	L-18	Ⅲ'	砂岩	11	4.2	3.8	282.06	
	434	磨石・鉗石・凹石	J-19	Ⅲ'	砂岩	15	6	4.4	505	
	435	石皿	K-20	Ⅲ'	砂岩	8.6	9.4	3.6	390	
第61回	436	石皿	J-18	Ⅲ'	安山岩	23.1	22.7	8.6	1170	
	437	石皿	K-18	Ⅲ'	砂岩	22	24	5	3700	
	438	石皿	K-18	Ⅲ'	砂岩	27.3	36	5.3	7800	
	439	石皿	J-17	Ⅲ'	砂岩	27	36.6	7.4	5100	

## 2 繩文時代中期・後期

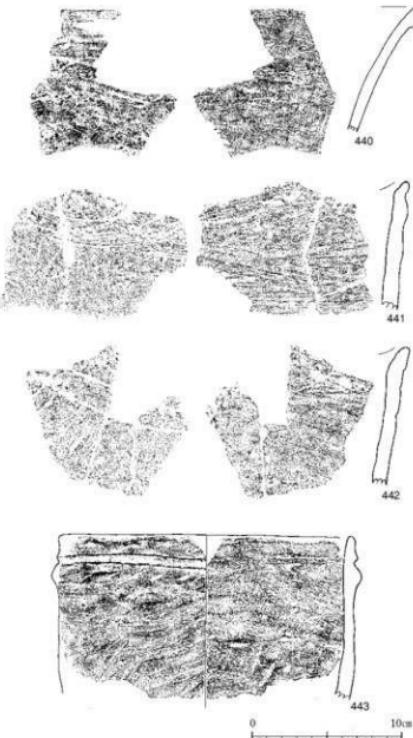
繩文時代中期・後期については、遺構は検出されず、遺物のみが出土した。遺物は土器で、点数も4点と少ない。

### (1) 土器 (第57図 440~443)

Ⅹ類～Ⅺ類土器に分類した。

440は圓頭土器に分類したものである。胎土に滑石を含み、口縁部は外側に肥厚させて突帯をつくる。

441・442は同一個体と思われるもので、Ⅹ類に分類した。口縁部は波状口縁を呈し、外面には沈線が施される。443はⅪ類土器に分類したものである。口縁部は外側に肥厚し、凹線が彎る。胴部は無文で、ナデ調整が施される。



## 3 繩文晚期

繩文時代晩期は、西側調査区から土坑が1基、東側調査区から柱穴列が6基検出された。遺物は土器と石器が出土したが、出土量は非常に少ない。

### (1) 遺構

#### ① 土坑 (第58図～第62図)

西側調査区K-20区、Ⅳ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で直径約1mを測り、掘り込みは約15cm程度である。

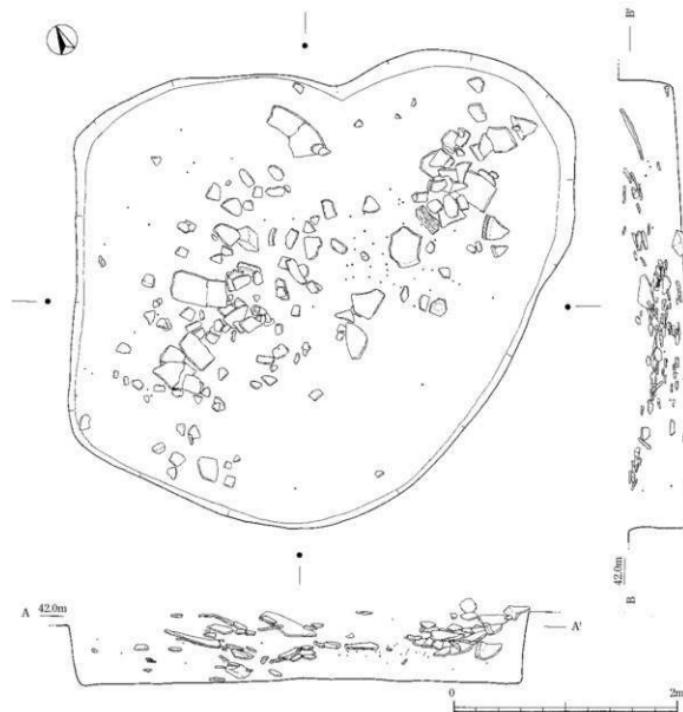
土坑内からは圓頭に分類される土器片が多く出土し、そのうち3個体についてはほぼ完形に復元することができた。またその他に石器2点と菅玉2点も出土した。444・445・447は、Ⅹ類土器に分類されるものである。そのうち444・445はほぼ完形に復元できた資料である。胴部最大径が器高を二分する位置にあり、口縁部とほぼ同じ大きさを呈する。444は深鉢形土器で、口縁部幅が狭くや内側に内湾する。また凹線が先端の丸い工具を使用して3条彎る。底部はわずかに上げ底となる。器面調整は、内外面

第57図 Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ類土器

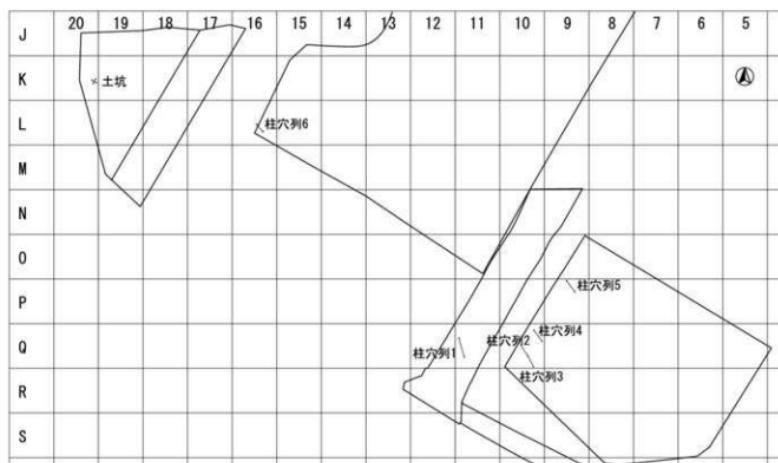
とも条痕を施した後ナデ調整を行っているが、一部条痕が残る部分も見られる。445は深鉢形土器と浅鉢形土器の中間的な形狀のものである。胴部は最大径部分で「く」の字状に屈曲し、頸部で外反した後口縁部でもわずかに開く。口縁部幅は狭く、1条の凹線が彎る。また、ゆるやかな山状突起を1か所有し、凹点を施す。底部は高台風に作り出している。器面調整は内外面とも丁寧なミガキが施される。447は、444と同様の器形を呈する深鉢形土器の口縁部である。446は圓頭土器に分類される深鉢形土器

の口縁部である。448は小型の深鉢形土器である。肩類土器に相当するものと思われる。底部から胴部下半に欠けて「ハ」の字状に開き、そこから上方へ延びる。口縁部はやや内傾し、斜位の沈線が格子状に施される。底部は平底で厚い。449は肩類土器に分類される深鉢形土器の胴部である。胴部最大径部で「く」の字状に屈曲し、わずかに湾曲しながら頭部へと延びる。450は、III類に分類される鉢形の

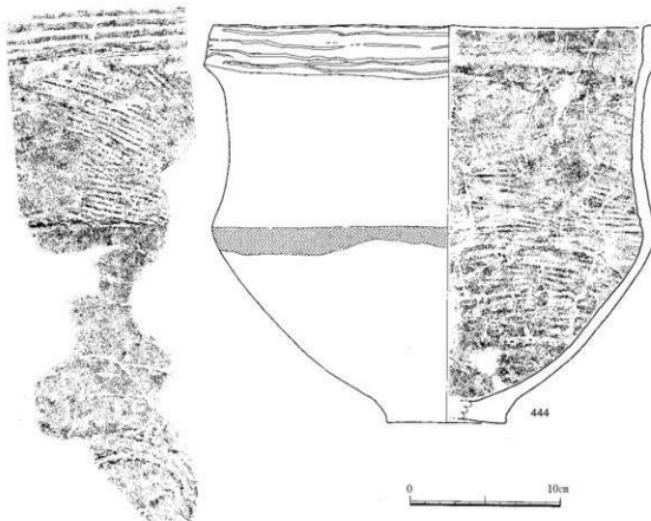
土器である。内外面とも丁寧なナデ調整が施され、煤が付着する。451~454は肩類土器に分類される浅鉢形土器である。肩部と頸部の間が短く、頸部で「く」の字状に外側へ屈曲し、短い口縁部をもつ。肩部の屈曲もシャープなため、稜が明瞭である。内外面ともミガキ調整が施される。455は肩類に相当すると思われる深鉢形土器の底部である。456は頁岩製の磨製石斧の刃部である。457は黒



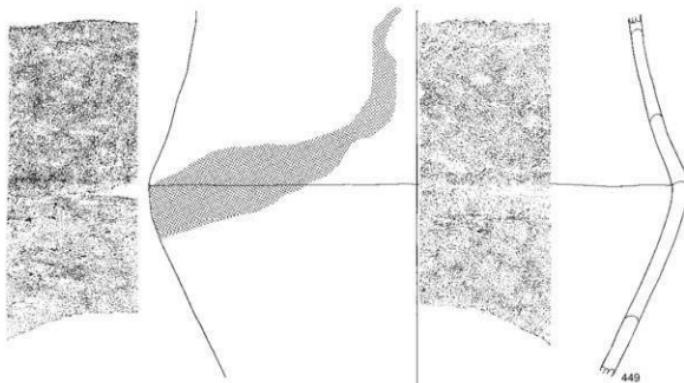
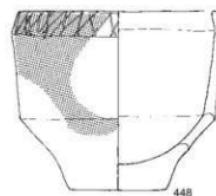
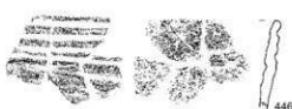
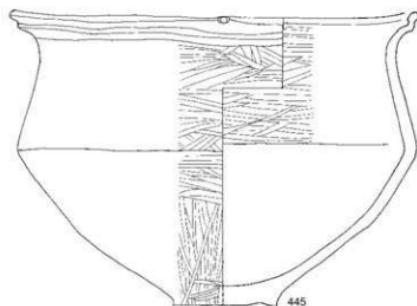
第58図 土抗



第59図 繩文時代晩期遺構配置図 (1/2000)

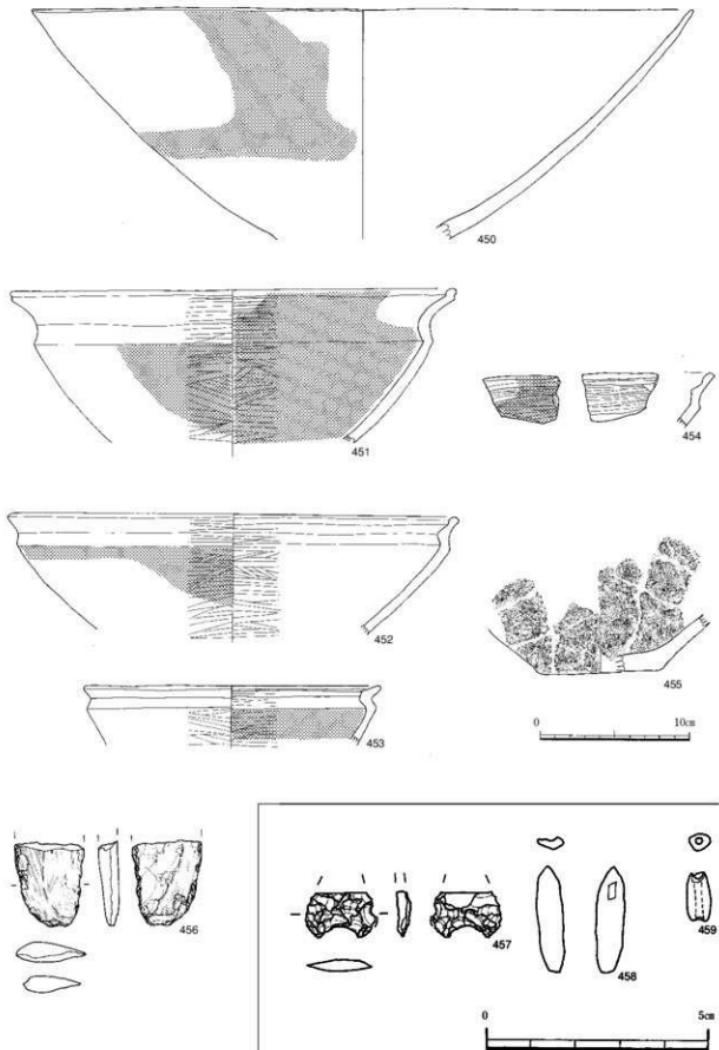


第60図 土坑内出土遺物 1

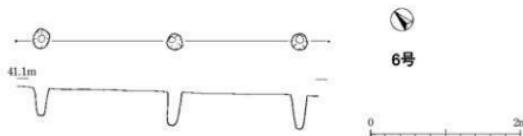
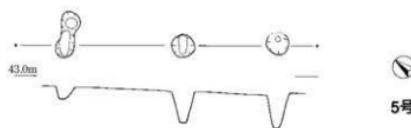
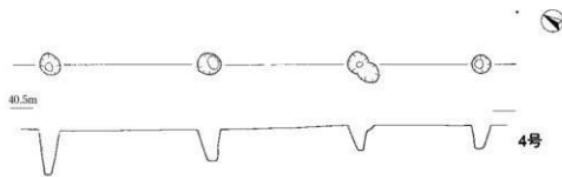
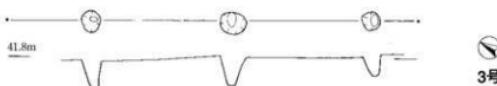
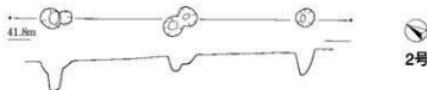


0 10cm

第61図 土坑内出土遺物 2

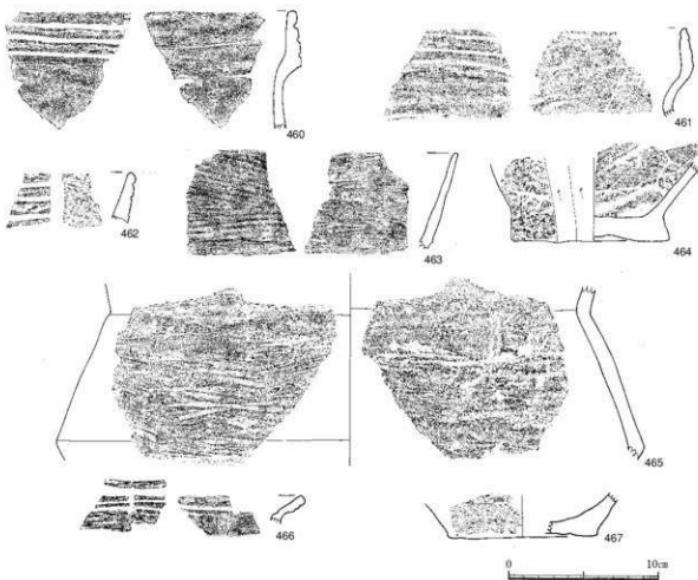


第62図 土坑内出土遺物 3



0 1 2m

第63図 柱穴列



第64図 XM・XI類土器

曜石製の石鎌であるが、先端部は欠損している。458・459は管玉である。石材は結晶片岩様綠色岩を使用している。

#### 柱穴列（第63図）

柱穴列は、東側調査区においてⅤ層上面で6基検出された。軸方向は6基ともおよそ北北西—南南東である。そのうち5基はP・Q—9～11区に集中している。柱穴は5つ並ぶものが1基、4つが1基で、他は全て3つである。柱穴列の性格については不明である。

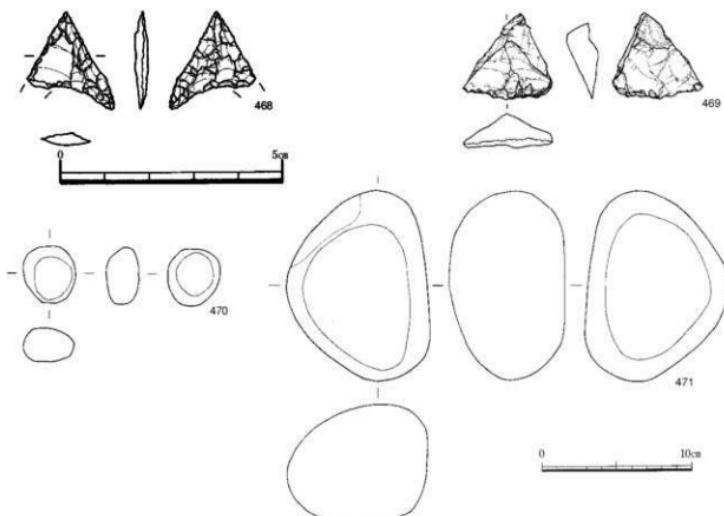
#### （2）遺物（第64図・第65図 460～471）

縄文時代晩期の遺物は西側調査区において土器と石器が出土したが、その出土量は少ない。

#### ①土器（第64図 460～467）

図化できたのは8点であった。460～462は刃類土器に分類される深鉢形土器である。やや内傾した口縁部には3条の凹線が廻る。461は器面が摩耗しており調整痕が不明であるが、460・462はミガキ調整が施される。463・465は刃類土器に分類される深鉢形土器の口縁部と肩部である。どちらも器面調整は外面が条痕、内面はナデである。465は肩部と頭部で強く屈曲する。464・467は刃もしくは刃類土器に相当する底部である。若干の凹凸は見られるが、平底である。466は刃類土器に分類される浅鉢形土器である。頭部は「く」の字状に外側へ屈曲し、短い口縁部には2条の沈線が廻る。内外面ともミガキ調整が施される。





第65図 繩文時代晩期石器

縩文時代晩期石器観察表

捕図番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考 分類
						cm	cm	cm	g	
第65図	468	石鎌	K-15	Ⅲ	頁岩	2.2	2	0.3	0.7	A—b—c
	469	スクレイバー	—	表	黒曜石	3.9	4.05	1.5	14.6	
	470	磨石	—	Ⅱ	砂岩	3.9	3.4	2.2	35	
	471	磨石	L-15	Ⅲ	砂岩	12.6	9.4	7.7	1200	

## ②石器（第65図 468～471）

縩文時代晩期の石器は、石鎌、スクレイバー、磨石が出土した。

### 石鎌

468は入念な剥離が施された打製石鎌である。石材は頁岩で基部の一部が欠損している。P21にある農業開発総合センター遺跡群の石鎌分類団によると、A—b—cに分類される。

### スクレイバー

469はスクレイバーである。黒曜石製で、内眼観察によると上牛鼻産に類似するものと思われる。下部に刃部形成が施されている。

### 磨石

470・471は砂岩製の磨石である。両面に磨石の作業面が見られる。敲打痕などは見られなかった。

## 第6節 小結

宗円壠遺跡においては、旧石器時代（細石器文化期・ナイフ形石器文化期）、縄文時代早期、中期、後期、晚期、中世の各時代の遺構・遺物が出土している。そのうち中世については溝状遺構が検出されており、他の溝状遺構との関連から調査脇遺跡の中で掲載した。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、東側と西側に出土地点を分けることができる。東側は、調査範囲全面に200点近い遺物が点在している。西側は、層の区分が難しく、Ⅲ層とⅣ層の一部を旧石器時代の遺物と設定し、集中区・石材の分布状況から3つのブロックを設定した。

東側調整区（1~39）で、出土が顕著なものはナイフ形石器である。点数が18点と多く、東側出土量の1割弱を占める。石材別にみると、黄褐色に白い筋が混ざる玉髓を利用しているものが多い。同一母岩から剥ぎ取ったものもあると思われる。また、シリト質頁岩製のものも多い。石器製作所だった可能性も考えられる。

西側調整区（40~88）は、石材と器種の分布から3つのブロックとそれ以外の地点からの出土と設定した。各ブロックから、細石刃核・細石刃が出土している。また、細石刃核は比較的小さなものが多い。

### 縄文時代早期

縄文時代早期の遺構は、西側調査区J~19区において、集石が3基集中して検出された。

縄文時代早期の土器は、I類土器~Ⅴ類土器の12種類に分類した。それぞれの類に比定する土器型式は以下のとおりである。

- I類土器 岩本式土器（早期前半）
- II類土器 志風頭式土器（早期前半）
- III類土器 加栗山式土器（早期前半）
- IV類土器 小牧3A段階（早期前半）
- V類土器 吉田式土器（早期前半）
- VI類土器 石坂式土器（早期中半）
- VII類土器 下利峯式土器（早期中半）
- Ⅷ類土器 桑ノ丸式土器（早期中半）
- Ⅸ類土器 中原式土器（早期中半）

X類土器 押形文土器（早期中半）

XI類土器 寒ノ神式土器（早期後半）

XII類土器 右京西タイブ（早期後半）

これらのうち出土量が最も多いものはⅨ類土器の石坂式土器である。口縁部が外反もしくはやや外反するものと直行するものの2タイプがあり、前者をⅨa類土器、後者をⅨb類土器とした。宗円壠遺跡の石坂式土器は、Ⅸa類土器が中心で、これは前追亮一氏の分類におけるI式（古段階）に相当する。口唇部は丸みを帯び、口縁部は外反し、胴部はやや膨らむ形状を呈する。文様は口唇部と体部に浅い刻目を有し、胴部は綾状の貝殻条底文や格子目の条痕文が施されるものである。また、Ⅸb類土器はⅡ式（新段階）に相当するものであるが、口縁部が外傾もしくは直行するもの他にやや内湾する資料もありバリエーションに富んでいる。

縄文時代早期の石器は、他の農業開発総合センター遺跡群の出土状況とさほど変わりはない。

石鏃は打製石鏃がほとんどであった。入念な交叉剥離で調整されている。石鏃の平均長は1.82cmで、その中で、最長だったC-e-b型に分類した石器は、大久保型石鏃といわれるもので、近隣の遺跡でも數点検出されている。

出土数が最も多かった石器は磨石であった。掲載数は67点であった。磨石のみの機能を持つものが31点、磨石と敲石の機能を持つものが24点、磨石・敲石・凹石の機能を持つものが12点であった。石材は砂岩が61点で他の7点は安山岩であった。

石皿は5点とも敲打痕はみられなかった。

### 縄文時代中期・後期

遺物はⅩ類土器からⅪ類土器で4点と非常に少なく、遺構も検出されなかった。Ⅺ類土器は大きく外傾した口縁部先端を外側に肥厚させ突きをつくるもので、胎内には滑石を含む。中期後半の中尾田Ⅲ類の範疇ではないかと考えたいが、類例がなく今後の資料の増加を待ちたい。Ⅻ類土器は外面口縁部付近に先端の鋭い工具により沈線を施すもので、口縁部は波状口縁を呈する。指宿式土器の範疇ではないかと考えたい。Ⅼ類土器は市来式土器に比定されるものである。

### 縄文時代晚期

縄文時代晚期は土坑1基、柱穴列6基が検出された。特に土坑内からは獣類に分類される上加世田式土器が多く出土し、そのうち3個体（444・445・448）についてはほぼ完形に復元することができた。これらの土坑内出土土器は、上加世田式土器におけるセット関係を知る上で貴重な資料である。

またその他に石器2点と結晶片岩様緑色岩製の菅玉2点も出土した。結晶片岩様緑色岩製の玉類については、農業センター遺跡群で本遺跡のほか、尾ヶ原遺跡で勾玉1点、諏訪脇遺跡で菅玉1点、勾玉1点、小玉2点、南原内堀遺跡で小玉1点、諏訪脇遺跡で菅玉1点の計4遺跡で7点が出土している。いずれも縄文時代晚期の包含層から出土しており、上加世田式土器段階から入佐式土器段階にかけてのものと思われる。これら玉類の石材の原産地については不明であるが、諏訪前遺跡から有溝砥石が出土していることから、農業センター遺跡群の玉類は諏訪前遺跡で製作されたものと思われる。

柱穴列については、詳細な用途等ははっきりしないが、6基中5基がP・Q—9～11区に集中して検出されており、軸方向もほぼ同じであることから、同時期に何らかの施設があったものと思われる。

遺物については、出土量は少ない。獣類土器の上加世田式土器、獣類土器の入佐式土器が出土している。なお近年の研究において、これまで晩期前半としていた土器を後期後葉とする見方があり、大坪遺跡（鹿児島県出水市）の報告書で東和幸氏は、上加世田式土器を後期後半、入佐式土器古段階を後期終末、入佐式土器新段階を晩期初頭、黒川式土器を晩期前半から中半に位置づけているが、農業センター遺跡群では従来の編年によって述べた。

縄文時代晚期の石器は、石鏃、スクレイバー、磨石が出土している。しかし出土量が少量であるため詳しいことは断定できなかった。

### 参考文献

清田純一 1998 「縄文後・晩期土器考—中九州の縄文後・晩期土器とその並行形式について—」『肥後考古』第11号 肥後考古学会

高橋信政・安藤英治1983 「大分県官地前遺跡の採集資料—大分県の晩期前半を中心とした土器編年—」『赤れんが』第2号 熊本大学考古学研究会

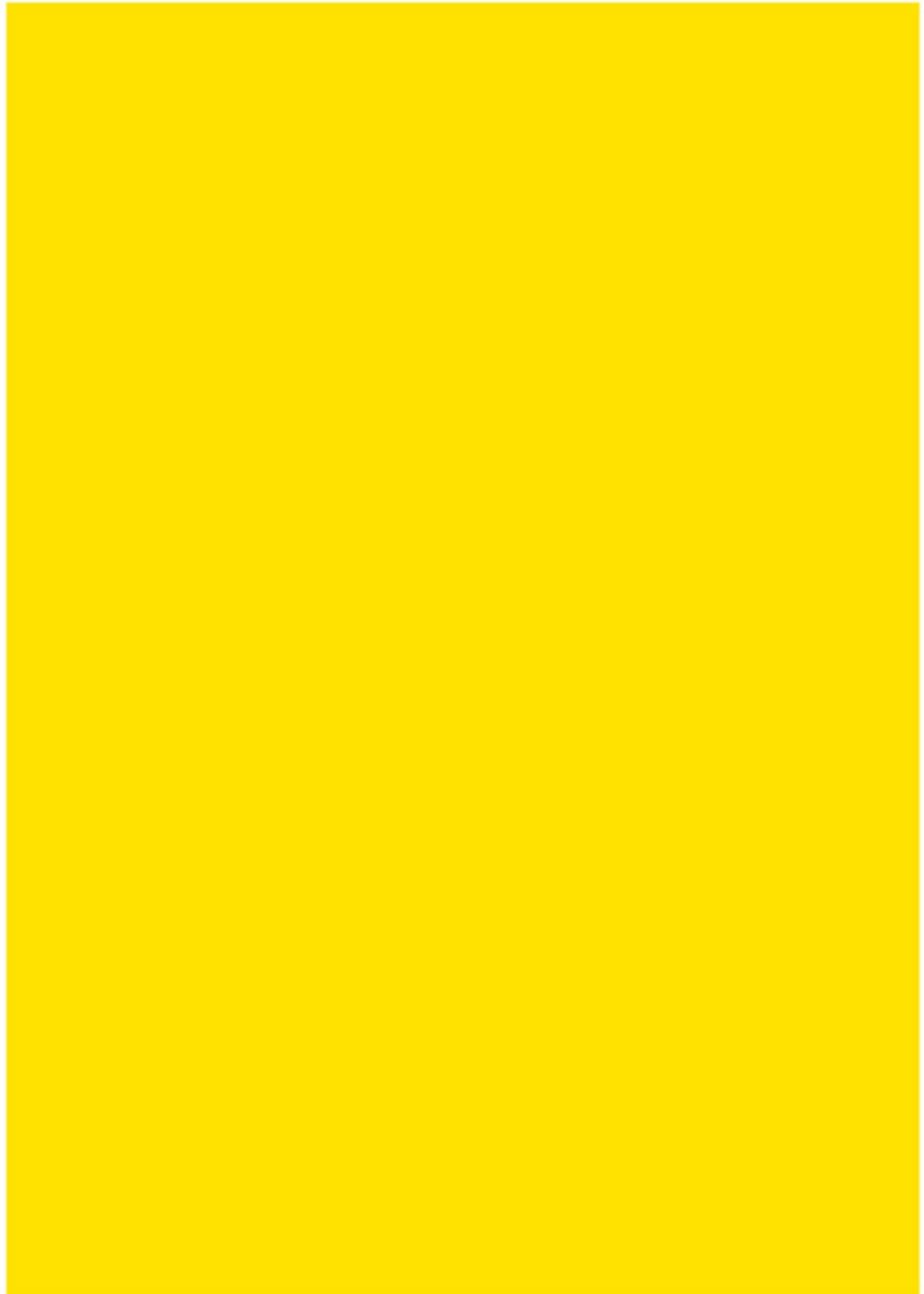
前田亮一 2003 「石板式土器再考」 「縄文の森から」 制刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（69）「大原野遺跡」 2004

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）「大坪遺跡」 2005  
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）「尾ヶ原遺跡」 2006

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（112）「諏訪半田遺跡・諏訪前遺跡・南原内堀遺跡・加治屋塚遺跡」 2007

神 原 遺 跡



## 第VI章 神原遺跡の発掘調査成果

### 第1節 調査の経過と層位

神原遺跡は、平成13年10月10日～10月18日までと、平成14年10月15日～平成15年1月17日まで本調査を実施した。本調査は、13年度に支線道路建設部分、14年度に農業センターの病院付帯施設建設地に相当する範囲を対象とした。また、範囲内に工事が行なわれないため未調査とした部分があり、今後、掘削等を行なう場合には発掘調査の必要がある。なお、一部遺物で、調査期間中の大雨により流出し、出土地点不明となったものがある。

#### 1 日誌抄

13年度

10月 調査開始

II層掘り下げ。溝状遺構精査。写真撮影。

III～V層掘り下げ。溝状遺構精査。

12月

遺構内遺物実測。遺物取り上げ。遺構実測。

14年度

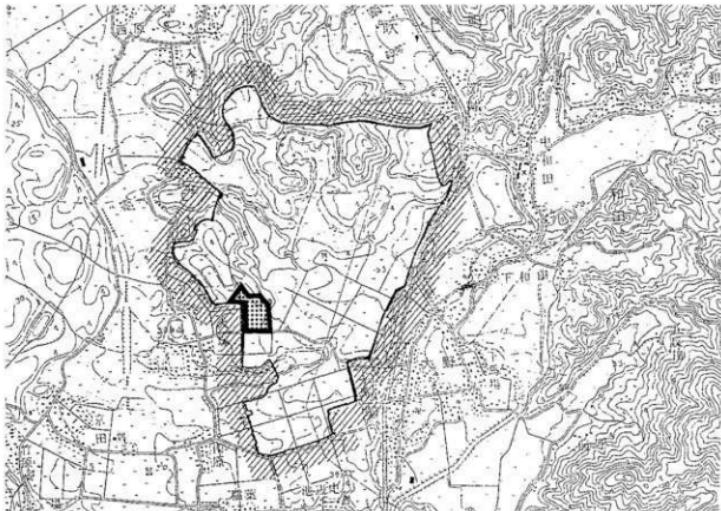
10月 調査再開

表土剥ぎ。K～L-8区、O-5区、トレンチ掘り下げ。L-7、M-6、N-6、O-6区IV層掘り下げ。I・J-9区古道検出、写真撮影。IV層遺物取り上げ。K-8区疊群写真撮影。

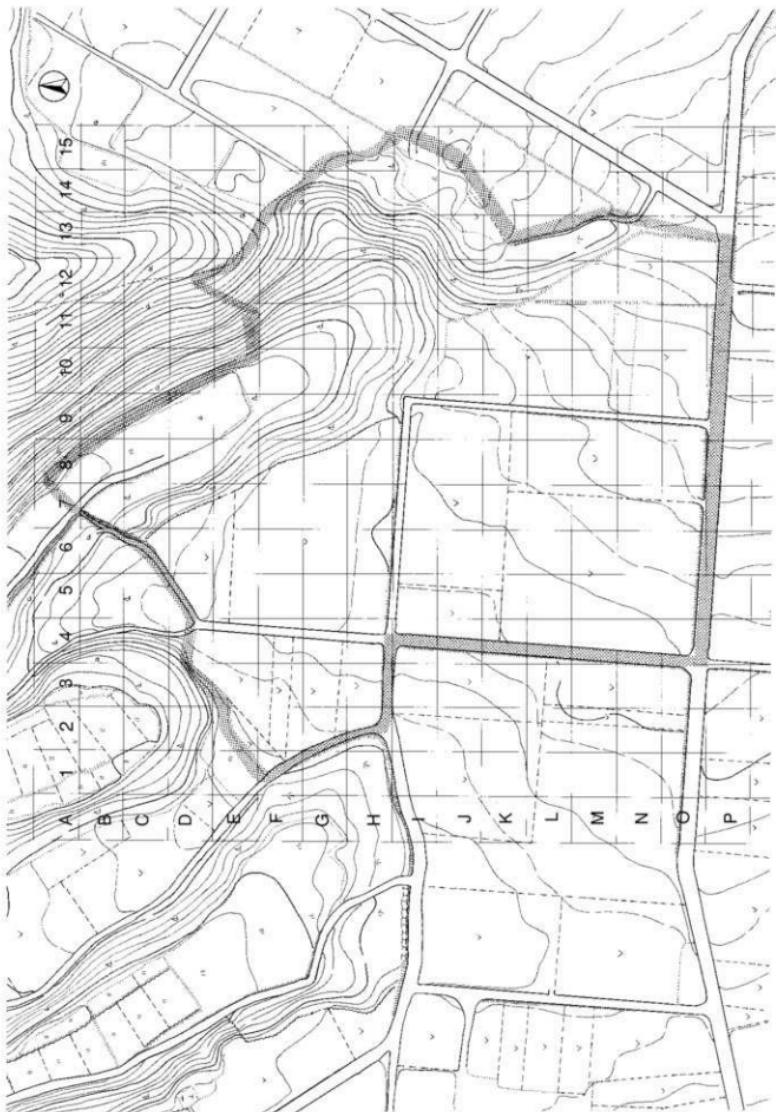
11月 O・M-8区、M・N-6区、トレンチ掘り下げ。I・J・K-8・9区、V・VI層掘り下げ。土層断面図作成、写真撮影。中世・晩期遺構実測。柱穴・土坑検出。半蔵・写真撮影。柱穴列・疊群写真撮影。

12月 I・J・K-8・9区V・VI層掘り下げ。M・K-7区柱穴列完写真撮影。グリッド杭打ち。掘立柱建物完写真撮影。L-7区晩期土坑掘り下げ。疊群写真撮影。実測。遺物取り上げ。

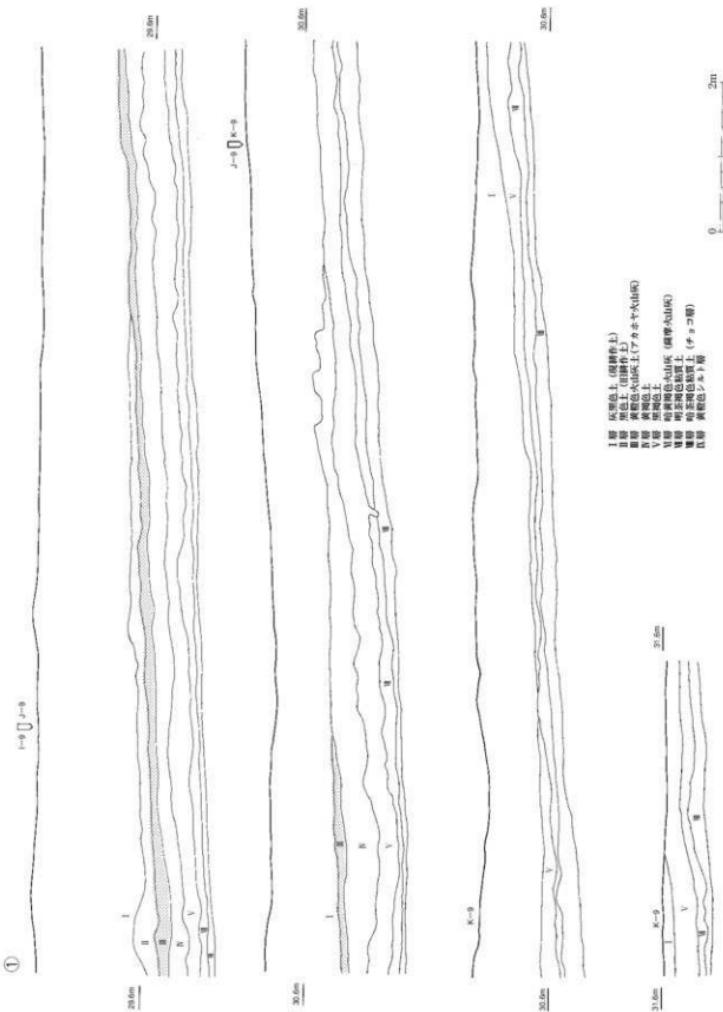
1月 遺物取り上げ。集石実測。J-9区掘り下げ。I-K-9区土層断面図作成。旧石器疊群実測、取り上げ。



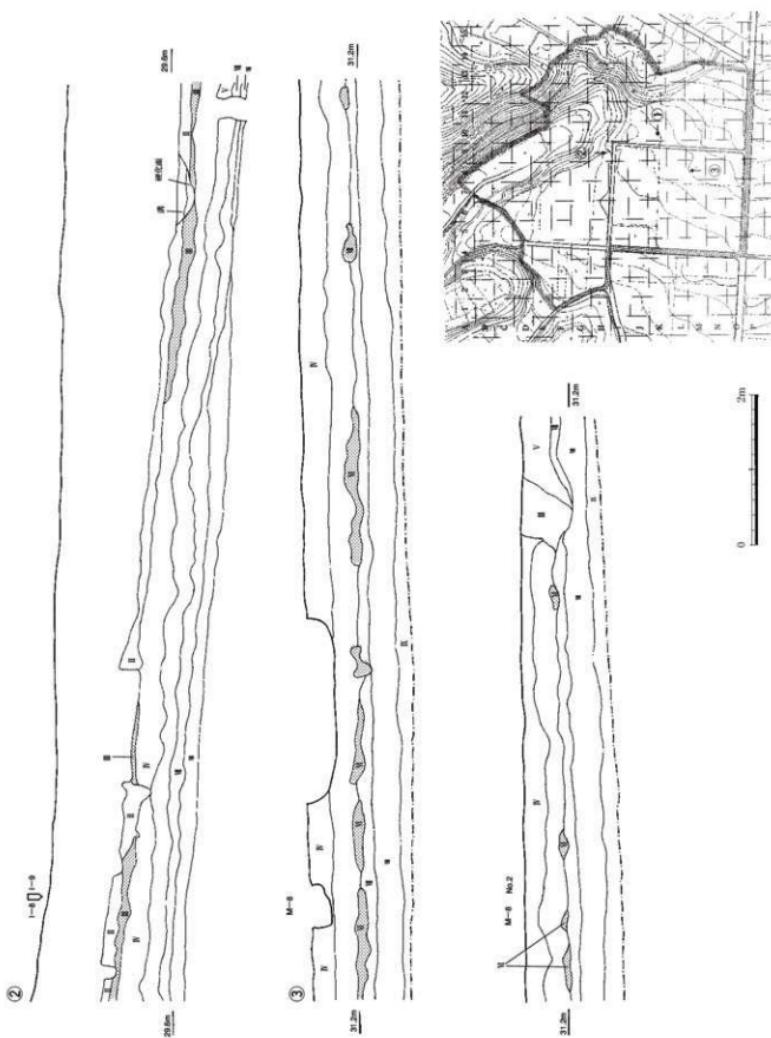
第1図 神原遺跡位置図



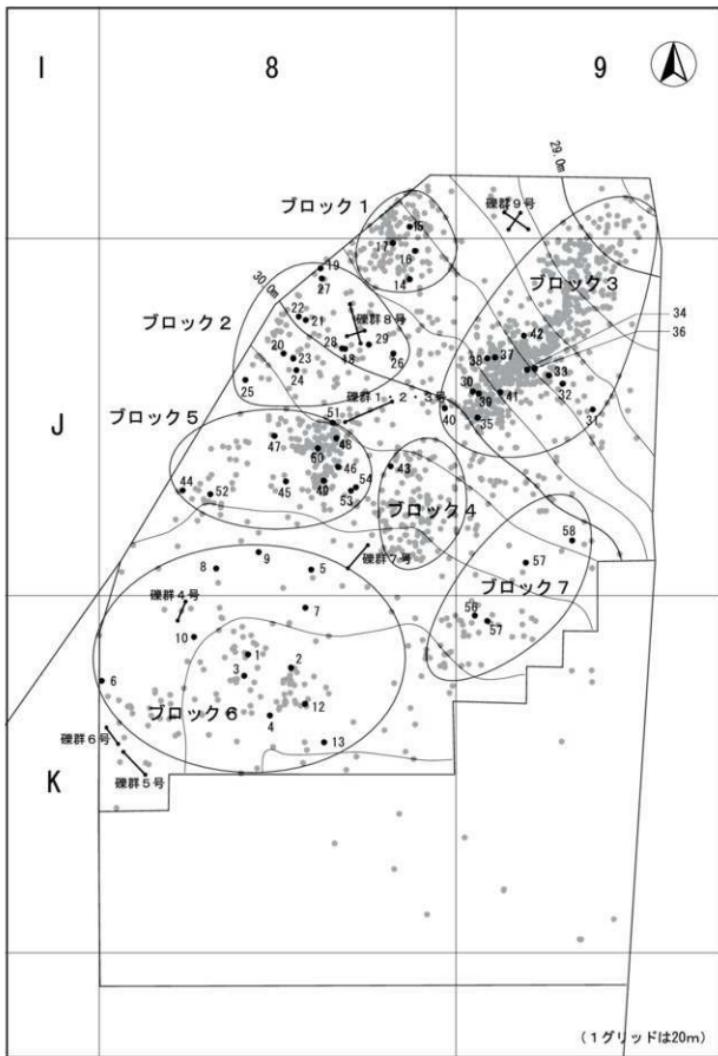
第2図 地形図及びグリッド配置図



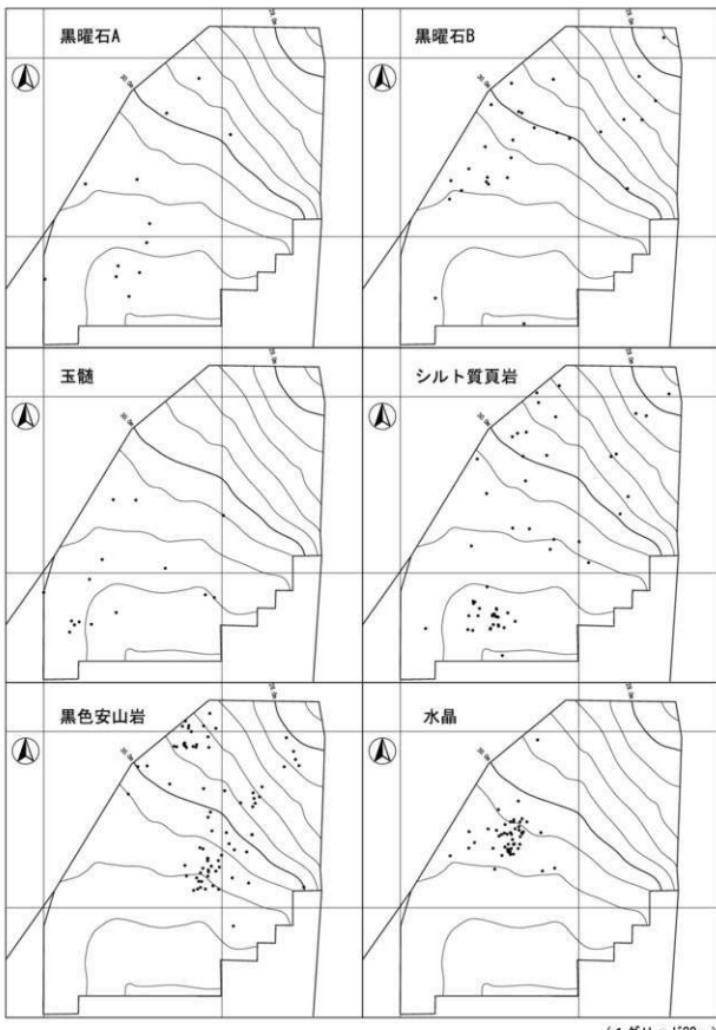
第3図 土層断面（1）



第4図 土層断面（2）

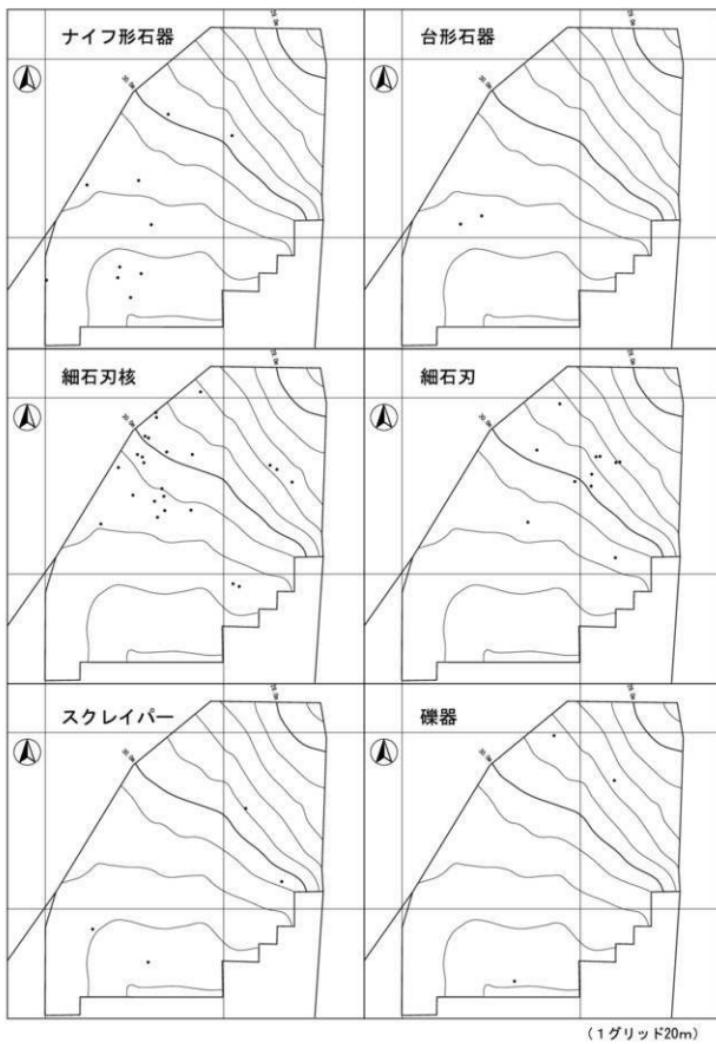


第5図 旧石器時代遺構配置図及び遺物出土状況

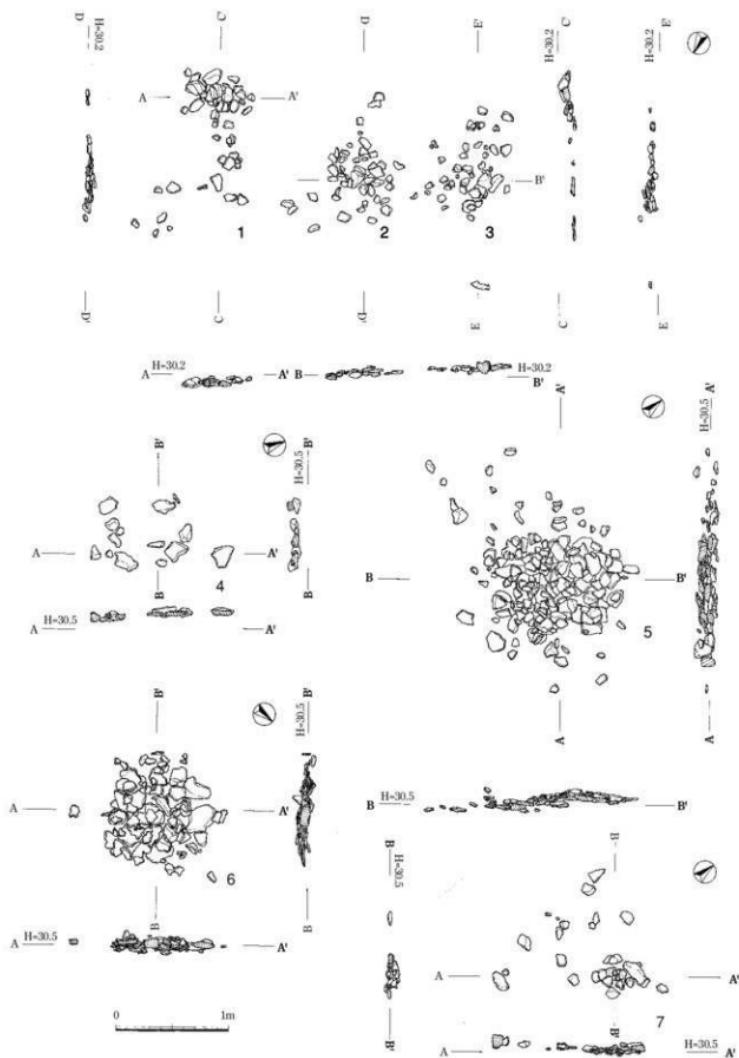


(1 グリッド20m)

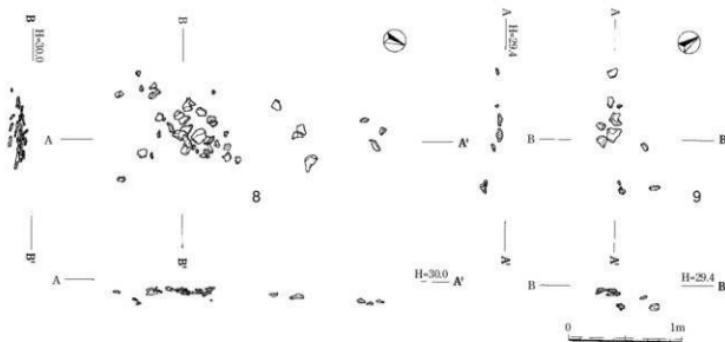
第6図 旧石器時代石材別分布図



第7図 旧石器時代石器別分布図



第8図 旧石器時代礫群1



第9図 旧石器時代礫群2

## 第2節 遺跡の層序

主な時代と包含層、遺物・遺構は以下のとおりである。

- ・ 平安時代～中世（Ⅱ層）  
溝状遺構・古道・土師器・須恵器・青磁
- ・ 弥生時代～古墳時代初期（Ⅲ層）  
土器
- ・ 繩文時代晩期（Ⅳ～Ⅴ層）  
掘立柱建物跡・柱穴列・土坑・土器・石器
- ・ 繩文時代早期（Ⅳ～V層）  
土器・石器
- ・ 繩文時代草創期（Ⅵ層）  
集石
- ・ 旧石器（Ⅶ層）  
礫群・石器・剥片

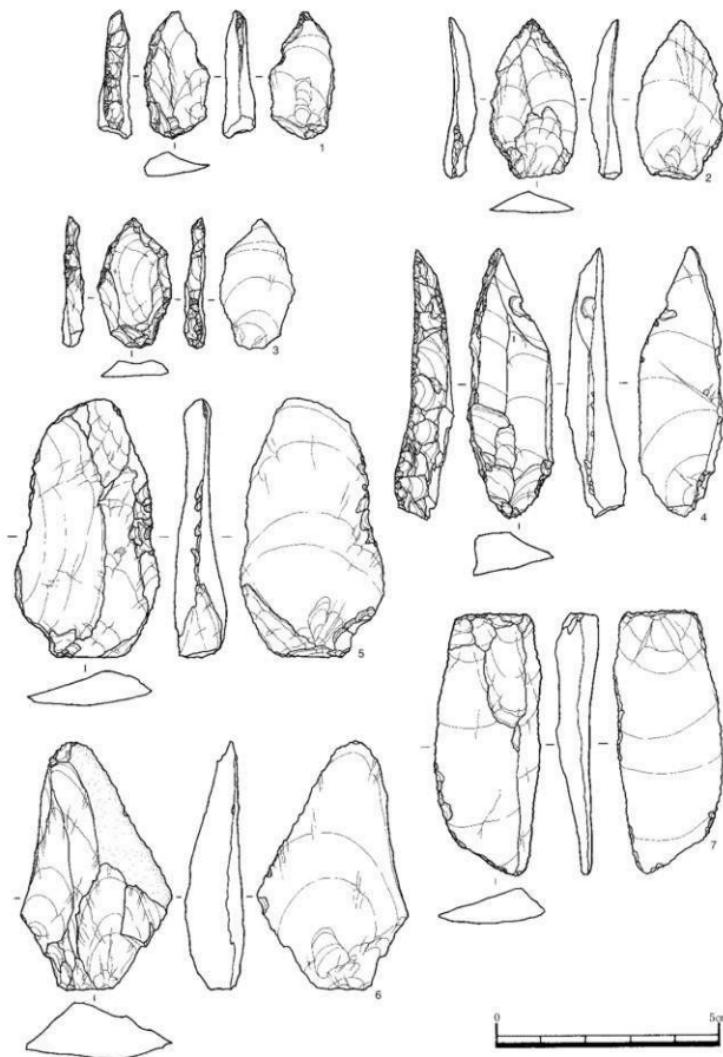
## 第3節 発掘調査の方法及び概要

神原遺跡は、八ツ手状に開析された台地の南東部に位置し、北東側に比高差15mの谷が位置している。調査のためのグリッドを20m×20mで設定し、調査面積は7600m<sup>2</sup>である。

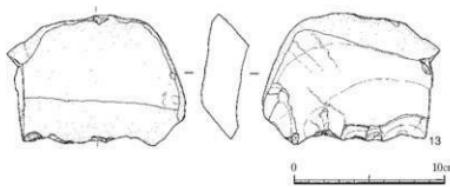
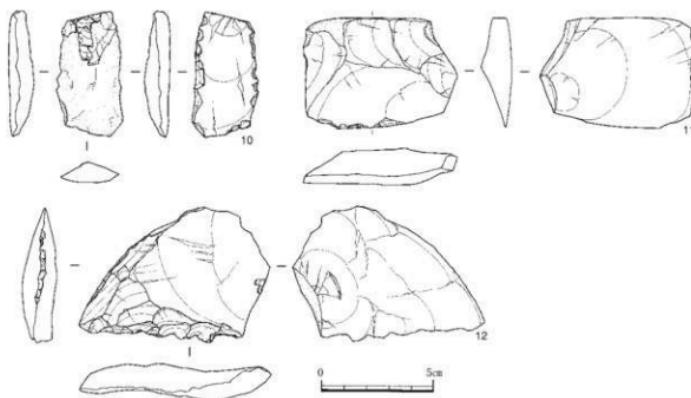
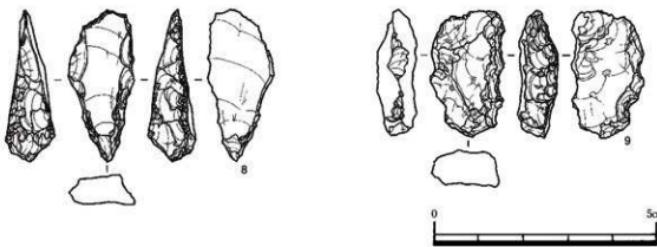
13年度は、支線道路建設部分の調査を実施した（L-12区～P-13区）。発掘調査区の標高の高い面に3本のトレーンチを設定して掘り下げたが、表土下

はシラス層であった。トレーンチ結果をふまえて、発掘調査は平坦地のみ実施した。平坦面の部分は表土を除去した段階では、Ⅲ層（アカホヤ層）下面以下が存在していた。しかし、現道に近い部分においてはシラス層まで搅乱を受けていた。調査はⅢ層面の精査及び掘り下げから行なった。遺物の出土量は多くはなかったが、Ⅲ層を掘り込んでいくと、黒色土を埋土とする溝が2条検出された。1条の溝は、堀り込みが浅く、遺物の出土もなかった。もう1条の溝は、深いところで1m以上の深さがあった。溝からは古代の須恵器・土師器が出土した。Ⅳ層面からは、縄文時代早期の土器が数点出土した。

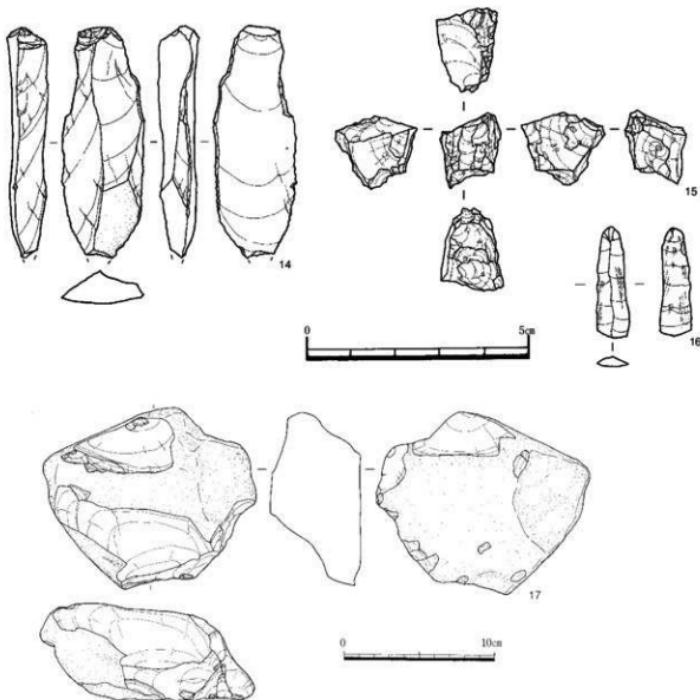
14年度は、農業開発総合センター病院付帯施設部分の調査を実施した（I-9区～O-4区）。Ⅲ層から、縄文時代晩期の掘立柱建物跡3棟、土坑2基、柱穴列2基が検出された。北東側の谷に向かって傾斜する地点で、旧石器時代、縄文時代草創期の遺構・遺物が多数発見された。Ⅵ層から、縄文時代草創期の集石。Ⅶ層からは旧石器時代の遺構として礫群9基、同じく旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器、細石刃等が出土した。旧石器時代の遺物・遺構はナイフ形石器を作りうる時期と細石刃を作りうる時期のものに大きく二分できると考えられる。



第10図 旧石器 1



第11図 旧石器 2



第12図 旧石器3

#### 第4節 旧石器時代の調査

旧石器時代の遺物の総数は、黒曜石、貝岩、玉髓等を中心約1800点を数える。出土区は、I-K-8~9区である。石材ごとに出土地点を分類したところ、7つのブロックに分けることができた(第5図)。また、ブロックで主に出土する器種が、ナイフ形石器(6ブロック)、細石刃核(1~5、7ブロック)と異なるため、ブロックごとに時期差があるものと考えられる。

石材については、全面的に黒曜石が多くを占めるが、ブロックによって玉髓や水晶が多く出土している。なお、黒曜石は肉眼により観察した特徴をもとに、下記のように分類を行なった。

黒曜石A・・・黒色で炭化している。不純物が少なく光を通さない。種脇町上牛鼻産に類似する。

黒曜石B・・・黒色、アメ色で不純物を含む。鹿児島市三船産に類似する。

黒曜石C・・・黒色、ガラス質で小粒の不純物が多く含まれる。大口市日東産に類似する。

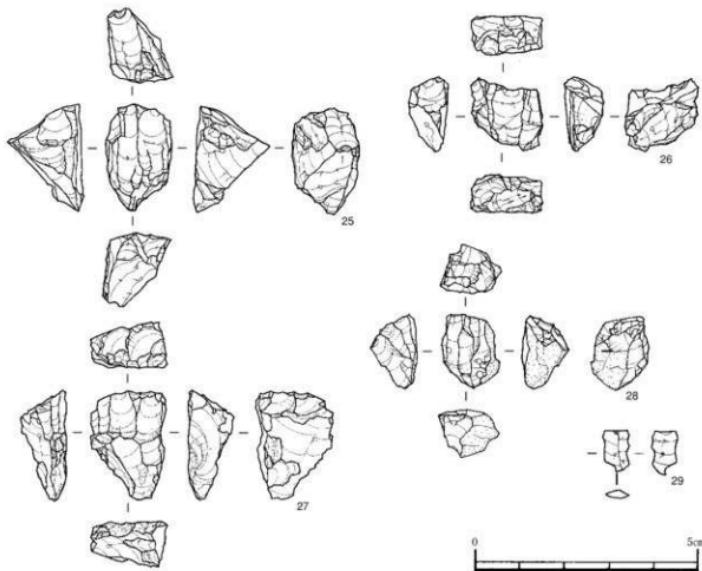
#### (1) 遺構

##### 礫群1・2・3(第8図)

J-8区で検出された。礫が近接して検出されたが、集中部が3ヶ存在するため、3ヶ所存在すると



第13図 旧石器 4



第14図 旧石器5

判断した。1は、礫数53、平均重量87.84 gである。南側に10cm大の礫が集中している。2は、礫数47、平均重量73.40 gである。10cm大の角礫で構成されている。3は、礫数47、平均重量64.04 gである。集中区は存在するが、全体的にまとまりに欠ける。

#### 礫群5（第8図）

K—8区で検出された。礫数14、平均重量406.43 gである。礫は約15cmの大きなものが多いが、散在している。

#### 礫群5（第8図）

K—8区で検出された。礫数173、平均重量162.20 gである。上部は10cmほどの礫だが、その下部に20cmほどの大きな礫が多数使用されており、密集度も高い。

#### 礫群6（第8図）

K—8区で検出された。礫群5と隣接している。

礫数97、平均重量179.87 gである。20cm以上の大きな礫を多数使用し、中心部にそのほとんどが集中している。

#### 礫群7（第8図）

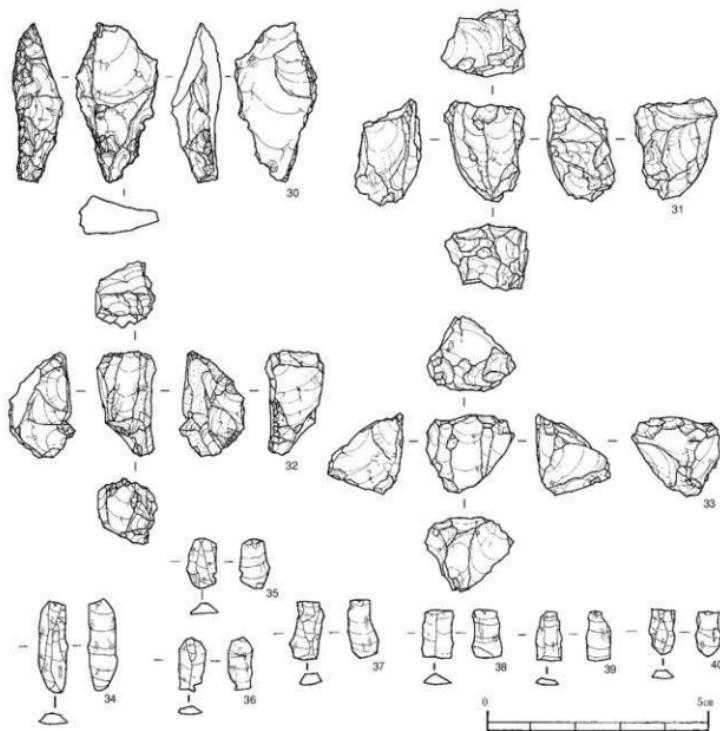
J—8区で検出された。礫数33、平均重量159.55 gである。周辺でナイフ形石器が出土している。10cm大の礫で構成されているが、全体的にまばらで、20cm大の礫に数点集中している。

#### 礫群8（第9図）

J—8区で検出された。礫数49である。10cm大の礫と5cm大の礫で構成され、中心部はあるが、まとまりはみられない。周辺で細石刃核が多数出土しており、関連性があると思われる。

#### 礫群9（第9図）

I—9区で検出された。礫数12で、集中区もない。



第15図 旧石器 6

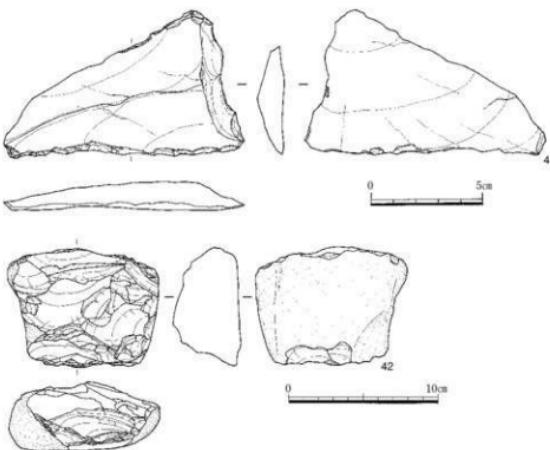
(2) 遺物

ブロック6 (第10~11図1~13)

J・K-8区にわたる、径約15m×12mの範囲に分布するブロックである。頁岩およびシルト質頁岩を主体とし、黒曜石A・黒曜石B、玉髓が点在し、東側を中心としてナイフ形石器が多く出土している。

1~6はナイフ形石器である。1は黒色安山岩製。縦長剥片の左側縁に剥離を施している。2は頁岩製。縦長剥片を素材とし、先端部に使用痕が確認できる。

3は玉髓製。基部側からの打撃で縦長の剥片を取り出し、その後、細かな加工を右側面下部・左側面上部に施している。4は、頁岩製。左側面部を加工して刃部を形成した後、さらに細かな加工を施している。5は縦長の薄い剥片を加工したもの。右側縁に正面から加工を施している。6は自然面を残すもので、先端部に使用痕が確認できる。7は使用痕剥片である。上部に二次加工を、左側縁部に使用痕を観察できるが、表面の風化が激しい。8・9は、台形石器である。8は玉髓製の縦長剥片の両側縁部に急角



第16図 旧石器 7

度の二次加工を施している。9はやや厚みのある黒曜石B製。右側面部は先端部から基部にかけて二次加工が施される。10~12はスクレイバーである。10は自然面を残す縦長剥片で、裏面から両側縁部に二次加工を施し、刃部を形成している。11は、横長の剥片を加工し、下部に刃部を形成している。12も下部に刃部を形成している。また、左側縁部上に細かな二次加工が施されている。13は礫器である。正面全体に自然面を残すもので、下部に鋸歯状の刃部を形成している。

#### プロック1 (第12図14~17)

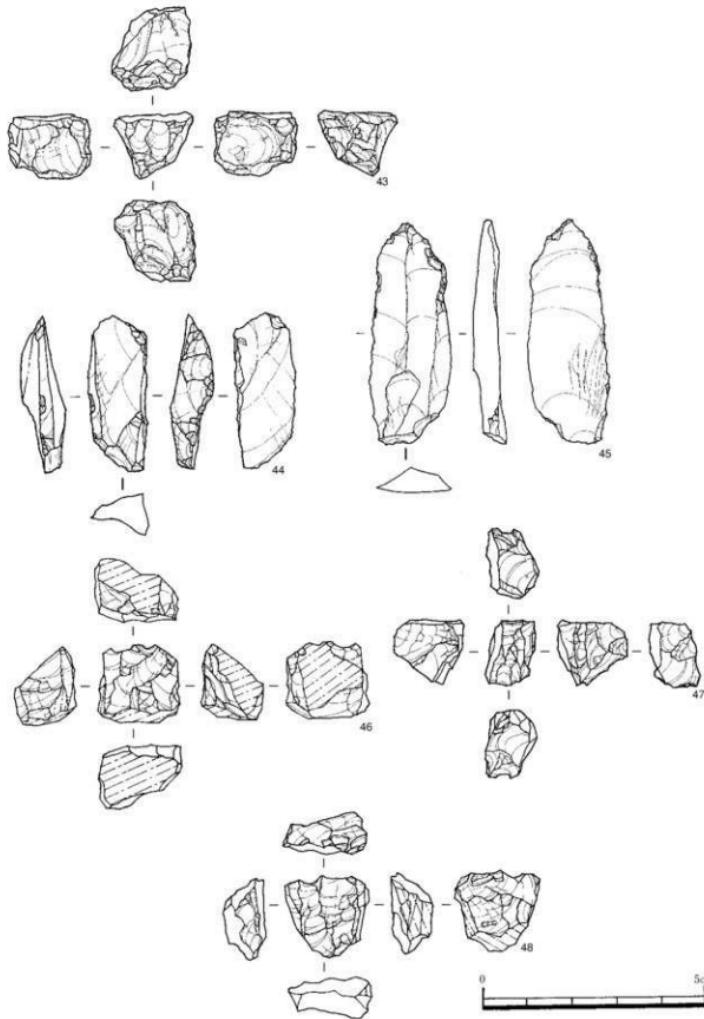
I・K~8区にわたる、約6m×6mの範囲に分布するブロックである。分布の様子から、調査区外にも範囲が広がっていると考えられる。黒色安山岩、頁岩が集中して出土している。

14は使用痕剥片である。縦長剥片を素材とし、上部に二次加工を施している。15は細石刃核である。平坦な面を打面として設定し、小口面から細石刃を取り出している。16は黒曜石Aの細石刃(スボール)である。17は頁岩製の礫器である。正面・背面に自然面を残す、手のひら大の角礫を素材としている。

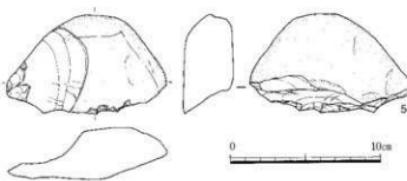
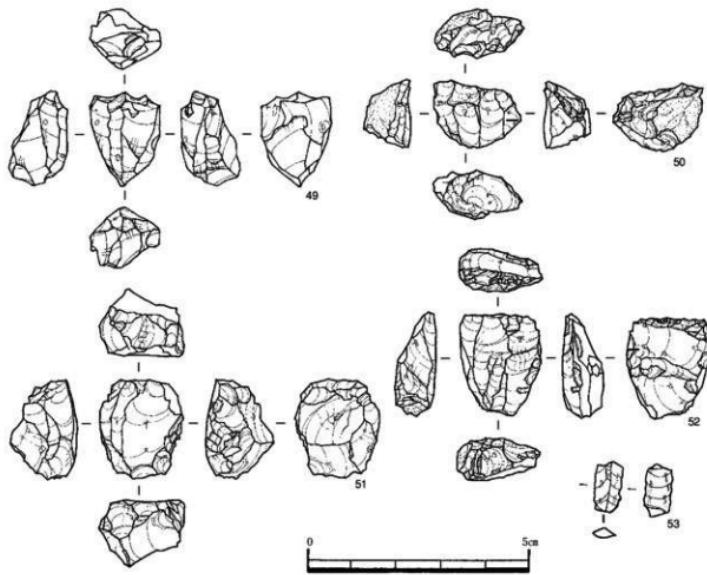
#### プロック2 (第13・14図18~29)

J~8区の約9m×6mと東西にわたるブロックである。石材別出土状況は、黒曜石Aを主体とし、黒曜石B、シルト質頁岩が出土している。また、細石刃核が集中して出土している。

18はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、両側縁部に細かな加工を施している。上部に自然面を残す。19~28は細石刃核である。19は自然面をのこすもので、左側縁部を作業面としている。21は横長の薄い剥片を素材としている。22は正面に作業面を有する。23は自然面を裏面に残す角礫を素材とし、正面に作業面を有する。24は幅広の礫を利用したもので、打面は後方に傾斜する。25も打面は後方に傾斜している。26は横長の剥片を加工しており、正面に作業面を有する。27は打面が平坦で後方に傾斜している。作業面は正面で、左側縁部にいくに従って薄くなっている。下部が窄まり、全体が楔形を呈する。28は黒曜石Bで、裏面・右側面に自然面を残すものである。左側面上部に細かな調整がある。29は細石刃である。右側縁部に使用痕が確認できる。



第17図 旧石器 8

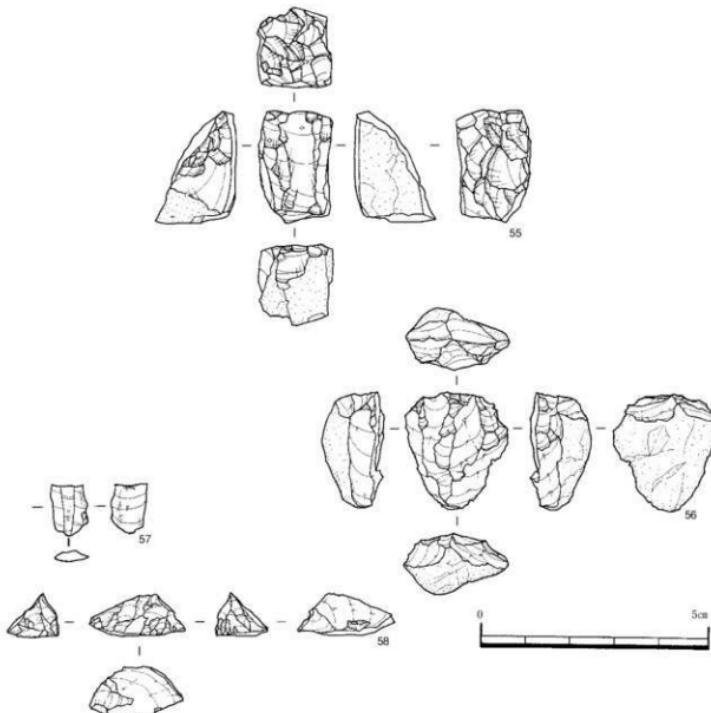


第18図 旧石器 9

ブロック3 (第15・16図30~42)

1~9区の北東から南西に細長く分布する、径約15m×9mのブロックである。全面にわたり黒曜石Aが多く出土している。特に南東側に密集区が存在し、細石刃核、細石刃が出土しており、石器製作所だった可能性がある。ほかには、頁岩、黒曜石Bが点在している。

30は黒曜石Aのナイフ形石器である。先端部から打撃を加えた極長剥片を素材とし、左側縁部に急角度のプランディングを施している。31~33は細石刃核である。31は黒曜石A。角礫を素材としている。正面を作業面としているが、裏面にも細かな調整が施されている。32は右側面部に自然面を残すものである。平坦部を打面とし、後方に長く傾斜している。



第19図 旧石器10

33も平坦部が後方に傾斜している。正面が作業面であるが、両側面が裏面に向かって窄まり、上面から見ると三角形になる。34～40は細石刃である。石材はすべて黒曜石Aである。34はスパールで、断面が台形を呈する。37は左側縁部にわずかながら使用痕が観察できる。41は頁岩製のスクレイパーである。薄い横長剥片を素材として、下部に正面から加工を施し刃部を形成している。右側面、上面にも加工が確認できる。42は礫器である。自然面の残る拳大の角礫を素材としている。正面と左上部に加工による凹みがあり、握り部分としたと思われる。

#### ブロック4（第17図43）

J-8区の径約6m×7mのブロックである。黒曜石Aが集中して出土している。

43は細石刃核である。平坦面を打面としているが、正面の作業面が狭い。

#### ブロック5（第17・18図44～54）

J-8区の径約6m×6mのブロックである。中心部に黒曜石Aが集中して出土している。また、このブロックでのみ、水晶製の石器が多く出土しているのが特徴である。

44・45はナイフ形石器である。44は右側面に急角

旧石器時代石器観察表

擇団 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第 10 団	1	K-8	層	ナイフ	黒島山岩	2.85	1.5	0.75	2.54	
	2	K-8	層	ナイフ	真岩	3.55	1.8	0.5	3.13	
	3	K-8	層	ナイフ	玉髓	2.9	1.6	0.45	2.04	
	4	K-8	層	ナイフ	真岩	6	1.8	1	10.78	
	5	J-8	層	ナイフ	真岩	5.75	2.8	1.15	16.3	
	6	K-8	層	ナイフ	真岩	5.65	3.2	1.3	18.55	
第 11 団	7	K-8	層	使用痕跡片	真岩	5.05	2.35	0.95	10.9	
	8	J-8	層	台形石器	玉髓	3.4	1.5	1.05	3.88	
	9	J-8	層	台形石器	黒曜石C	2.8	1.5	0.85	4.06	
	10	K-8	層	スクリーパー	真岩	5.6	3	0.9	20	
	11	K-8	層	スクリーパー	真岩	4.9	6.8	1.65	60	
	12	K-8	層	研器	真岩	6.05	6.95	1.55	60	
第 12 団	13	K-8	層	研器	真岩	8.3	11.8	2.6	400	
	14	J-8	層	使用痕跡片	シルト質真岩	5.2	1.8	0.8	7.6	
	15	I-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.65	1.4	1.8	3.42	
	16	J-8	層	磨石刃	黒曜石A	2	0.8	0.25	0.33	
	17	J-8	層	研器	真岩	12.1	14.2	6.4	1158	
	18	J-8	層	ナイフ	黒曜石A	2.55	1.7	0.6	2.52	
第 13 団	19	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.7	2.3	1.4	4.72	
	20	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.85	1.65	2	5.63	
	21	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.85	1.8	0.9	2.36	
	22	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.8	1.9	1.25	3.01	
	23	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2	1.9	1	5.65	
	24	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.8	2	1.4	10.72	
第 14 団	25	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.4	1.6	1.7	4.24	
	26	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.65	1.6	0.9	1.83	
	27	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.45	1.75	1	3.54	
	28	J-8	層	磨石刃様	黒曜石B	1.65	1.35	1.1	2.06	
	29	J-8	層	磨石刃	黒曜石A	0.95	0.6	0.2	0.08	
	30	J-9	層	ナイフ	黒曜石A	3.5	1.75	1.05	5.13	
第 15 団	31	J-9	層	磨石刃様	黒曜石A	2.3	1.65	1.4	5.23	
	32	J-9	層	磨石刃様	黒曜石A	2.35	1.3	1.5	3.57	
	33	J-9	層	磨石刃様	黒曜石A	1.8	2	1.7	4.23	
	34	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.4	0.7	0.2	0.34	
	35	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.15	0.7	0.3	0.17	
	36	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.2	0.6	0.2	0.09	
第 16 団	37	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.35	0.65	0.3	0.21	
	38	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.1	0.65	0.25	0.26	
	39	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.15	0.6	0.15	0.12	
	40	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1	0.6	0.2	0.1	
	41	J-9	層	スクリーパー	真岩	6.5	10.8	1.3	70	
	42	J-9	層	研器	真岩	12.45	7.4	1.4	460	
第 17 団	43	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.45	1.8	1.85	4.47	
	44	J-8	層	ナイフ	シルト質真岩	3.5	1.95	0.9	3.6	
	45	J-8	層	ナイフ	真岩	5.05	1.7	0.6	5.5	
	46	J-8	層	磨石刃様	水晶	1.75	1.9	1.4	4.24	
	47	J-8	層	磨石刃様	水晶	1.45	1.1	1.6	2.43	
	48	J-8	層	磨石刃様	水晶	1.8	1.9	0.9	3.24	
第 18 団	49	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.1	1.65	1.3	3.24	
	50	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	1.5	2	1.1	2.96	
	51	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.2	1.9	1.5	6.03	
	52	J-8	層	磨石刃様	黒曜石A	2.3	1.85	0.95	4.25	
	53	J-8	層	磨石刃	黒曜石A	1.1	0.6	0.25	0.11	
	54	J-8	層	研器	真岩	6.1	10.6	3.4	270	
第 19 団	55	K-9	層	磨石刃様	黒曜石A	2.55	1.65	1.6	8.4	
	56	K-9	層	磨石刃様	黒曜石A	2.6	2.3	1.4	7.43	
	57	J-9	層	磨石刃	黒曜石A	1.2	0.8	0.25	0.17	
	58	J-9	層	スクリーパー	黒曜石A	1.2	2.1	0.9	1.68	

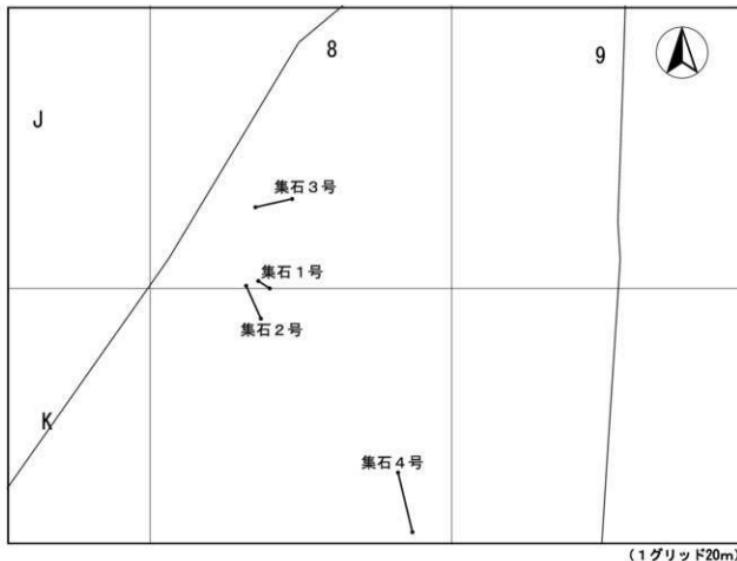
度のプランディングを施す。45は両側縁先端部に細かなプランディングを施したものである。46~52は細石刃核で、46~48は水晶製である。46は底面と裏面に自然面を残すもので、上部が側面から見るとV字状になる。47は平坦面を打面とし、正面の作業面と垂直になる。48は平坦面を打面とし後方に傾斜する。正面の作業面と、ほぼ平行する裏面を有する。49は薄手の剥片で打面が狭い。50は左側面と裏面に自然面を残すものである。51は右側面に細かな調整が観察できる。打面が狭く裏面上部を欠損する。52は上部から下部にかけて逆V字状を呈するもので、打面は薄く残っている。作業面は正面であるが、背面にも剥離が観察できる。53は黒曜石Aの細石刃である。両側縁に使用痕を観察できる。54は砾器である。自

然面を残す円礫を加工したもので、主に裏面より剥離を形成している。

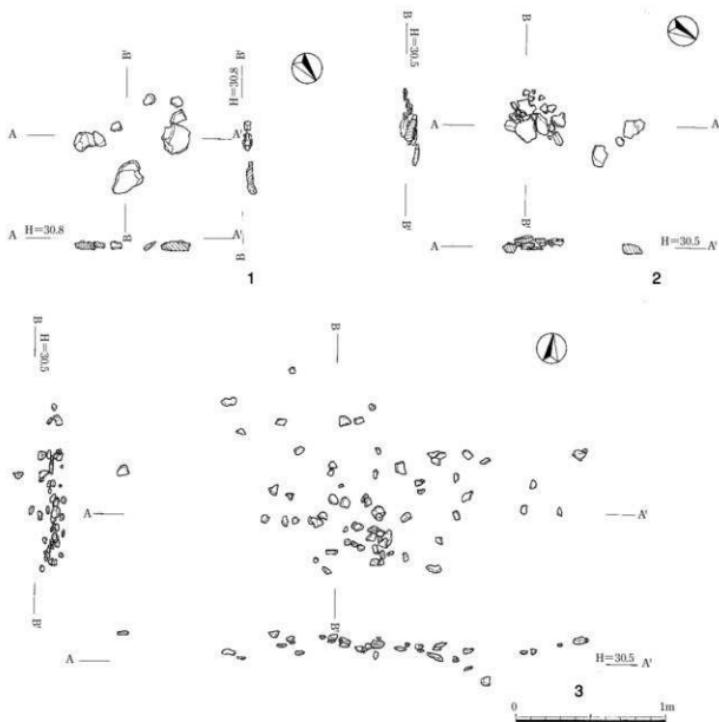
#### ブロック7（第19図55~58）

J—9、K—8~9区に北東から南西方向にわたる径約12m×7mに分布するブロックである。石材は黒曜石Aがほとんどである。

55~56は細石刃核である。55は底面、右側面に自然面を残すもので、打面は底部まで後方に傾斜する。作業面は平坦で、2cmほどの長さを有する。56は裏面から両側面にかけて自然面を残すもので、調整があまり見られない。57は細石刃である。やや幅広で、断面が台形状になる。58は黒曜石Aのスクレイバーである。三角錐状の形状を呈し、下面は平坦になる。正面下部に細かな剥離を観察できる。



第20図 縄文時代草創期遺構配置図



第21図 縄文時代草創期集石遺構 1

## 第5節 縄文時代の調査

### 1 縄文時代草創期の調査

草創期では、Ⅳ層より集石が4基検出された。礫数には差がある。

#### 集石1（第21図）

J-8区で検出した。礫数8、平均重量627.5gである。20cmの大好きな礫が使われている。礫数が少なく、まばらに散在する。

#### 集石2（第21図）

K-8区で検出した。礫数23、平均重量245.2gで

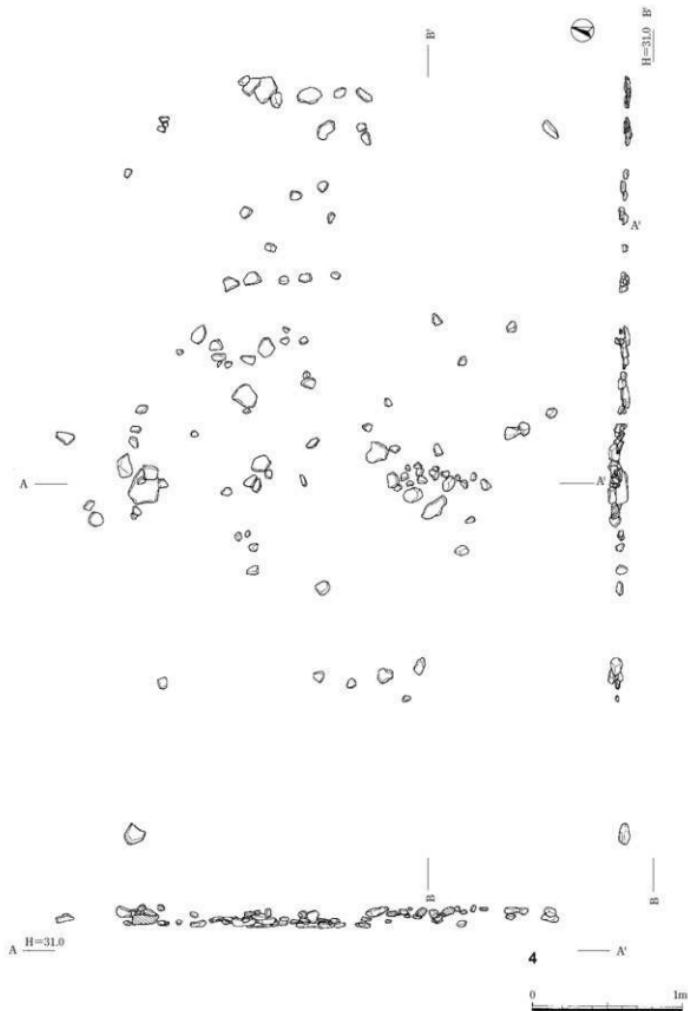
ある。南側に集中部分があり、20cm大の礫が重なり合っている。

#### 集石3（第21図）

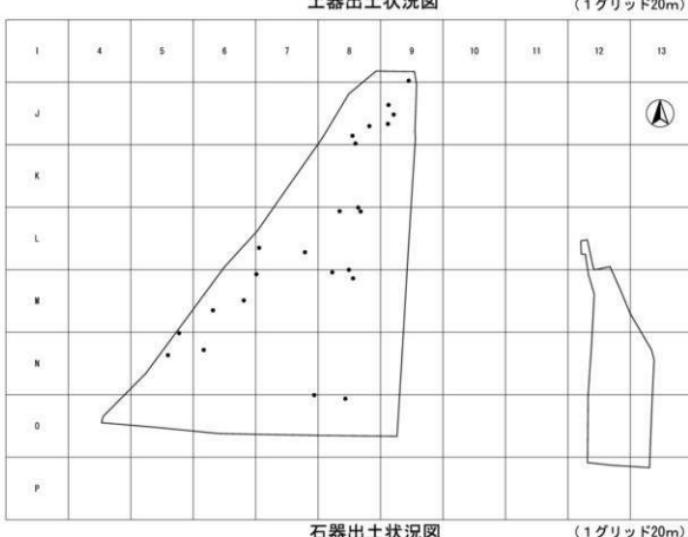
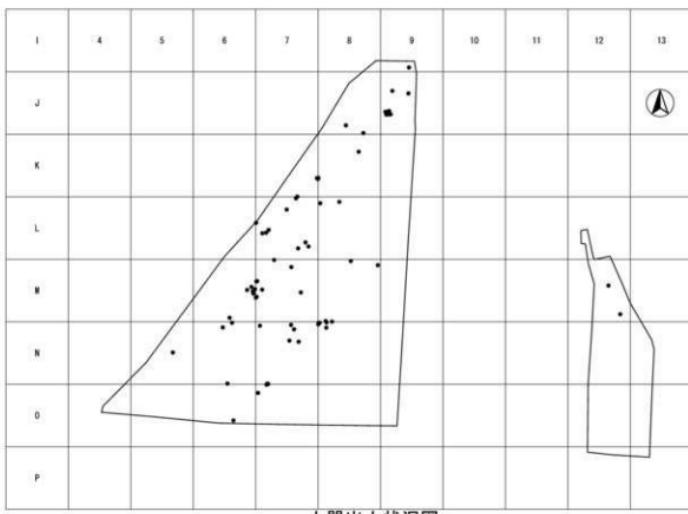
J-8区で検出した。礫数70、平均重量90.43gである。10cm大の大きな礫が全面に散在した状態である。集中区はあるが、数は少ない。

#### 集石4（第22図）

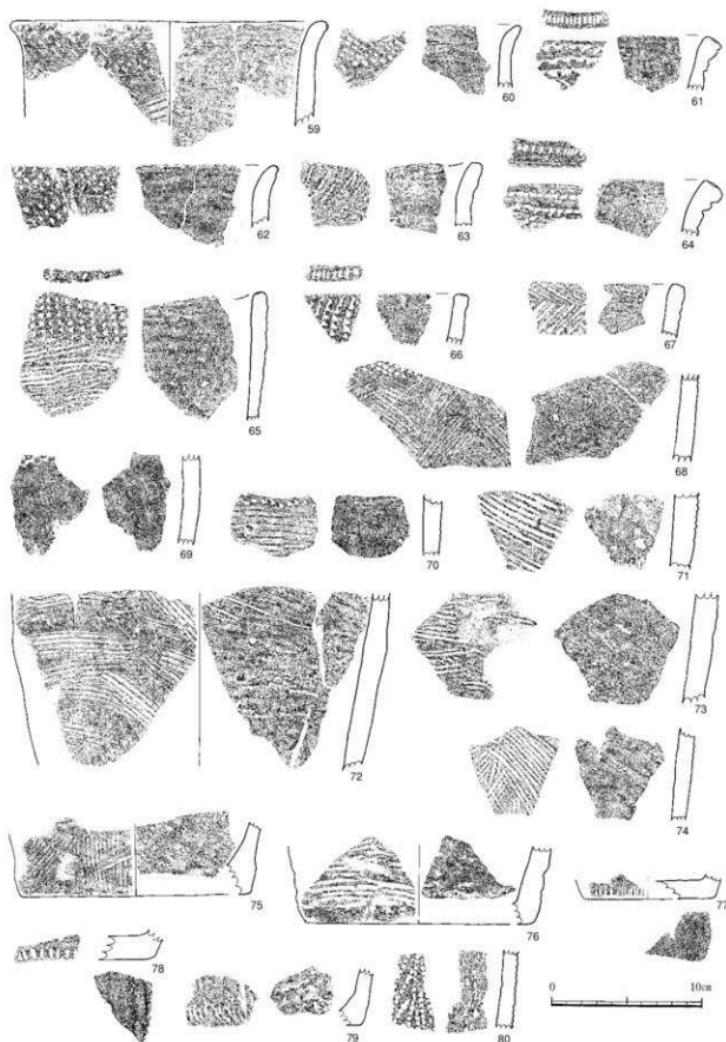
K-8区で検出した。礫数104、平均重量189.5gである。径約5m×3.5mと広範囲に礫が散在しており、明確な集中区は見られない。



第22図 縄文時代草創期集石遺構 2



第23図 繩文時代早期遺物出土状況図



第24図 1類・II類土器

## 2 繩文時代早期の調査

早期では造構がなく、土器と石器が層から検出された。土器は数が多く、早期中葉のものが主体で、I～IV類に分類した。石器も数は少なく、磨製石斧、礫器、磨石、敲石などが出土している。

### (1) 土器 (第24・25図)

#### I類土器 (第24図59～79)

I類土器は、口縁部に貝殻刺突文が廻り、胴部には貝殻条痕文が施されている円筒形の土器である。器壁は厚く、口縁部がやや肥厚するものが多い。

59～67は口縁部である。59～64は口縁部がゆるやかに外反し、65～67は口縁部が直行する。59は、口縁部に貝殻刺突文を羽状に施し、口唇部外側に刻みを施すものである。60は、斜位の刺突文が口縁部に施されている。61は、口縁部に横位の刺突文が3条廻る。64は、横位の刺突文と斜位の刺突文の組み合わせである。口唇部に刻み目がある。65は、口唇部が波状になるものである。67は、口縁部の刺突文が羽状に施され、口唇部は平坦である。68～74は胴部である。胴部には貝殻条痕文が横位や斜位に施されている。68は、条痕文が繊維状に施されている。69は、口縁部の刺突文は確認できるが、胴部の施文は風化により確認できない。72は、外面の条痕文がまばらに施されている。内面は、ヘラケズリで横方向に調整されており、木目が確認できる。75～79は、底部である。残存部が少なく、胴部の文様が判別しにくいため、一括してI類土器の底部で扱うこととした。75は縦位に、76は横位に貝殻条痕文が外面に施されている。77～79は、外面下部に刻み目が施されている。

#### II類土器 (第24図80)

II類土器は、80のみである。円筒の胴部で、外面上は貝殻刺突文を縦位と斜位に施すものである。内面は縦方向にヘラケズリが施されている。

#### III類土器 (第25図81～83)

III類土器は、器形は円筒で、口縁は直行する。口縁部から貝殻条痕文が横位に施されている。81は、口縁部である。横位の条痕文が約1.5mm間隔で施されている。82・83は、胴部である。横位の条痕文が廻らされているが、83は、間隔が空く。

#### IV類土器 (84・85)

IV類土器は2点である。円筒形で、浅い条痕文が施されている。84・85ともに口縁部で、外面に条痕文が斜位に施される。85は、口唇部がやや肥厚する。

### (2) 石器 (第26～30図)

#### 石鏃 (86～88)

86は、両面から細かな剥離が施されて、先端が鋭く伸びている。87は、先端部分が欠損している。88は、小型で抉りが施されていない。

#### 石斧 (89)

89は、磨製の石斧である。表面を縦方向に磨いている。刃部・裏面が欠損・剥落している。

#### 礫器 (90)

90は、頁岩製の礫器である。拳大の礫の下部に剥離を形成している。また、上部の細かな剥離は、握りやすくするためのものだと思われる。

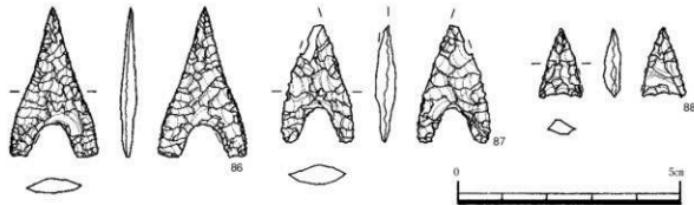
#### スクレイパー (91)

91は、頁岩製のスクレイパーである。自然面を残す横長剥片を加工している。

#### 磨石・敲石 (92～103)



第25図 III類・IV類土器



第26図 縄文時代早期石器 1

92~103は、磨石・敲打石である。93は全面に敲打痕が多数見られる。94は、上部のみ敲打痕がある。  
95~103は、ほぼ円形となるものである。

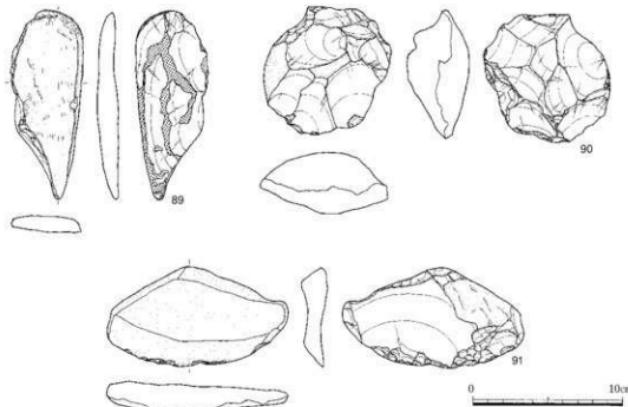
石皿 (104)  
104は、安山岩製の石皿。正面全体に使用痕が残る。裏面は大きな加工が見られず、不安定である。

縄文時代早期土器観察表

序号 番号	出土区 場所	層位	部位	色調		胎土 石英長石焼成温度	焼成	外 面	内 面	備 考
				内	外					
59	O-7	I'	口縁部	赤褐色	赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ミガキ	
60	N-6	I'	口縁部	にふい黄緑	淡黄	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
61	-	-	口縁部	橙	にふい橙	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
62	M-6	I'	口縁部	橙	明黄褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
63	J-9	I'	口縁部	橙	明赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
64	-	-	口縁部	明赤褐色	明赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
65	-	-	口縁部	にふい赤褐色	灰黄褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
66	M-12	II'	口縁部	橙	明赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
67	-	-	口縁部	橙	にふい黄緑	○ ○ ○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
68	-	-	胴部	橙	(スヌ付着)	○ ○ ○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ	
69	-	-	胴部	黄褐色	にふい赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
70	-	-	胴部	にふい赤褐色	にふい褐(スヌ付着)	○ ○ ○	良	条痕・刺突文	ナデ	
71	J-9	I'	胴部	黒	赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻刺突文	ナデ	
72	K-7	I'	胴部	黄灰	明黄褐色	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	条痕後ナデ	
73	N-7	I'	胴部	にふい黄緑	橙	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
74	-	-	胴部	橙	明黄褐色	○ ○ ○	良	縞状貝殻条痕文	ヘラケズリ後ナデ	
75	-	-	底部	橙	淡黄	○ ○ ○	良	貝殻条痕文		
76	J-9	I'	底部	暗灰	明赤褐色	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	ハケ目・ナデ	
77	-	-	底部	明赤褐色	橙	○ ○ ○	良	刻目		
78	-	-	底部	明赤褐色	橙	○ ○ ○	良	刻目		
79	-	-	底部	にふい橙	にふい黄緑	○ ○ ○	良	刻目	指圧痕	
80	M-12	II'	胴部	にふい黄緑	にふい黄緑	○ ○ ○	良	刺突文	ヘラケズリ後ナデ	
81	-	-	口縁部	にふい黄緑	オリーブ黒	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	ミガキ	
82	-	-	胴部	淡黄	淡黄	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	ミガキ	
83	L-8	I'	胴部	明赤褐色	褐	○ ○ ○	良	貝殻条痕文	ナデ	
84	K-7	I'	口縁部	明赤褐色	にふい黄緑	○ ○ ○	良	条痕文	ナデ	
85	M-12	I'	口縁部	灰黄褐色	にふい黄褐色	○ ○ ○	良	条痕文	ナデ	

第24回

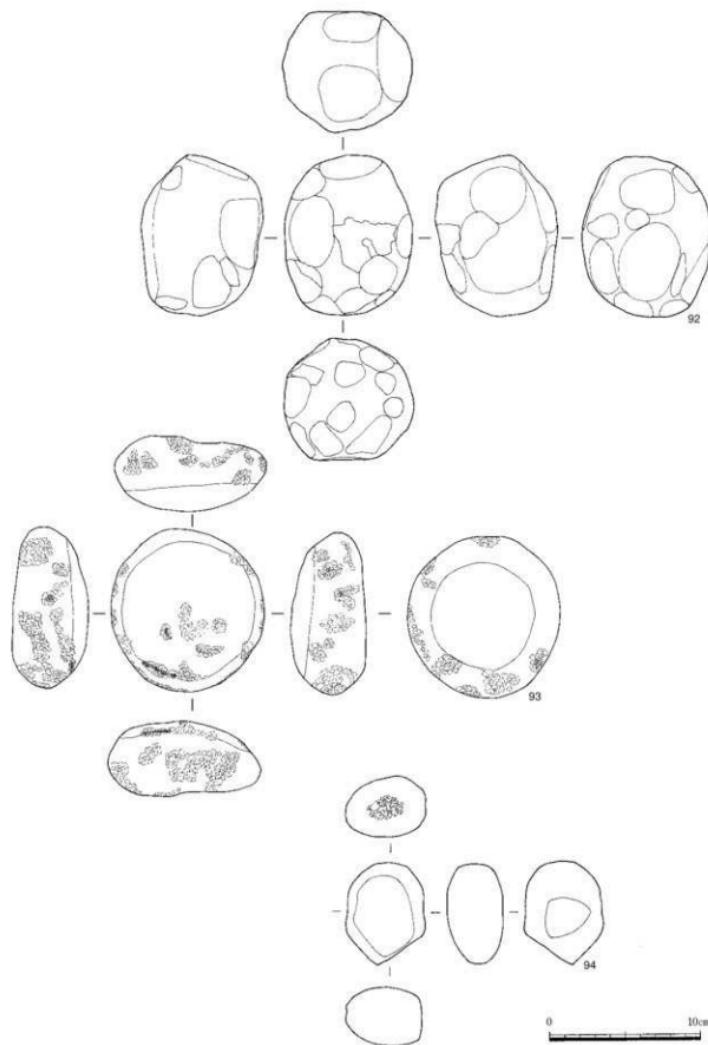
第25回



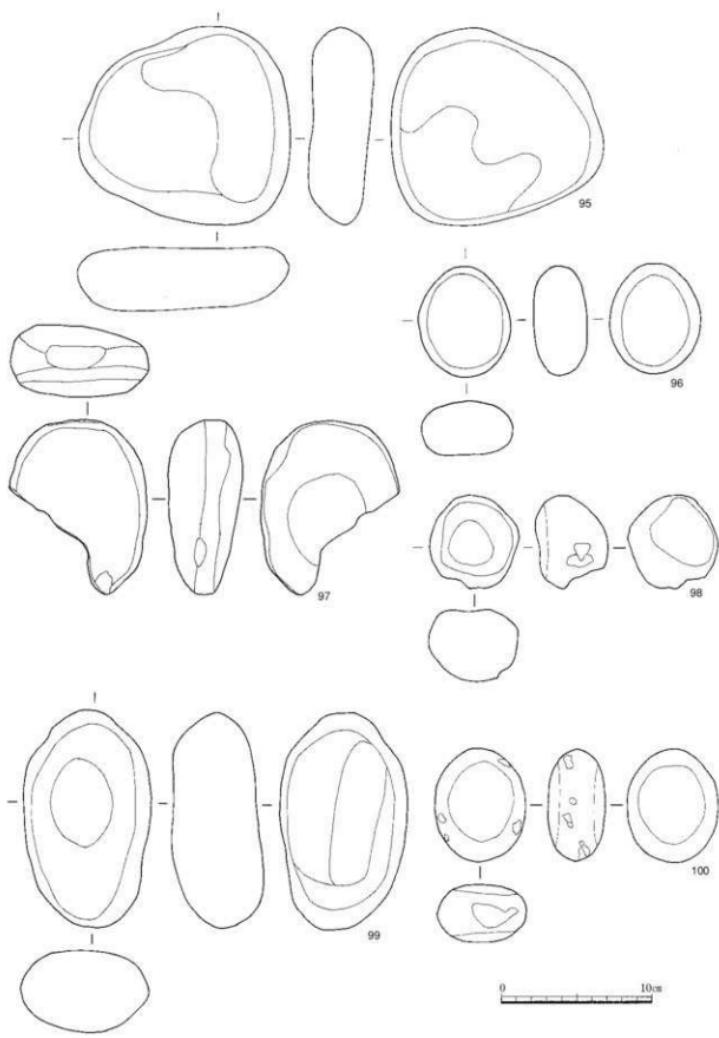
第27図 繩文時代早期石器 2

縩文時代早期石器観察表

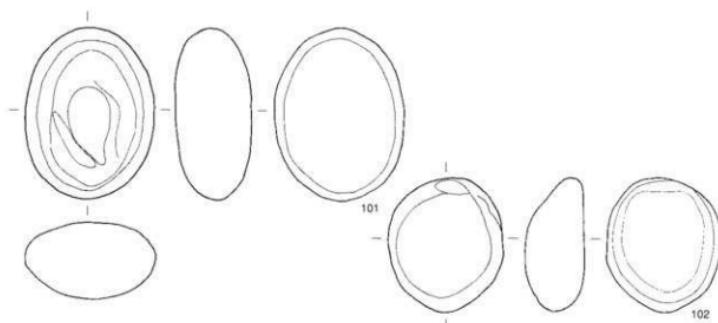
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考 (分類)
						cm	cm	cm	g	
第 26 図	86	N-5	IV	打製石鏃	チャート	3.4	2	0.4	1.4	A-c-c
	87	M-8	IV	打製石鏃	黒曜石A	2.7	1.7	0.5	1.3	A-c-c
第 27 図	88	K-9	VII	打製石鏃	黒色安山岩	1.6	1	0.4	0.4	A-b-b
	89	J-8	VII	石斧	頁岩	7.9	11	4.6	118	
第 28 図	90	O-8	IV	礫器	頁岩	8.55	8.5	4.1	260	
	91	O-7	IV	スクレイパー	頁岩	6.6	12.1	1.7	165	
第 29 図	92	J-8	VII	磨石	砂岩	10.7	8.6	8.1	1030	
	93	—	—	敲石	砂岩	10.8	10.2	5	730	
	94	J-9	VII	敲石	砂岩	6.7	5.3	3.8	200	
	95	M-7	VII	磨石	砂岩	13.1	14.1	4.3	1240	
	96	J-9	VII	磨石	砂岩	7.4	6.1	3.6	210	
	97	K-8	VII	磨石	砂岩	11.6	9.1	5	600	
	98	J-9	VII	磨石	砂岩	6.25	5.85	4.6	200	
	99	K-8	VII	磨石	砂岩	14.5	8.5	5.9	910	
	100	J-9	VII	磨石	砂岩	7.5	6	3.8	240	
第 30 図	101	M-8	IV	磨石	砂岩	11.4	8.7	5.1	720	
	102	M-6	IV	磨石	砂岩	8.9	7.6	4	360	
	103	M-6	IV	磨石	砂岩	8.8	8.2	5.3	520	
	104	J-9	IV	石皿	安山岩	25	22.8	4.5	2930	



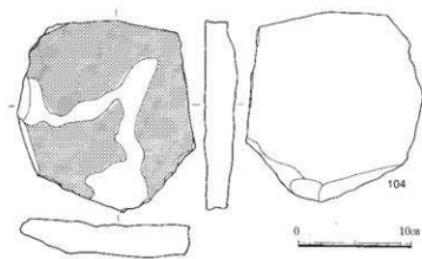
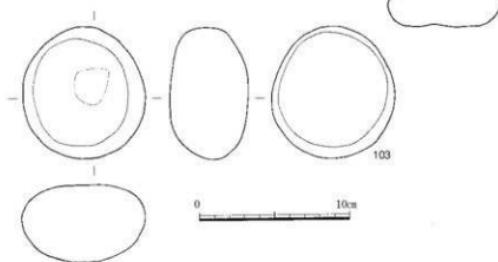
第28図 繩文時代早期石器 3



第29図 繩文時代早期石器 4



0 10cm



0 10cm

第30図 繩文時代早期石器 5

### 3 繩文時代中期・後期の調査

繩文時代中期・後期については、遺物の量が非常に少なく、遺構も検出されなかった。

#### 遺物（第31図）

##### V類土器

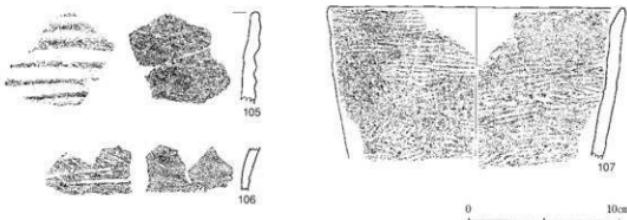
105の1点だけである。外面は約1cm幅の凹線文、内面はナデで器面調整が施されている。

##### VI類土器

106の1点だけである。外面は浅い条痕文、内面はナデで器面調整が施されている。

##### VII類土器

107の1点だけである。口縁径19.8cmを測る円筒形の土器である。外面は条痕文、内面は条痕文後ナデが施されている。口縁がやや開き、厚さが一定ではないため、指でおさえて形成したものと思われる。



第31図 V類・VI類・VII類土器

### 繩文時代中後期土器観察表

発見 番号	遺物	出土区	層位	部位	色調		胎土 石英 長石 角閃石 粘土	焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外					
第 105	O-6	I'	口縁部	黒	黒	○ ○ ○	良	凹線文	ナデ		
31 106	L-7	II	胴部	暗灰黄	黒褐	○ ○	良	条痕文	ナデ		
回 107	L-7	I'	口縁部	にかい褐	褐	○ ○	良	条痕文	条痕後ナデ	スス付着	

### 4 繩文時代晩期の調査

繩文時代晩期の調査では、土坑2基、掘立柱建物跡3棟、柱穴列2列が検出された。(第32図)

#### (1) 遺構

##### ①土坑（第33図）

土坑は2基検出された。形状はほぼ円形で、土坑内から遺物も出土している。いずれの土坑も用途等詳細については不明である。

##### 土坑1号

M-7区、III層上面で検出された。平面プランは不整形で、イモ穴により南西側が一部削平をうけていた。深さ約10cm。埋土は暗灰色土で、2mm大の炭化物が多く含まれていた。土坑内からは、土器108～110が出土している。

108は、円筒形土器の口縁部。外面はヘラケズリで調整されている。109は、精製の深鉢形土器の口縁部である。頭部からの立ち上がりが内湾気味に外反する。内外面ともに、ていねいなヘラケズリを施されている。110は、深鉢の胴部である。外面はヘラケズリによる器面調整を施す。内面は風化により剥落している。

##### 土坑2号

M-7区、III層上面で検出された。平面プランは梢円形で、長軸約90cm、短軸約82cm、深さ約20cm。埋土は暗茶褐色土で、炭化物がまばらに含まれていた。土坑内からは土器片が3点出土しているが、いずれも小片で掲載していない。

### ②掘立柱建物跡（第34図）

掘立柱建物跡と考えられる遺構が3棟検出された。いずれも1間×1間の建物で、農業開発総合センター遺跡群の各遺跡の晚期で多くみられる。柱穴等からの遺物は出土していない。

#### 掘立柱建物跡1号

K-7区で検出された。いずれの柱穴にも、Ⅱ層の土が入っていた。

#### 掘立柱建物跡2号

L-7区で検出した。P2・P3内は、明茶色のブロックを含む灰色の土が壁際で検出され、内側にⅡ層の土が入っていた。

#### 掘立柱建物跡3号

L-7区で検出した。P1内は明茶色土、P2・P4内からはⅡ層の土、P3内には黄橙色のパミスを含む灰色の土が入っていた。

### ③柱穴列

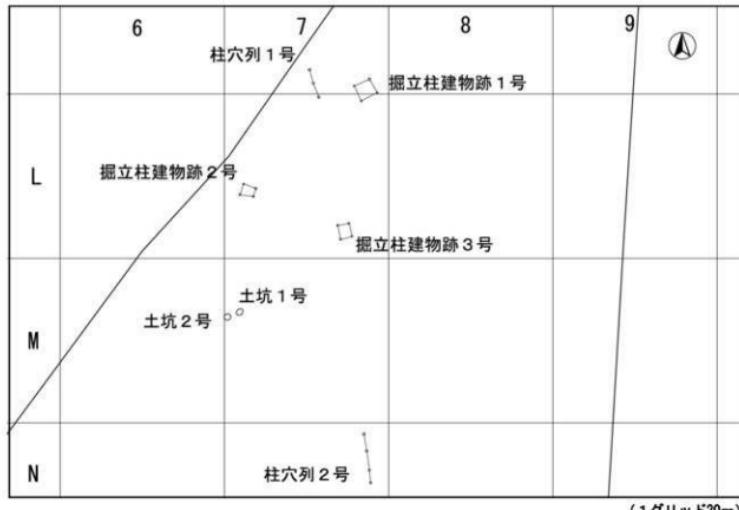
柱穴列は農業開発総合センター遺跡群においてよく見られる遺構である。調査区内で柱穴と思われるものが20近く検出したが、3個以上の柱穴が直線上に並んでいるものを人為的な遺構としてとらえた。

#### 柱穴列1号

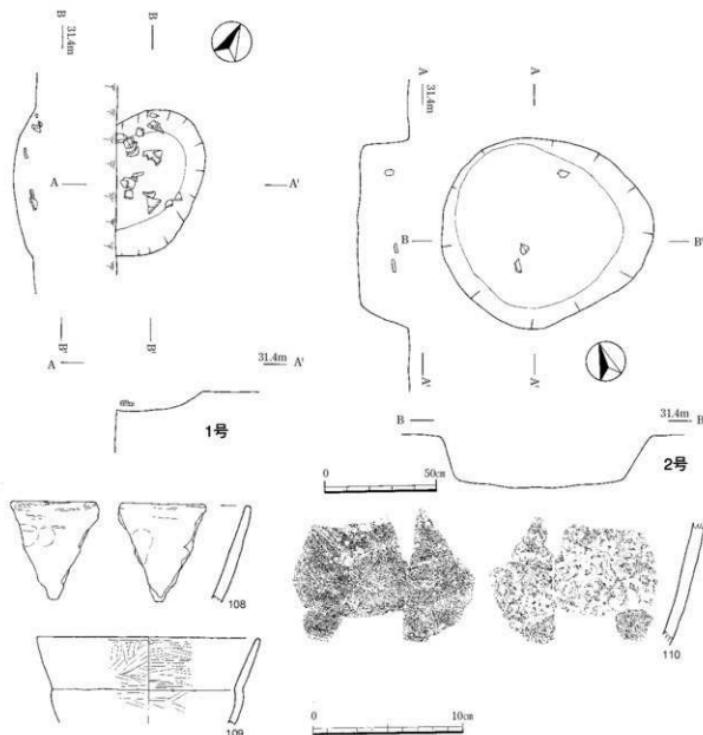
K-L-7区で検出した。ほぼ南北方向に並んでいる。P1内は、茶黄色のブロックが混入する灰色の土が入っていた。P2・P3は、同じく灰色の土の内側に、Ⅱ層の土が入っていた。

#### 柱穴列2号

N-7区で検出した。ほぼ南北方向に並ぶ。いずれの柱穴も、掘り込みが浅く、底部は断面で円形に近い。P1-P3内は、外側に明茶色の土が混入した黒色土、内側にⅡ層の土が入っていた。P4内は、明茶色のさらさらした土とⅡ層の土が入っていた。



第32図 繩文時代晚期遺構配図



第33図 縄文時代晩期土坑及び土坑内遺物

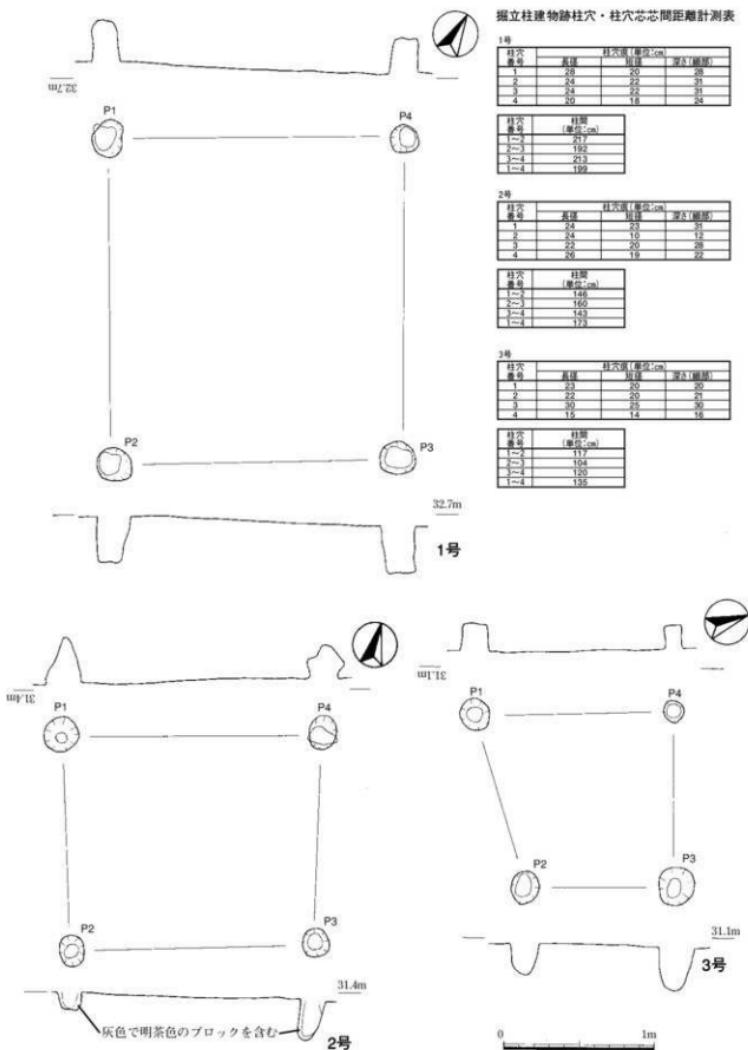
## (2) 遺物

### ①土器 (第36図111~120)

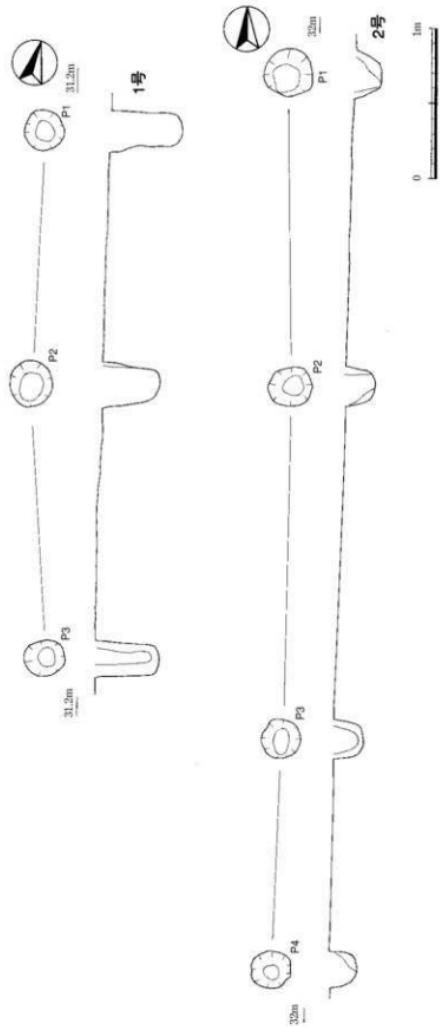
縄文時代晩期の土器は、深鉢形土器（111~116）と浅鉢形土器（117~120）に形態分類できる。概して深鉢形土器は粗製、浅鉢形土器は精製である。

111は、口縁部である。横位の沈線文を施す。上部の沈線は口縁に向かってあがっており、三叉文を形成している。112は、口唇部をへらで平坦に仕上

げている。114は深鉢の肩部である。下位がやや丸みを帯びながら窄まる形状である。器面調整はヘラケズリで、下位で風化によると思われる剥落が見られる。115・116は底部である。117は、口縁部が外反し、肩部が「く」の字に内側に屈曲する精製土器である。口縁径45cmを測り、ていねいなミガキで器面調整が施されている。口縁部に沈線を彫らす。118も同じく精製土器の口縁部である。口唇部が丸



第34図 縄文時代晩期掘立柱建物跡



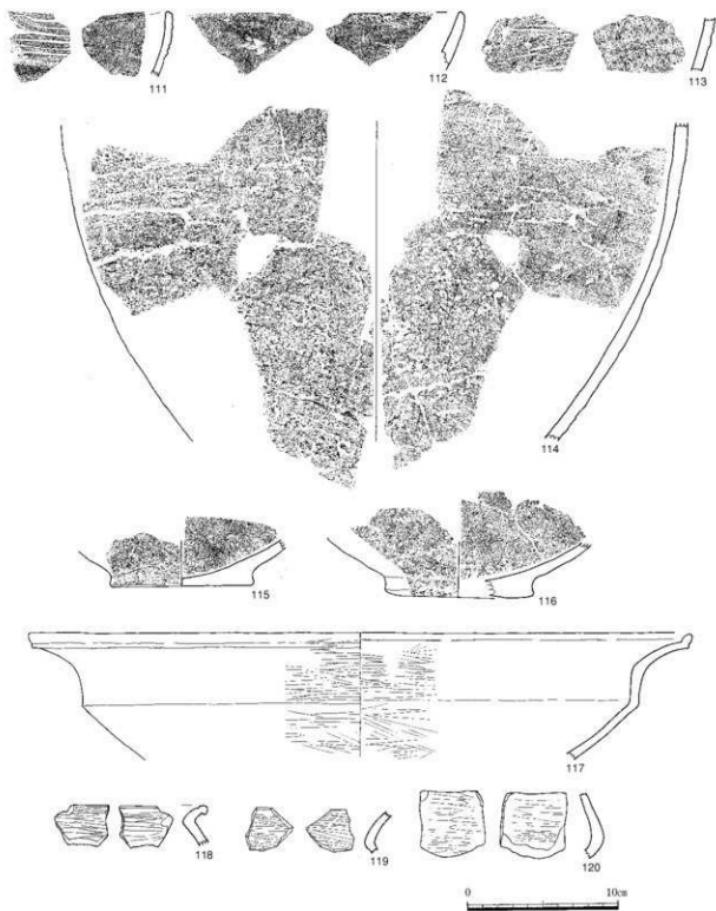
柱穴列柱穴計測・柱穴芯部間距離計測表

1号

2号

柱穴			柱穴底(単位:cm)			柱穴			柱穴底(単位:cm)		
番号	長径	短径	深さ(掘込)	番号	長径	短径	深さ(掘込)	番号	長径	短径	深さ(掘込)
1	28	25	49	1~2	175	32	27	18	1~2	205	
2	30	22	37	2~3	185	2	23	20	2~3	240	
3	30	25	41	1~3	360	3	26	25	3~4	155	
						4	27	25	1~4	600	

第35図 楹文時代晚期柱穴列

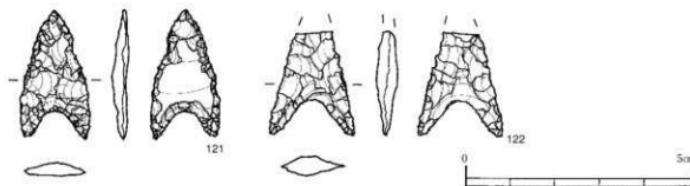


第36図 縄文時代晩期土器

く膨らむ。119は口縁部から内湾している頸部。120は、胴部。胴部中央で内側へ大きく屈曲した後、口縁部へと到るものである。

#### ②石器（第37図121・122）

121は、黒曜石製の石鎌。継長の剥片を加工しているが、裏面は一次剥離面をほぼ残し、側縁部のみ細かな剥離を施している。122は、チャート製の石鎌。先端部を欠損している。



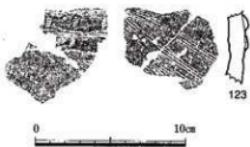
第37図 桦文時代晩期石器

縄文時代晩期土器観察表

地図 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土 石英	焼成 基石焼成度合	外 面	内 面	備 考
				内	外					
第 106 図	SK-1	—	口縁部	灰黄褐	黑褐	○	良	ヘラケズリ・指圧痕	ヘラケズリ・指圧痕	
33109 図	SK-1	—	口縁部	黑褐	青褐	○	良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	
110 図	SK-1	胴部	にふい黄褐	褐	○	良	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
111 図	N-12	Ⅲ	口縁部	暗灰黄	暗灰黄	○	良	三叉文	ナデ	
112 図	M-12	Ⅲ	口縁部	褐	灰黄褐	○ ○ ○	良	ナデ	ナデ	
113 図	N-12	Ⅲ	胴部	浅黄	にふい黄褐	○ ○ ○	良	ナデ	ナデ	
114 図	L-7	Ⅲ	胴部	にふい黄褐(スス付着)	褐(スス付着)	○ ○ ○	良	ナデ	ナデ	
36 図	116	—	底部	灰黄	にふい黄褐	○ ○ ○	良	ナデ	ナデ	
117 図	L-7	Ⅲ	口縁部	浅黄(灰オーリフ)	にふい黄	○ ○ ○	良	ミガキ	ミガキ	
118 図	—	口縁部	にふい黄褐	にふい黄褐	○ ○	良	ミガキ	ミガキ		
119 図	—	括	頸部	明黄褐	明黄褐	○ ○	良	ミガキ	ミガキ	
120 図	—	括	胴部	灰	灰	○	良	ミガキ	ミガキ	

縄文時代晩期石器観察表

地図 番号	遺物 番号	出土区	層位	器種	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	分類
第37図	121	N-13	Ⅲ	打製石鎌	黒曜石B	2.9	1.6	0.4	1.2	A-b-c
	122	N-13	Ⅲ	打製石鎌	チャート	2.3	1.9	0.5	1.5	A-b-c



第38図 古墳時代土器

#### 古墳時代土器観察表

埠固遺物 番号	出土区 番号	層位	部位	色調		始土 石英 長石 雲母 粘土 粉石	焼成 良 ○	外 面 良 刻目実等 ハケ目	内 面 ハケ目	備 考
				内	外					
123	-	-	胴部	灰黄褐	暗灰黄		○	良	刻目実等 ハケ目	

#### 第6節 古墳時代の調査

道構は発見されなかった。遺物は123の1点のみである。外面に刻み目実帶が廻る。内外面共にヘラケズリで器面調整が行なわれており、工具は4~5条の木目をもつものと思われる。

#### 第7節 古代・中世の調査

古代~中世の調査では、溝状道構、道路と思われる道構、少量の遺物を検出できた。

##### (1) 道構

###### ①溝状道構（第39~第43図）

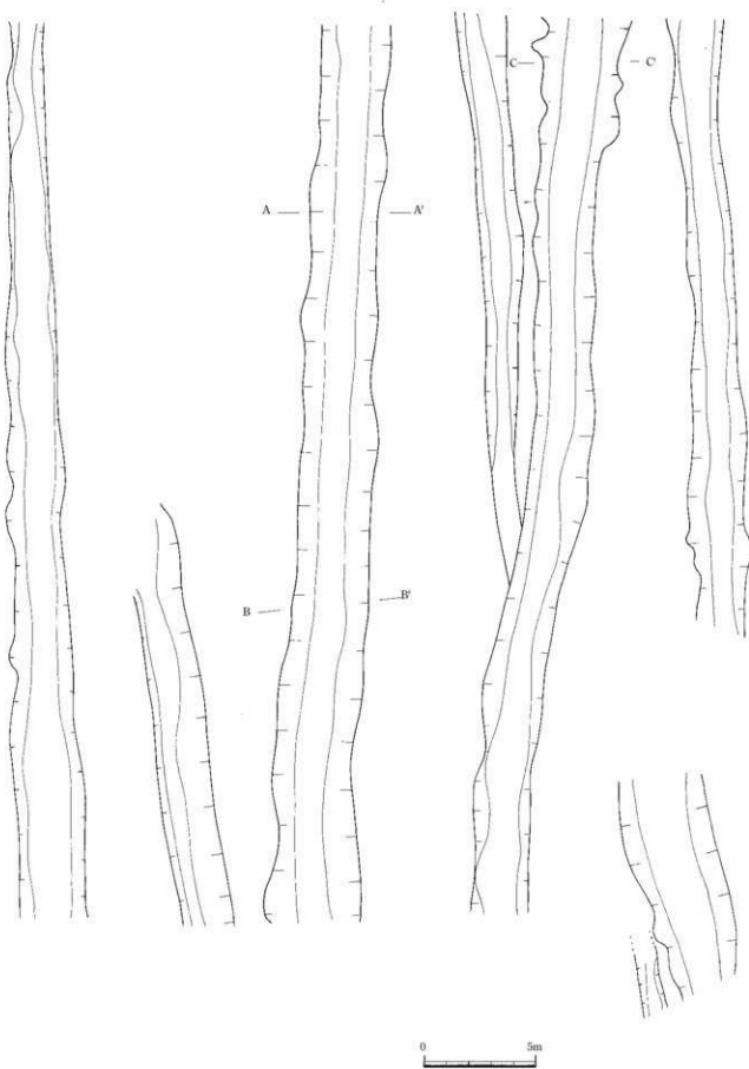
溝は、神原遺跡と頭無遺跡において検出されているが、両道跡は道路を隔てて北側に神原遺跡、南側に頭無遺跡が在り（第43図）、溝も連続しているものである。そのために、頭無遺跡で検出された溝も

神原遺跡の項で取り扱うこととした。

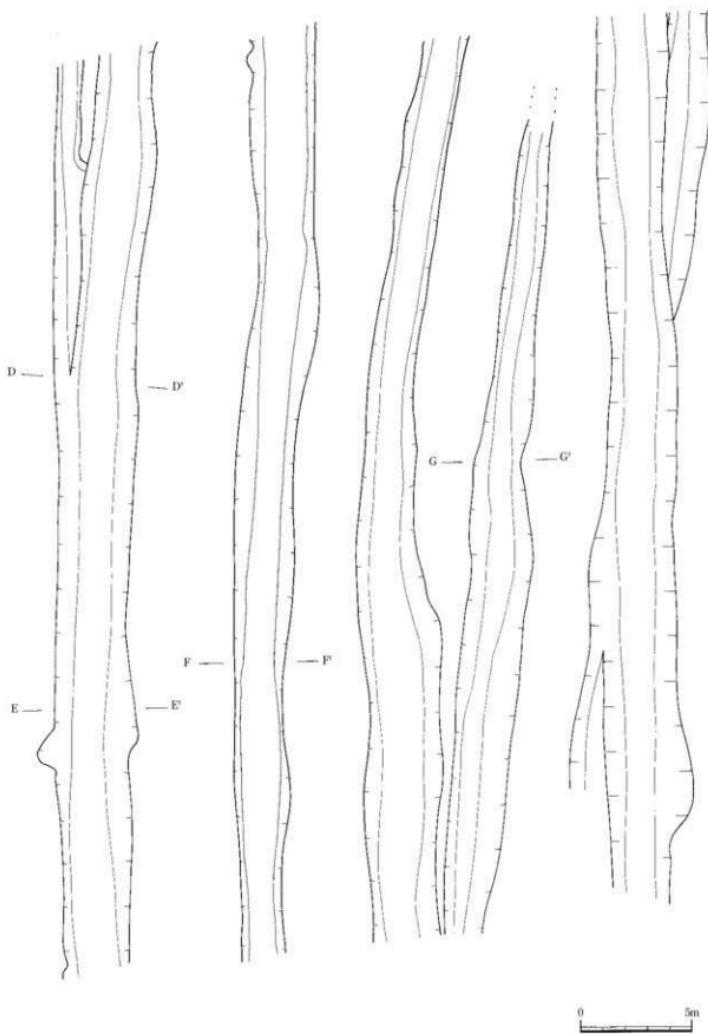
溝は、西の吹上砂丘側から延びてきている狹小な谷（水田）と、西北側にある桜谷遺跡と荒田遺跡の間を延びてきている狹小な谷により野首状になった一番幅の狭い部分に、両方の谷を繋ぐような状況で検出されている。全長は約160mで、最大幅は約3.6m、最小幅は約0.5mである。南側から北側にかけて傾斜している。

#### 古代~中世道構内遺物観察表

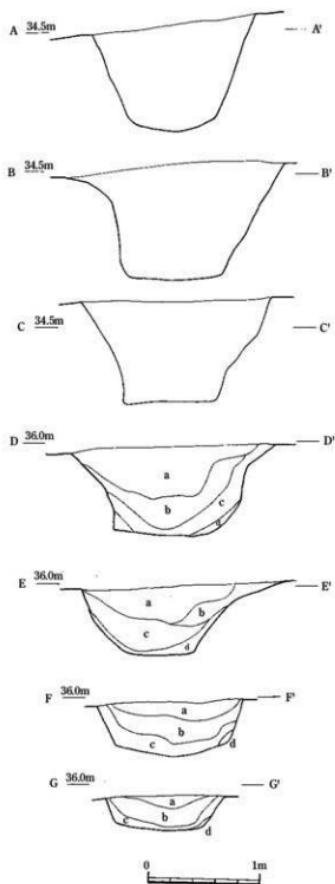
埠固 番号	遺物 番号	出土区 番号	層位	部位	色調		始土 石英 長石 雲母 粘土 粉石	焼成 良 ○	外 面 良 ヘラケズリ	内 面 良 ヘラケズリ	備 考
					内	外					
第 44 回	124	溝状道構	-	宍形	灰白	灰白	良 ○	ナデ・ヘラ切り	ミガキ	底部(ヘラ切り)	
	125	溝状道構	-	口縁部	明褐	明赤褐					
	126	溝状道構	-	宍形	反褐	明赤褐					
	127	溝状道構	-	口縁部	灰褐	明赤褐					
第 45 回	128	溝状道構	-	胴部	黄褐	黄褐	良 格子目タキ	平行タキ	平行タキ	平行タキ 同心円タキ	
	129	溝状道構	-	胴部	黄褐	黄褐					
	130	溝状道構	-	口縁部	灰	にふい褐					
	131	溝状道構	-	胴部	灰	にふい褐					
第 46 回	132	溝状道構	-	宍形	にふい黄褐	にふい黄褐	良 長格子目タキ後ナデ	横ナデ	横ナデ ヘラ記号	横ナデ ヘラ記号	
	133	溝状道構	-	口縁部	灰白	灰白					
	134	古道	-	口縁部	明緑灰	明緑灰					



第39図 古代溝状遺構 1



第40図 古代溝状遺構 2



a	黒色土。きめ細かく、混ざりがほとんどない。
b	黒灰色土。しまりがある。
c	黒褐色土。黒褐色にV層の土が混ざる。
d	V層の土。

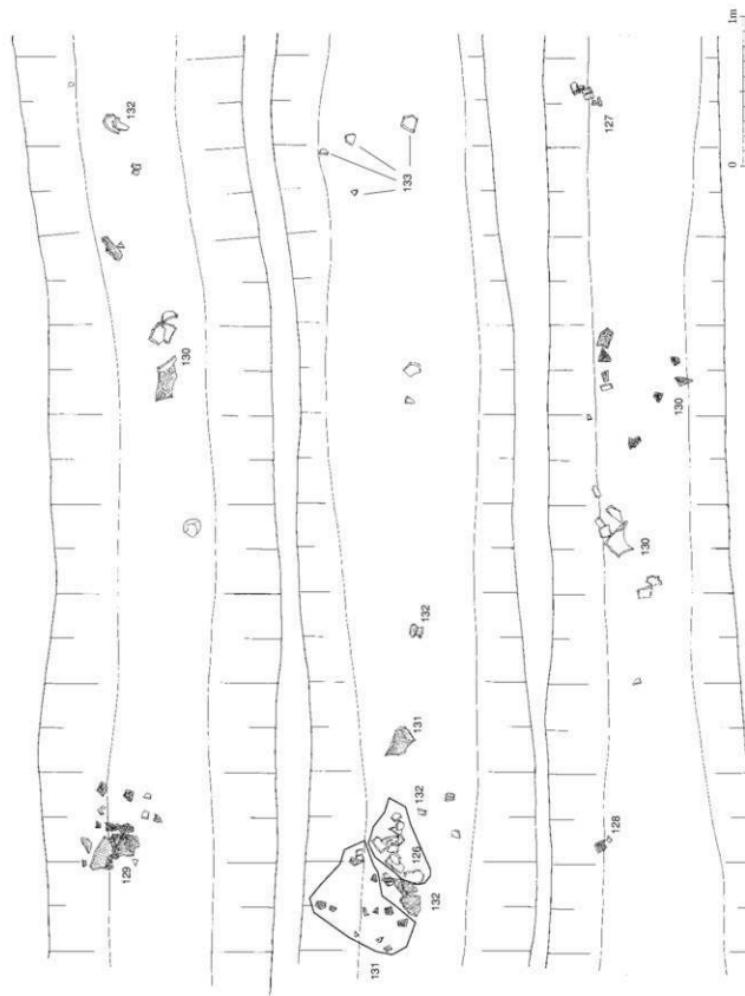
第41図 古代溝状遺構3(断面図)

#### 遺物 (第44・45図124~133)

溝内からは、土師器と須恵器が出土しているが、神原遺跡の北側を中心に集中して出土しており、頭無遺跡ではほとんど出土していない。また、溝の底面及び底面に近い深さで出土している。

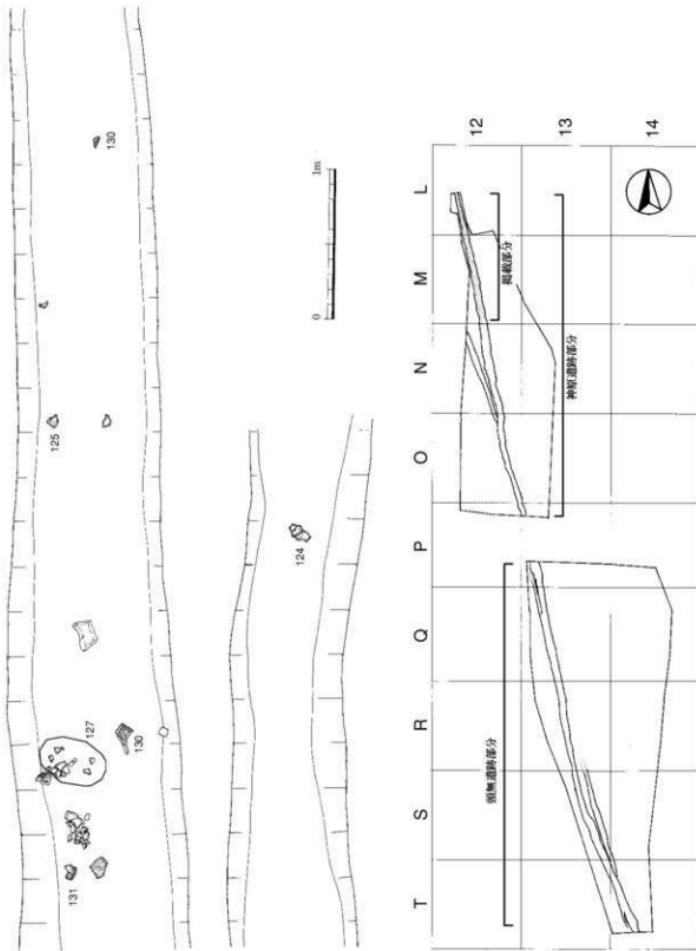
124~127は土師器。124は杯で、口縁部径12cm、器高4.2cmを測る。平底の底部から外方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。125~127は、變形土器。いずれも胴部はあまり膨らまず、口縁部は「く」の字状に外反する。底部は欠損しているが、丸底と思われる。器面調整はヘラケズリが見られる。124は口縁部径16cmを測る小型のものである。128~133は須恵器。128~131は甕。132・133は壺である。128・129は外面が格子目タタキで、内面は、下部は平行タタキ、肩部は同心円タタキである。130・131は同一個体と思われるもので、口縁部径22cmを測る。くびれた頸部から口縁部は外反し、胴部は膨らむものである。外面は平行タタキ、内面は下部は平行タタキ、胴部最大径の部分から肩部へかけては同心円タタキである。132・133は肩部が張り、最大径が肩部にある特徴をもつものである。132は口縁部を欠損するが、ほぼ完形に復元できたものである。底部は径12cmの安定した平底であるが、わずかに上げ底になる。胴部はほぼ直線的に肩部へ到る。肩部はあまり丸みを帯びずに張っている。頸部は径4.5cmと細くしまり、口縁部は外反する。器面調整は、外面は長格子目タタキの跡でナデが施され、底部付近ではタタキの痕跡も残っていない。内面は横ナデである。また、輪積みの痕跡も明瞭に認められる。133は132とほぼ同様の形状である。焼が甘いためか白っぽく仕上がっている。外面は長格子目タタキの後でナデが施されている。肩部に「×」のヘラ記号が認められる。内面は横ナデで、輪積みの痕跡が明瞭である。また、132・133共に内面の肩部付近に小石を布で包んだと思われる當て具の痕跡が認められる。

第42图 古代椭状漆桶内遗物出土状况图1



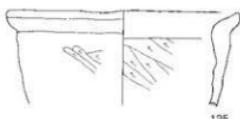
溝状遺構全体図（1グリッド20m）

第43図 古代溝状遺構内出土状況図2

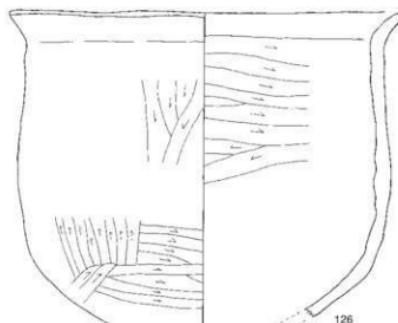




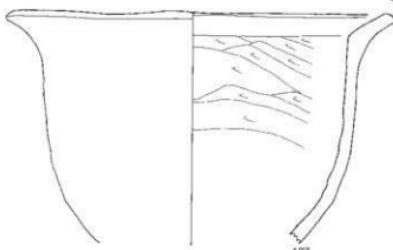
124



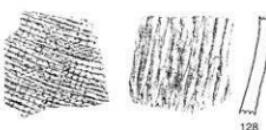
125



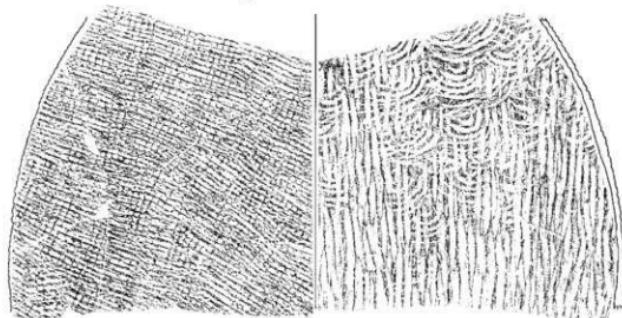
126



127



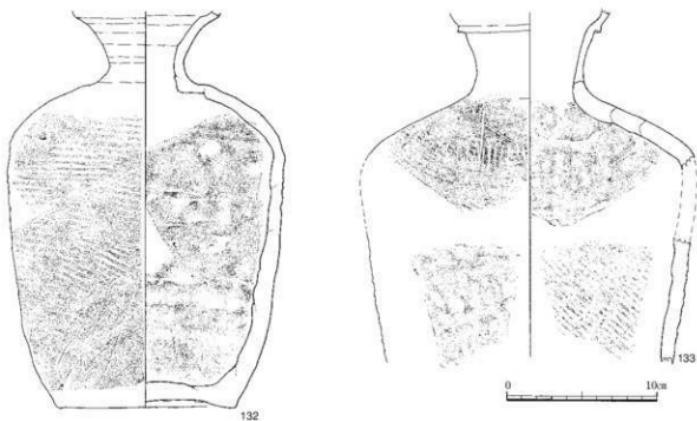
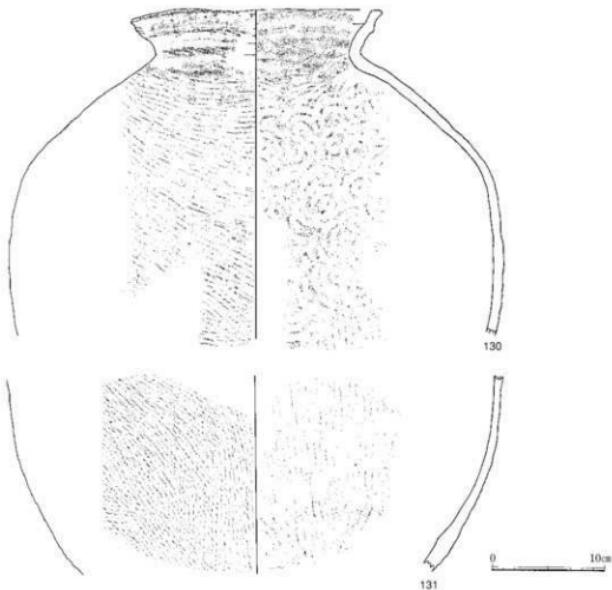
128



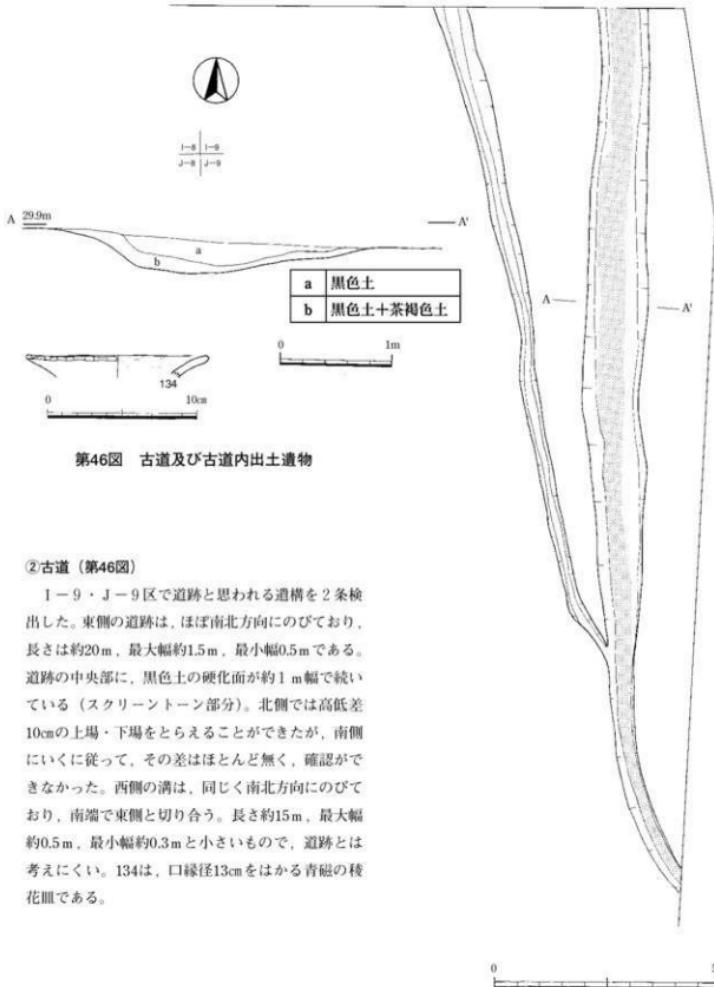
129

0 10cm

第44図 古代溝状遺構内出土遺物 1



第45図 古代溝状遺構内出土遺物 2



第46図 古道及び古道内出土遺物

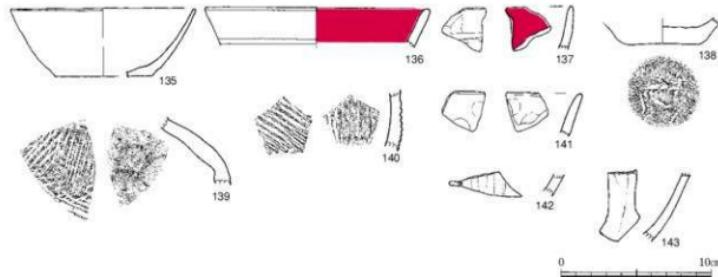
## ②古道（第46図）

I-9・J-9区で道路と思われる遺構を2条検出した。東側の道路は、ほぼ南北方向にのびており、長さは約20m、最大幅約1.5m、最小幅0.5mである。道路の中央部に、黒色土の硬化面が約1m幅で続いている（スクリーントーン部分）。北側では高低差10cmの上場・下場をとらえることができたが、南側にいくに従って、その差はほとんど無く、確認ができなかった。西側の溝は、同じく南北方向にのびており、南端で東側と切り合う。長さ約15m、最大幅約0.5m、最小幅約0.3mと小さいもので、道路とは考えにくい。134は、口縁径13cmをはかる青磁の棲花皿である。

(2) 遺物 (第47図135~143)

135は、口縁径12cmの土師器の椀である。136・137も土師器の口縁部で、内外面ともにヘラケズリで調整され、内面は朱が塗られている。138は、土師器の底部である。底部は糸切りである。139は、須恵器の壺の肩部である。外面調整は格子目タタキ、

内面は小石を布で包んだと思われる當て具の痕跡が認められる。140は、須恵器の甕の肩部で、内外面共に平行タタキで器面調整がなされている。141~143は青磁である。141は口縁部で、灰色味がかかる。142・143は胴部で、連弁文が観察できる。



第47図 古代・中世遺物

古代～中世出土遺物

擇図 番号	遺物 番号	出土区	層位	部位	色調		胎土 石英長石矽長石石粉	焼成	外 面	内 面	備 考
					内	外					
第 47 図	135	一括	一	完形	淡黄	淡黄	○	良	ナデ	ナデ	
	136	一括	一	口縁部	にいし褐色	淡黄		良	ミガキ	ミガキ	内赤
	137	一括	一	口縁部	にいし褐色	淡黄		良	ミガキ	ミガキ	内赤
	138	一括	一	底部	淡黄	淡黄	○	良	糸切り	ミガキ	
	139	一括	一	胴部	暗灰黄	黄褐	○	良	格子目タタキ	指圧痕(布)	
	140	一括	一	胴部	灰黄	暗灰黄		良	平行タタキ	平行タタキ	
	141	一括	一	口縁部	灰オリーブ	灰オリーブ		良	連弁文	連弁文	
	142	一括	一	胴部	緑灰	緑灰		良	連弁文	連弁文	
	143	一括	一	胴部	緑灰	緑灰		良	連弁文	連弁文	

## 第8節 小結

神原遺跡では、旧石器時代から古代・中世までの調査成果を挙げることができた。

なお、平成14年度の調査部分において、大雨のために出土地点が不明になった遺物があり、詳しい出土区・層位を掲載できないものがある。それらについては、土器形式などから時代を設定した。

### 1 旧石器時代（遺構・遺物）

14年度の調査範囲から、9基の窪群と1600近くの遺物を検出した。

窪群の範囲・確数は様々で、共通性はあまり見られない。また、1・2・3号、5・6号は近接しているが、それ以外は距離が離れている。

遺物については、出土遺物を石材ごとに分類を行なったところ、集中区が確認できたので、7つのブロックが存在すると判断した。また、ブロックごとに主として出土する遺物が異なるのが大きな特徴といえる。ブロック6は中・大型のナイフ形石器が、それ以外は細石刃核が出土しているため、6とそれ以外のブロックは、形成時期に差があるものと考えられる。また、ブロック3においては、黒曜石Aが全面にわたって出土しており、広範囲にわたる石器製作所だった可能性もある。さらにブロック5では、水晶を素材とする石器・チップが出土しているのが特徴的である。

（石材別出土割合）

石材	割合(%)	石	材	割合(%)
黒曜石A	63.94	シルト質頁岩	3.41	
黒曜石B	1.87	水晶	3.28	
黒曜石C	0.39	玉髓	0.97	
頁岩	9.34	チャート	0.13	
黒色安山岩	5.02	その他	11.65	

### 2 繩文時代

繩文時代では、出土量は全体的に少なめであるが、草創期から晩期にわたって、遺構や遺物が出土して

いる。

#### （1）草創期（遺構）

集石遺構+基をJ・K-8区で検出した。明確な集中区を持つものはほとんどない。また、屢数にも差があり、それぞれの関連性については不明である。

#### （2）早期（遺物）

縄文時代早期では、他時代と比較して、土器・石器が出土している。土器はI類からIV類にまで分類でき、I類土器がそのほとんどを占める。I類土器は、口縁部が肥厚しやや外反する円筒形の土器で、口縁部に貝殻刺突文、胴部に綾状条痕文を施すものである。石板式に比定されるものである。II類は1点のみの出土であるが、胴部に刺突文のみ施していることから、下剥型式土器に類するものであると考えられる。III類は条痕が横位に施される円筒形の土器で、中原式土器に比定されるものである。IV類土器は円筒形条痕文土器である。石器は、磨石・敲石を中心に出土している。

#### （3）中後期土器（遺物）

中後期では、土器3点が出土しているが、形式の特定が難しい。

#### （4）晩期（遺構・遺物）

晩期では、土坑2基・掘立柱建物跡3棟・柱穴列2基を検出した。土坑1号と2号は近接しているが、出土遺物が少なく、共通点もないことから、関連性は薄いと考えられる。掘立柱建物跡は、3棟検出された。いずれも1間×1間の建物で、農業センター遺跡群ではよく見られるが、大きさ・方向・柱間形状等に統一性は見られない。柱穴列は2列とも北北西-南東に並ぶが、穴数が違うことや検出地点が離れていることから関係性はないものと思われる。

遺物は土器・石器が出土している。111は三叉文土器であるが、同形式は1点のみの出土で、他遺物との関連性が確認できなかった。その他の土器については、残存部の形状から入佐式土器に比定されるものである。

### 3 古墳時代（遺物）

123の1点のみである。層位等不明であるが、刻目突帯を貼り付けていることから、古墳時代の遺物

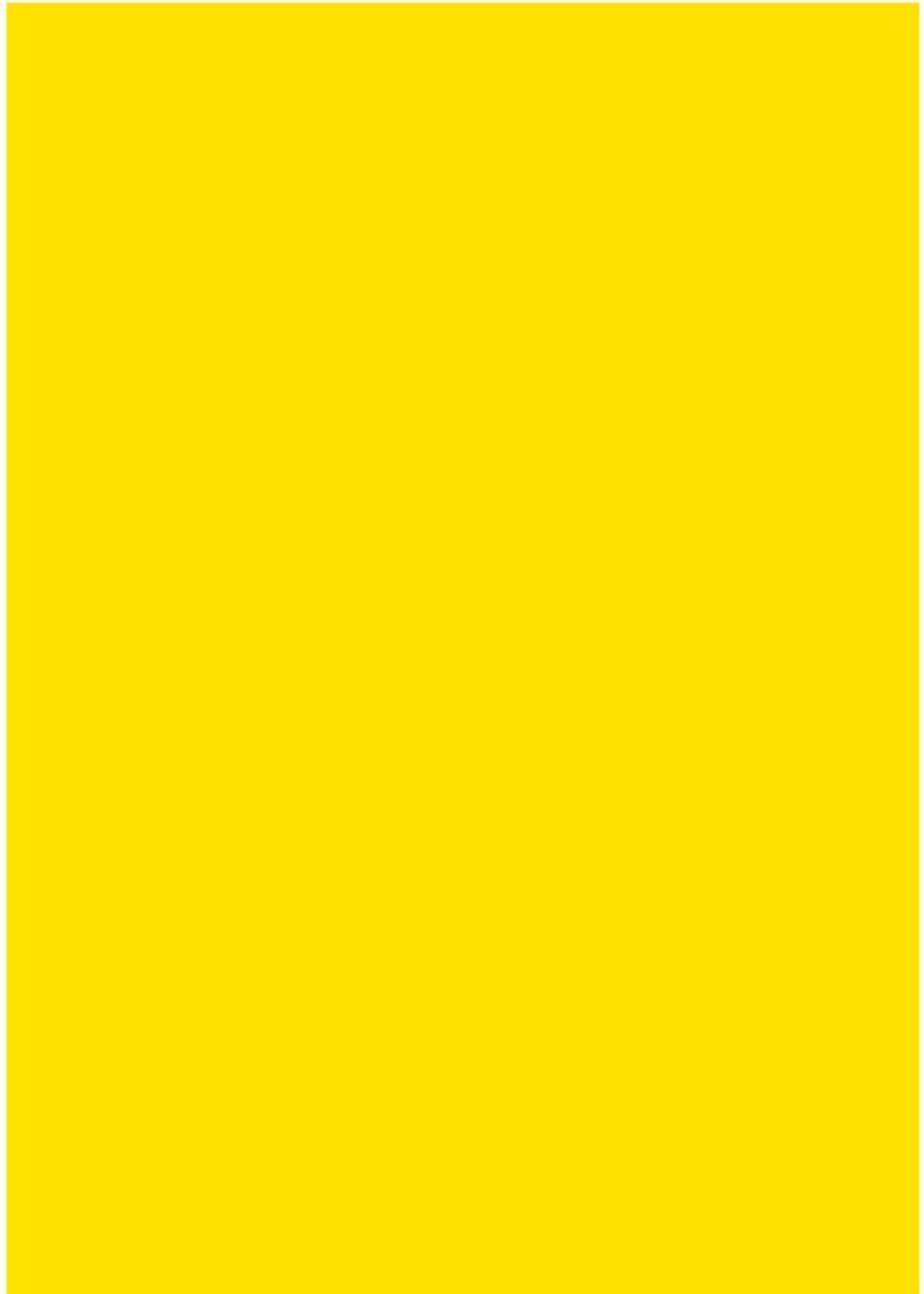
であると判断した。

#### 4 古代～中世（遺構・遺物）

古代の遺構として溝を検出した。溝は神原遺跡及び頭無遺跡で検出されており、間の道路を隔てて連続しているものである（第43図参照）。溝の底部は、南南東の頭無遺跡から北北西の神原遺跡に向けて下っており、遺物が神原遺跡の溝の最深部（北北西側）でのみ出土していることも、この傾きが関係しているのではないかと思われる。遺物は土師器・須恵器が完形に近い形で出土している。須恵器は器高が60cm以上になる大型のものもある。

また、14年度の調査で、中央部分に硬化面がある道跡と思われる遺構も検出し、遺構内から15世紀代と思われる青磁の稜花皿が出土している。

頭 無 遺 跡



## 第VII章 頭無遺跡の発掘調査成果

### 第1節 調査の経過

頭無遺跡は、平成15年度に本調査を実施した。本調査は研究畑、研究付帯施設（土肥）、付帯共同用施設予定地の削平部分1～4地点を対象とした。

#### 平成15年度日誌抄

7月14日（月）～7月18日（金）

調査開始。1地点・2地点・3地点表土剥ぎ、Ⅲ層・Ⅳ層掘り下げ。トレンチ設定及び掘り下げ。グリッド杭打ち。

7月22日（火）～7月24日（木）

Ⅲ層掘り下げ。トレンチ設定、掘り下げ。縄文早期集石写真撮影。

8月4日（月）～8月7日（木）

溝状遺構写真撮影、掘り下げ、遺物取り上げ。Ⅳ層掘り下げ。

8月11日（月）～8月12日（火）

台風後保全。安全点検。Ⅳ層掘り下げ。縄文早期遺物取り上げ。ブレハブ移転準備。

8月18日（月）～8月20日（水）

ブレハブ移設。Ⅳ層掘り下げ完了。溝状遺構掘り下

げ完了。遺物取り上げ。

10月15日（水）～10月17日（金）

溝状遺構埋土断面分層、写真撮影、実測。

10月21日（火）～10月23日（木）

溝状遺構完掘。溝および周辺の精査。

11月4日（火）～11月7日（金）

清掃。空中写真撮影。

11月18日（火）～11月20日（木）

4地点精査。Ⅲ層掘り下げ。縄文早期集石検出、写真撮影。鹿児島大学本田道輝助教授に縄文時代の遺物指導を受ける。

12月1日（月）～12月5日（金）

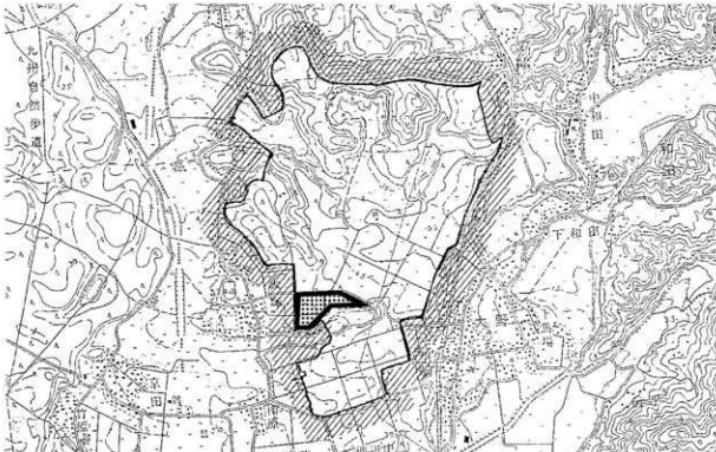
Ⅲ層Ⅳ層掘り下げ。Ⅲ層遺物取り上げ。地形図（20cmコンタ）作成。Ⅳ層遺物取り上げ。ビット実測、写真撮影。

12月8日（月）～12月12日（金）

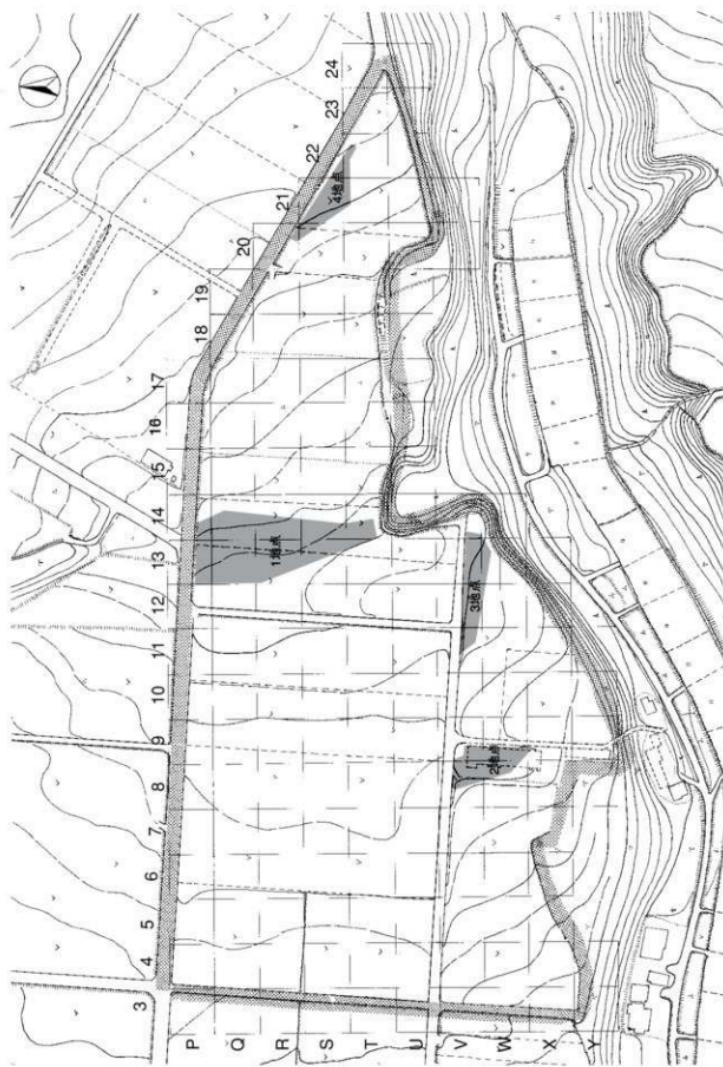
Ⅳ層掘り下げ終了。集石検出、写真撮影。3地点トレンチ設定、掘り下げ。土層断面図実測、写真撮影。

12月15日（月）～12月16日（火）

3地点トレンチ土層断面写真撮影、実測。4地点集石検出、写真撮影。遺物取り上げ。引き渡し。

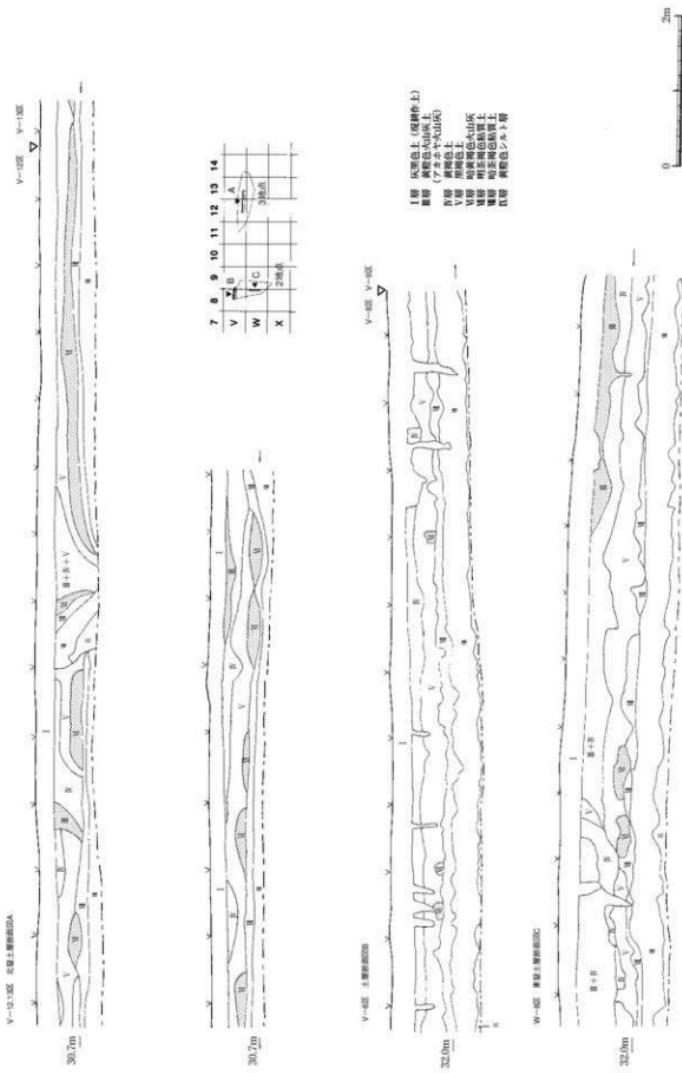


第1図 頭無遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 地形図及びグリッド配置図

第3図 土層断面



## 第2節 遺跡の層序（第3図）

頭無遺跡における層序は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同様である。調査を実施した範囲の標高を見ると東側が41m、西側が31mと東側から西側へ傾斜している地形である。大半が削平されておりⅡ層は見られず、地点によってはⅢ・Ⅳ層も削平されている。

## 第3節 発掘調査の方法及び概要

頭無遺跡は、農業開発総合センター内の調整池と迫田の北側にある台地に立地し、北側は神原遺跡と宗円掘遺跡に隣接している。

発掘調査は国土座標に合わせた20m×20mの調査範囲（グリッド）を設定して実施し、遺跡内の北側からA・B・C…、西側から1・2・3…とした。調査面積は3,190m<sup>2</sup>である。調査方法は表土を重機で掘り下げ、その後人力での掘削を行った。削平部分は4地点である。

1 地点で表土剥ぎを行ったところ一部分はV層が露出し、畑地利用で激しく削平を受けていた。精査したところ、表土直下で、平成13年度に神原遺跡の調査で確認されていた古代の溝状遺構の延長部分を検出した。その後、下層確認トレンチを設定し、IV層上面までの掘り下げを行った。

2・3地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代早期のものと思われる集石を3基検出した。遺物は、土器片が数点出土した。その後、下層確認トレンチを設定し、IV層上面までの掘り下げを行った。

4地点で表土剥ぎを行ったところⅢ層が残存していた。そのⅢ層上部で縄文時代晚期のものと思われる集石5基を検出し、IV層まで調査を行った。遺物は、土器片・磨石・石斧が数点出土した。その後、下層トレンチを設定し、IV～Ⅴ層上面まで掘り下げを行った。

## 第4節 縄文時代の調査

### 1 縄文時代早期の調査

縄文時代早期では、遺物・遺構が限られた地点で出土し、集石遺構も集中している。

#### （1）遺構（第4図～第5図）

集石遺構8基が検出されている。3基は調査第2地点の南側のW-12区とW-13区で検出されている。残りの5基は、調査第4地点のS-21区とT-21区の境界線を中心に検出されている。第4地点に集中する密度が高い。

#### 1号集石遺構（第4図）

W-13区で検出されたもので、45×40cmの範囲に広がる。拳大の礫を中心に18個からなる。礫は、集中しているが、ほぼ平坦で掘り込みは見られない。

#### 2号集石遺構（第4図）

W-12区で検出されたもので、110×85cmの範囲に広がる。角張った拳大の礫がほとんどだが、一部、丸みを帯びたものが61個見られる。土器片が3点共伴している。

#### 3号集石遺構（第4図）

W-13区で検出されたもので、70×145cmの範囲に広がる。拳大の礫を中心に21個からなる。礫数も少量でまとまりにかけている。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### 4号集石遺構（第4図）

S-21区の南側、T-22区との境目近くで検出されたもので、140×90cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に87個からなる。集中して礫は見られるが、掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### 5号集石遺構（第4図）

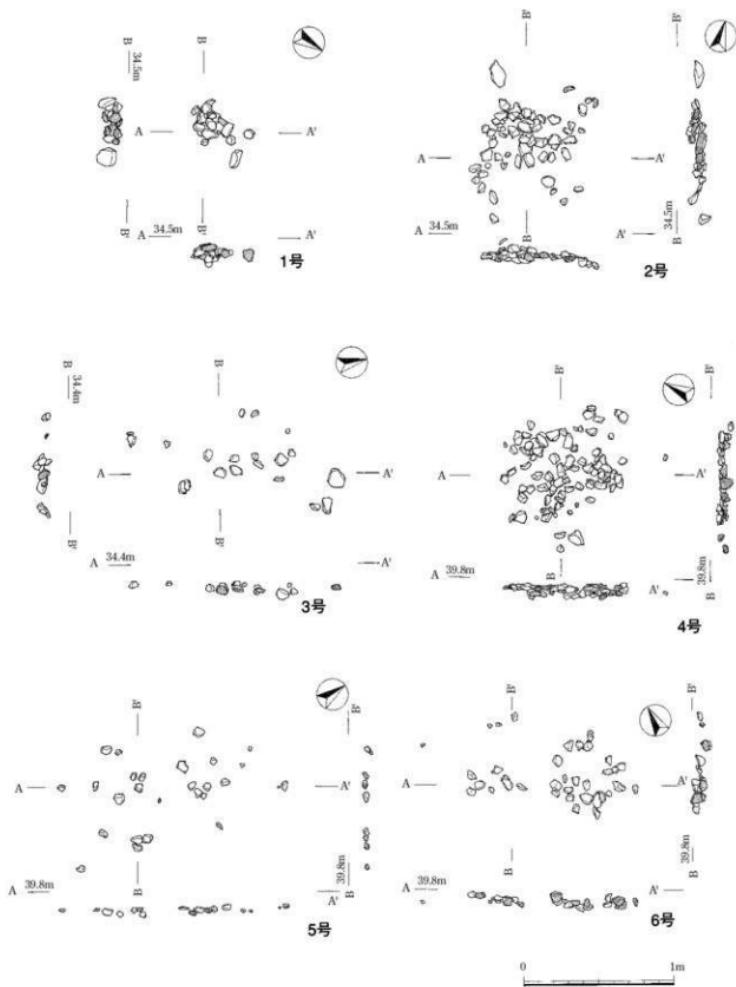
T-21区で検出されたもので、84×153cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に28個がまばらな状態で見られる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### 6号集石遺構（第4図）

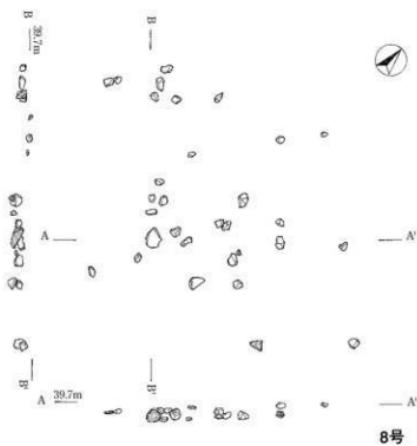
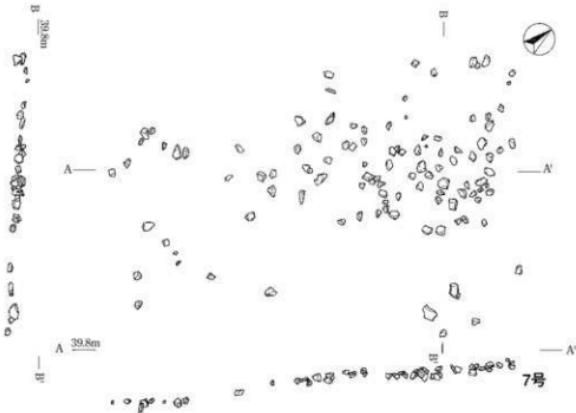
T-21区で検出されたもので、68×144cmの範囲に広がる。角張った礫を中心に35個からなる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### 7号集石遺構（第5図）

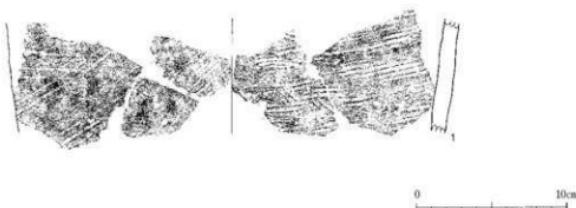
S-21区の南側、T-21区の北側の境目近くで検出されたもので、8基中、最も礫の範囲が広く



第4図 繩文時代早期1～6号集石遺構



第5図 繩文時代早期7・8号集石遺構



第6図 集石造構内遺物

集石造構内遺物観察表

擇回 番号	遺物 番号	層位 出土区	部位	色		調		胎		土		焼成	外 面	内 面	備 考
				内	外	石英	長石	角閃石	石の他						
第6回 1	SS W-12		胴部	にふい黄橙	橙	○	○			良	貝殻条痕文	条痕文	スス		

189×270cmの範囲に広がる。角張った砾を中心には108個からなり北側に集中している。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### 8号集石造構（第5図）

T-21区で検出されたもので、190×150cmの範囲に広がる。拳大の砾を中心に29個からなる。掘り込みは見られず、ほぼ平坦である。

#### （2）造構内遺物（第6図）

##### ①繩文早期土器

1は2号集石内で検出された。外面は不規則な貝殻条痕文。内側は条痕が見られ、表面には煤が付着している。

#### （3）遺物（第7図～第8図）

##### ①土器（第7図）

繩文時代早期の土器は少量で13点を図化することができた。2～6はI類土器、7～10はII類土器、12・13はIII類土器に分類される。

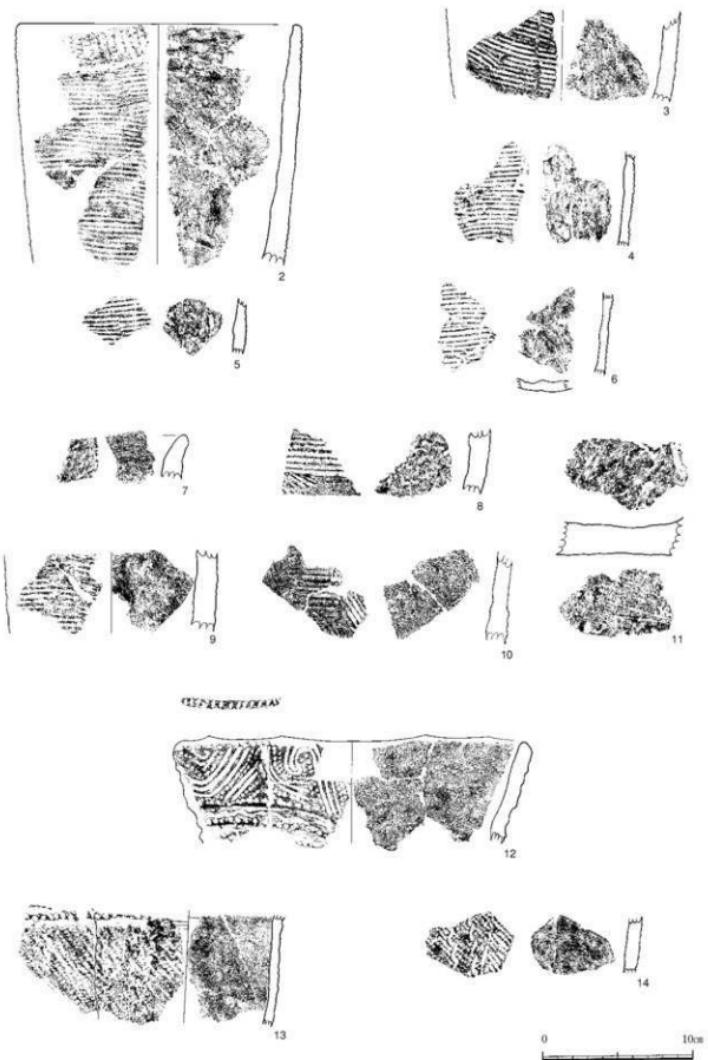
2は口縁径19cmを測る。口縁部に縦位の連続する貝殻刺突文があり、胴部には横位の貝殻条痕文が施

されている。3～6は胴部で横位の貝殻条痕文が施されている。6は角筒の胴部である。7は口縁部が外反し、貝殻による刺突文が斜位に施されている。

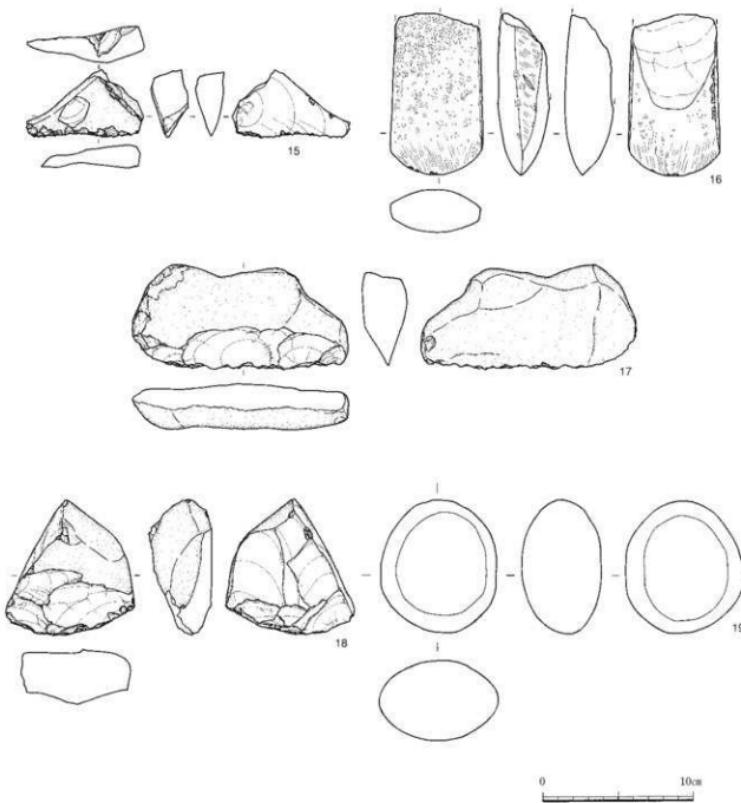
8～10は胴部に綫形状の条痕文が施されている。11は厚みのある底部である。12は口縁部で口縁径が24cmを測る。直径3mmくらいの棒状施具による沈線文、連続刺突文が施されている。13・14は胴部でR Lの一段による結節繩文が施されている。

##### ②石器（第8図）

15は貝岩の縦長剥片を素材とした、スクレイバーで下縁部に剥離調整が施され刃部としている。16は刃部形成に入念な調整が見られる磨製石斧である。表面には敲打痕も見られる。17・18はホルンフェルスの礫器である。17は自然面を多く残し、下部に刃部形成の痕が見られる。18は荒い剥離が行われ自然面を多く残している。19は砂岩を素材とする磨石である。敲打痕などはなく磨石だけの機能を持つ。



第7図 縄文時代早期土器



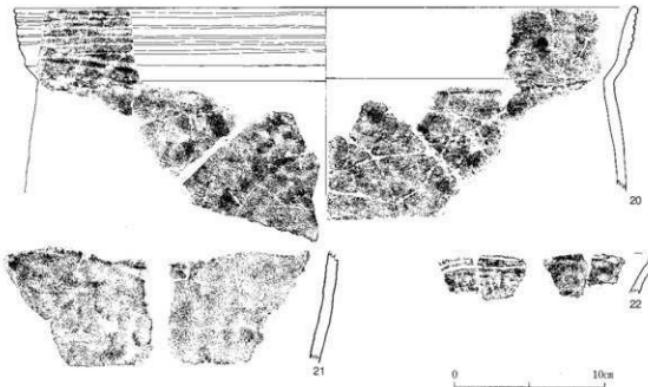
第8図 繩文時代早期石器

縩文時代早期土器観察表

種類 番号	種類 番号	層位 出土区	部位	土器				構成	外 围	内 囲	備 考
				内	外	石質	底形				
2	3'	S-14	口縫部	塊状	にかい縫	○	○	良	貝網目文・貝網条底文	ヘラズリ	
3	3'	S-14	周縫	塊状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
4	3'	S-14	周縫	塊状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
5	3'	S-14	周縫	塊状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
6	3'	S-14	周縫	塊状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
7	3'	S-14	口縫部	块状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
8	3'	—	周縫	块状	○	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
9	3'	S-14	周縫	块状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
10	3'	S-14	周縫	块状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
11	3'	S-14	周縫	块状	にかい縫	○	○	良	貝網条底文	ヘラズリ	
12	3'	S-14	口縫部	块状	にかい縫	○	○	金雲母	藤原文・桂原文	ヘラズリ	
13	3'	S-14	周縫	块状	○	○	○	金雲母	絞物底文	ヘラズリ	
14	3'	—	周縫	块状	にかい縫	○	○	金雲母	絞物底文	ヘラズリ	

縄文時代早期石器観察表

擇因番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	備考
第8回	15	スクレイバー	V-13	M'	頁岩	7.9	4.4	1.4	490	
	16	磨製石斧	-	M'	頁岩	10.7	3.1	2.6	330	
	17	砂器	S-14	M'	ホルンフェルス	7.1	14.45	3.1	395	
	18	砂器	V-8	M'	ホルンフェルス	9.1	8.65	4.25	315	
	19	磨石	-	M'	砂岩	8.8	7.8	5.3	440	



第9図 縄文時代晩期土器

縄文時代晩期土器観察表

擇因番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色		調		胎		土	石英 長石 角閃石 その他の 構成	外 面	内 面	備 考
					内	外	内	外	内	外					
第9回	20	M'	S-14	口縁部～胴部	褐灰～灰黄	浅黄褐	○	○	○	○	良	沈線文	ナデ	ミガキ	
	21	M'	S-14	胴部	灰黄	浅黄褐	○	○	○	○	良	ナデ	ミガキ	ミガキ	
	22	M'	S-14	口縁部	明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	良	沈線文	ミガキ	ミガキ	

## 2 縄文時代晩期の調査

縄文時代晩期は、遺構は検出されなかった。遺物は限られた地点で少数だが出土している。

## (1) 遺物

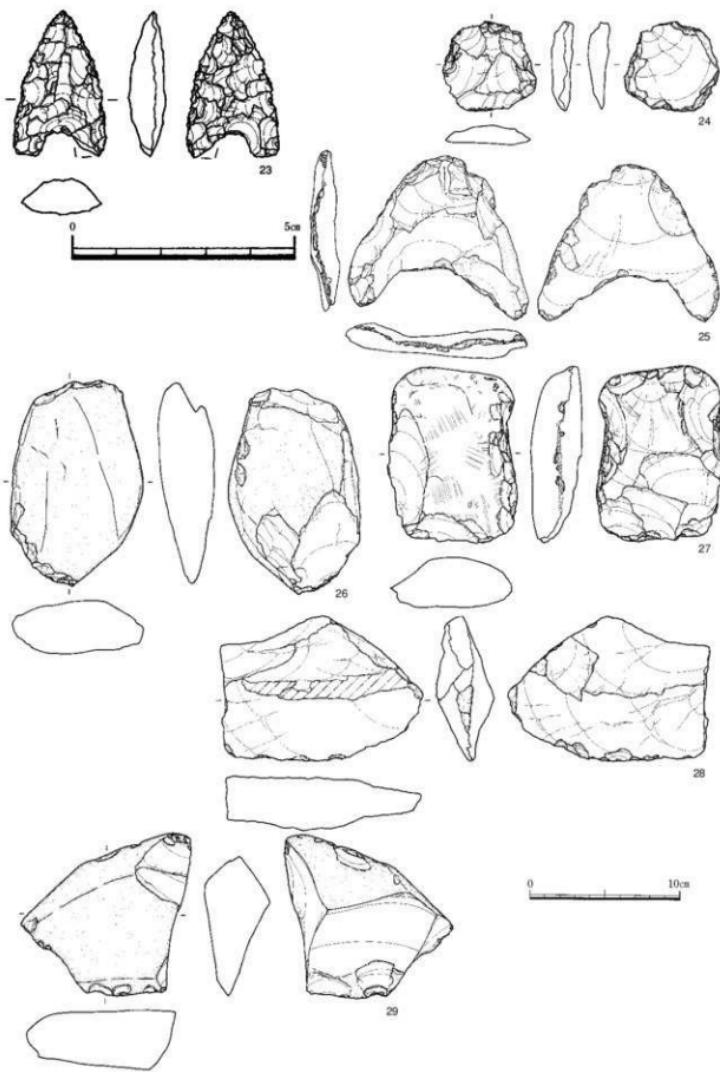
## ①土器（第9図）

20-22は深鉢形土器である。20は口縁径41cmを測る。口縁部に沈線があり、屈曲した頭部から口縁部は外反する。口縁部はわずかに肥厚し、5-6条の沈線文が施される。21は胴部で20と同一個体の可能性がある。22は口縁部である。頭部から外反した口縁部は端部近くで肥厚し直行気味になる。又、2条の沈線文を施す。

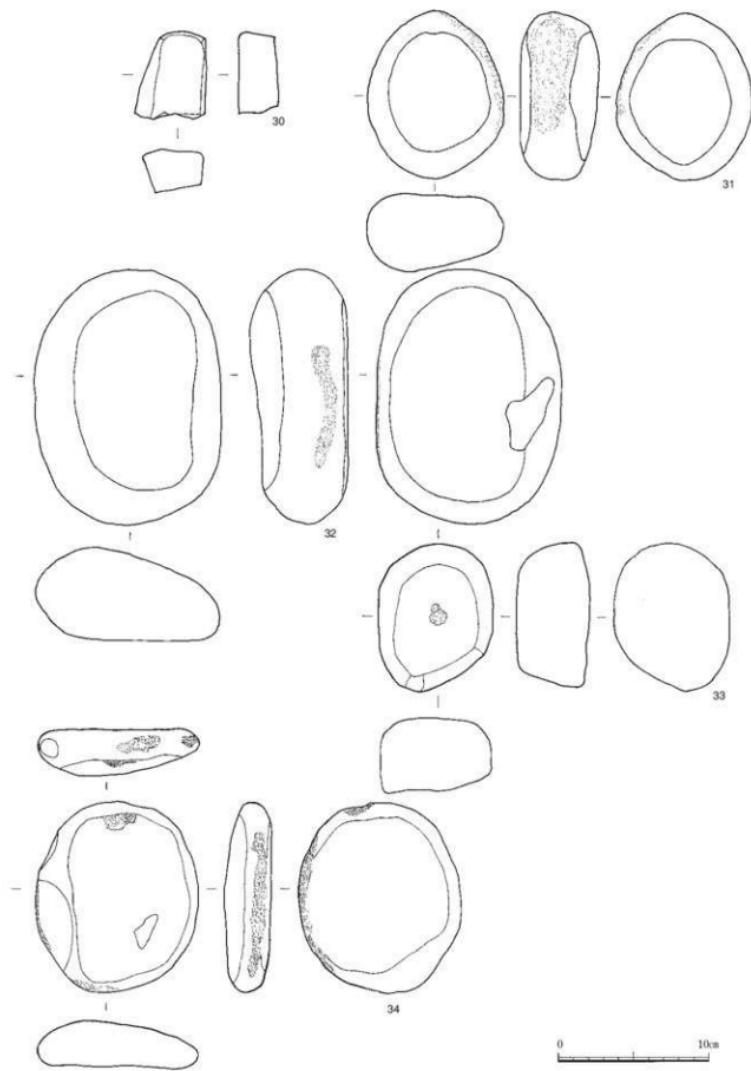
## ②石器（第10図～第12図）

23は打製石鎌で針尾端に類似する黒曜石が使用さ

れている。本報告書P21の農業開発総合センター内の石鎌分類図ではA-b-dに分類される。基端の片方が破損している。24・25はスクレイバーである。24は全体に調整を施している。25は剥離の後、各面に調整の痕が見られる。26は打製石斧である。側面に剥離痕があり、下部は破損している。27-29は櫛器である。27は自然面を多く残し、下部に刃部の形成痕がある。28は安山岩で横長剥片を素材にし、下部に刃部の形成痕がある。29は自然面を残し、下部に刃部の形成痕がある。30は棒状磨石の一端である。砂岩で作業面は片面である。31・32・34は砂岩で磨石と敲石の機能を持ったもので側面に敲打痕がある。33は磨石と凹面の機能を持ったものである。



第10図 繩文時代晩期石器 1



第11図 繩文時代晩期石器 2

縄文時代晩期石器観察表

掲出番号	番号	器種	出土区	層位	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
					cm	cm	cm	g		
第 10 回	23	石鏃	—	—	黒曜石	3.3	1.7	0.8	4.39	A-b-d
	24	スクレイパー	—	—	頁岩	6.4	5.3	1.1	60	
	25	スクレイパー	V-12	Ⅲ	ホルンフェルス	10.75	12	2.1	185	
	26	打削石斧	V-13	Ⅲ	頁岩	11.8	8.7	3.5	465	
	27	穀器	V-13	Ⅲ	ホルンフェルス	13.85	8.95	3.85	550	
	28	穀器	V-11	Ⅲ	安山岩	9.75	13.55	3.9	425	
第 11 回	29	穀器	V-8	Ⅲ	頁岩	11	11.35	4.4	511	
	30	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	5.5	4.6	2.6	150	
	31	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	11.1	9.1	5.2	670	
	32	磨石	—	—	安山岩	16.9	12.3	6.5	2200	
第 12 回	33	磨石	V-14	Ⅲ	砂岩	9.7	7.7	4.9	620	
	34	磨石	V-13	Ⅲ	砂岩	12.7	10.8	3.1	610	



35



36



第12図 古墳時代土器

古墳時代土器観察表

掲出番号	遺物番号	層位	出土区	部位	色				土	焼成	外	内	面	備考
					内	外	石英	長石						
第 12 回	35	—	—	口縁部	橙	橙	○	○	良	ハケ目	ハケ目			
	36	—	—	メンコ	橙	橙	○	○	○	良	ミガキ	ケズリ		

## 第5節 古墳時代の調査

古墳時代では、遺構は検出されなかったが、古墳時代の遺物と思われる土器片が検出された。

### (1) 遺物 (第13図)

35は小型の甕形土器の口縁部である。口径約13.8 cmを測る。内側、外側ともハケ目調整が見られる。36は上器片を加工した土製品で一般にメンコと呼ばれている物で大きさは3×3cmである。

## 第6節 古代の調査

### (1) 遺構

古代の調査では、第1地点で溝状遺構が検出された。精査したところ、平成13年に神原遺跡で検出された古代の溝状遺構の延長であると確認された。神原遺跡では溝内から多くの須恵器・土師器が出土しているが、本遺跡では遺物が見られなかった。神原遺跡と同一の溝であるため、神原遺跡の項でまとめて記述することにした。

## 第7節 小結

頭無遺跡では、縄文時代早期・晩期、古墳時代、古代の遺構・遺物が出土している。農業開発総合センター遺跡群の他の遺跡と比べるとその量は多くはない。しかし、縄文時代早期の前平式土器、石坂式土器、平柄式土器や縄文時代晩期の上加世田式土器が出土していることや神原遺跡と結合される溝状遺構も検出され、他の遺跡と同時期にこの地でも生活が営まれていたことが想像される。

縄文時代早期では、集石遺構が8基検出された。掘り込みのない物ばかりであるが第2地点に3基、第4地点に5基とまとまったところから検出されている。また、2号集石には遺構内遺物として縄文時代早期の土器が出土した。形式分類は不明である。縄文時代早期の土器はI類を前平式土器、II類を石

坂式土器、Ⅲ類を平柄式土器として分類した。特に平柄式土器は農業開発総合センター内では数が少ない。また、スクレイバー、磨製石斧等の石器も検出されている。

縄文時代晚期では、遺構は検出されなかったが、上加世田式土器と思われる沈線文の入った土器が数点、打製石鏃が1点、砂岩の磨石や礫器が数点ずつ検出された。

古墳時代では成川式土器の小型の壺と思われる口縁部や二次加工したメンゴが検出された。

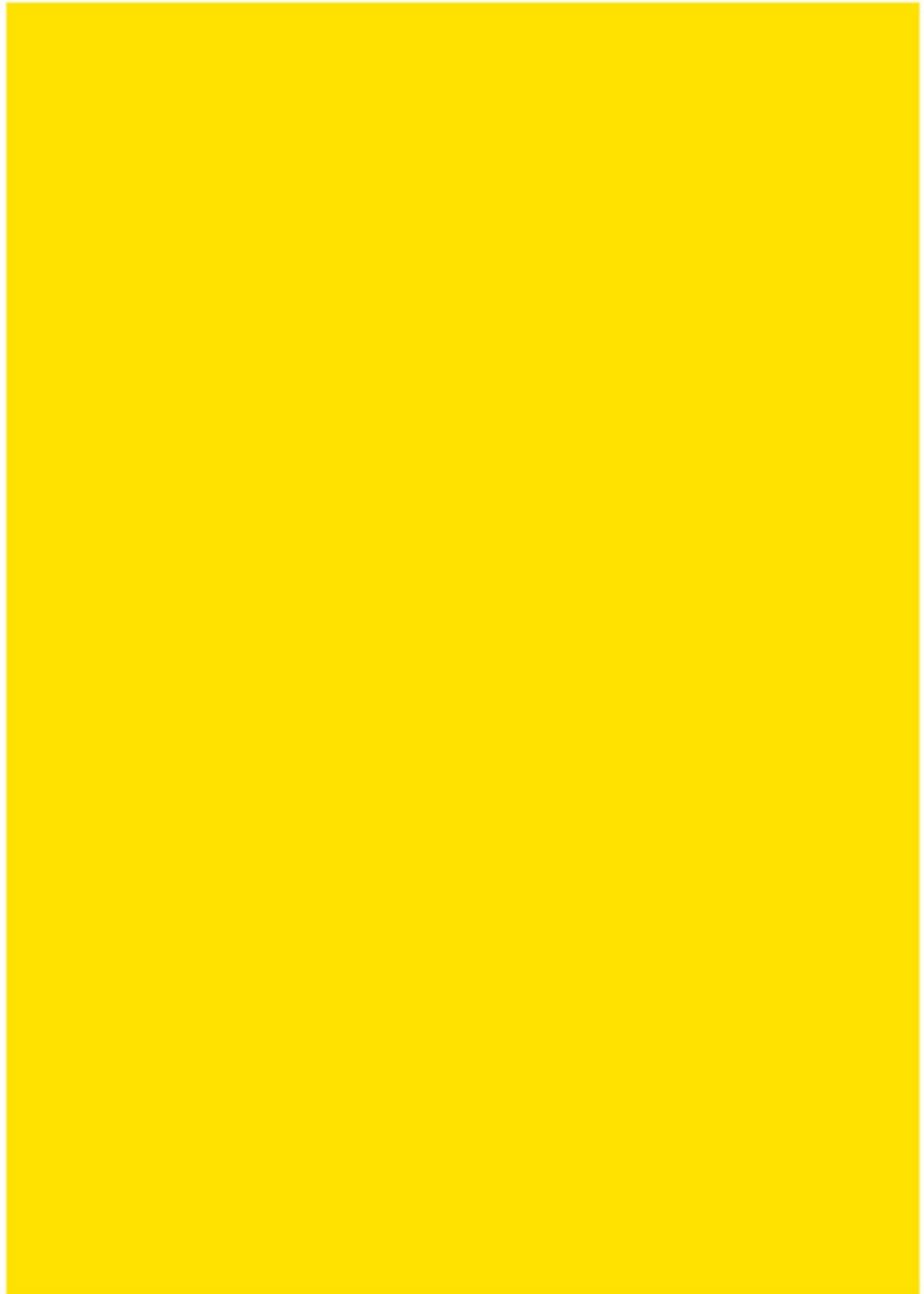
古代では神原遺跡と結合する溝状遺構が検出された。神原遺跡では、遺構内遺物として須恵器等が多数検出されたが、須無遺跡では遺物が検出されなかつた。

須無遺跡では、遺構・遺物の検出・出土が少量であったので、時代ごとの時期などを特定することは難しかつた。

#### ＜参考文献＞

- 1 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（112）  
農業開発総合センター道路群（Ⅴ）「諭訪牛田道路・諭訪前道路・由原内郷道路・諭訪尾原道路」2007年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（98）  
農業開発総合センター道路群（Ⅲ）「尾ノ原遺跡」  
2006年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 3 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（83）  
農業開発総合センター道路群。（第1分冊）「崖見ノ上道路・建石ヶ原道路・古里道路・西原道路」  
2005年3月鹿児島県立埋蔵文化財センター

頭 無 迫 田 遺 跡



## 第Ⅴ章 頭無迫田遺跡の調査成果

### 第1節 調査の経過

頭無迫田遺跡は、平成11年度、12年度、15年度に本調査を実施した。本調査は、1号調整池建設に伴う削平部分、及び作物付帯研究施設建設に係る範囲を対象とした。

#### 平成11年度日誌抄

平成12年

2月 調査開始。表土剥ぎ、掘り下げ。縄文晩期及び早期の遺物が多く出土する。早期集石遺構検出。

3月 掘り下げ継続。早期遺物出土。集石遺構検出。

鹿児島大学上村俊雄教授・本田道輝助教授に現地指導を受ける。

10日調査終了、引渡し。

#### 平成12年度日誌抄

平成13年

2月 表土剥ぎ。Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面での遺構検出。縄文晩期柱穴列検出。中世掘立柱建物跡検出。掘立柱建物跡は隣接の市

堀遺跡の建物と一連のものと思われる。

3月 掘立柱建物跡の調査。21日調査終了。

#### 平成15年度日誌抄

平成15年

10月 遺跡の範囲確認のためのトレッチによる確認調査。上層は削平を受けている範囲が多く、Ⅲ層、Ⅳ層の調査とⅤ層の調査を平行して実施する。Ⅲ層から縄文晩期の遺物出土。Ⅳ層から縄文早期の遺物出土。

11月 Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層掘り下げ。Ⅴ層よりナイフ形石器出土。チャート蝶の集積遺構検出。土坑検出。

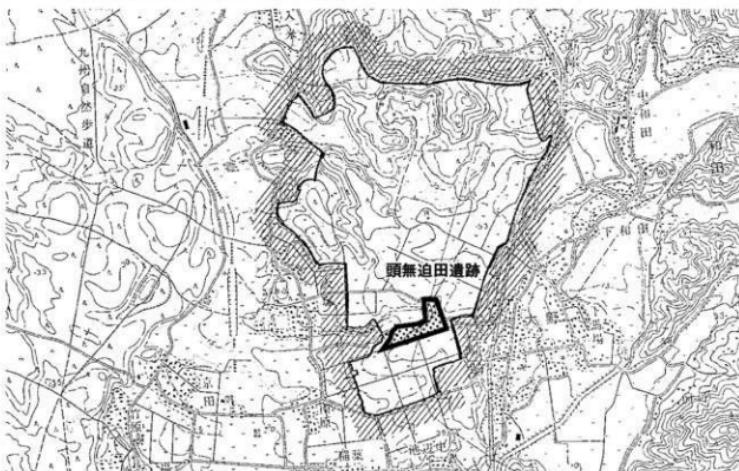
鹿児島大学本田道輝助教授の現地指導。

12月 Ⅳ層掘り下げ、集石遺構検出。Ⅴ層掘り下げ。

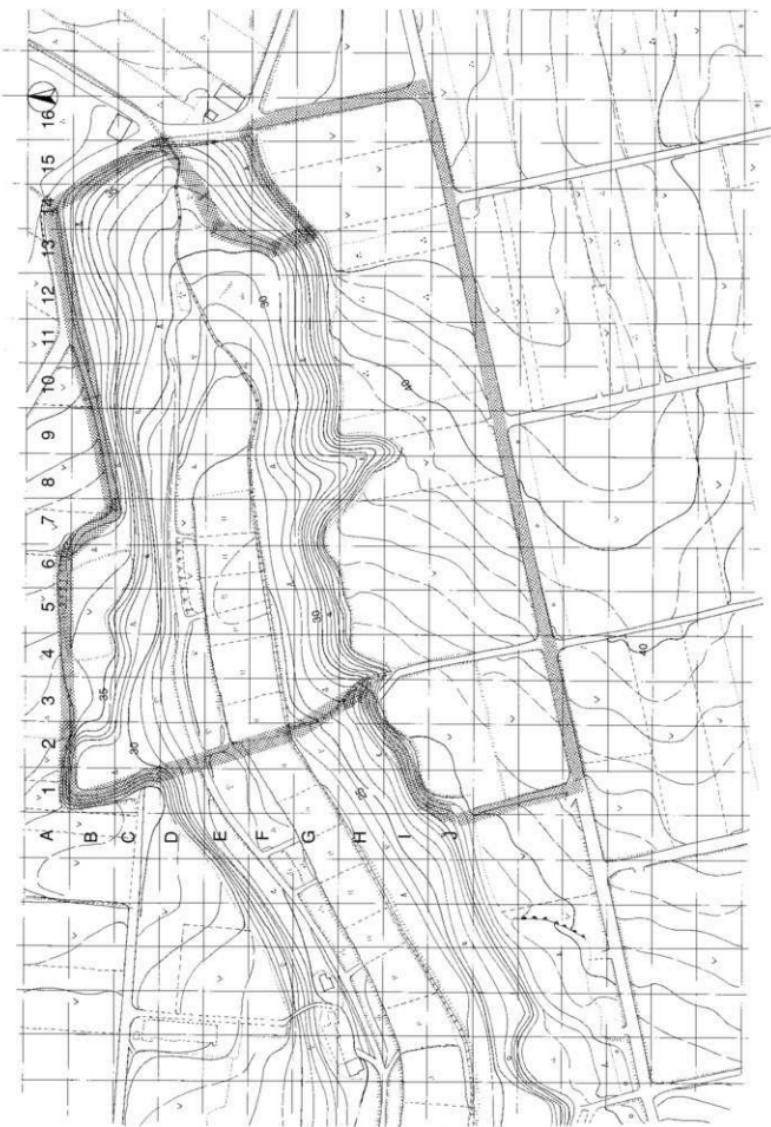
#### 平成16年

1月 Ⅳ層掘り下げ、集石遺構調査（実測・写真撮影）。Ⅴ層掘り下げ。土層断面実測。

2月 下層確認トレッチ調査。土層断面実測。別府大学橋正信教授現地指導。6日調査終了。



第1図 頭無迫田遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 地形図及びグリッド配置図（1グリッド：20 m）